

# 立山曼荼羅の図像描写に対する基礎的研究

—特に諸本の分類について—

福江 充\*

## はじめに

越中立山の山岳宗教に関する絵画史料として立山曼荼羅と称される掛軸式の絵図があり、筆者は現在41点の作品を確認している<sup>(1)</sup>。

さて、こうした立山曼荼羅の分類については、これまで沼賢亮氏・日和祐樹氏・川口久雄氏・林雅彦氏・高瀬重雄氏・岩鼻通明氏等の見解が示されているが、近年、立山曼荼羅の新たな発見が相次ぎ、それらに見られる様々な表現に対し、従来の分類が必ずしも適応できているとは言い難い状況になってきている。

そこで本稿では、現存する41点の立山曼荼羅を題材として、以下、立山曼荼羅の分類について検討を試みたい。

## 1. 立山曼荼羅に描かれた事物の分節と名付け

### 1-1. 立山曼荼羅諸本の現存状況

立山曼荼羅諸本の現存状況、及び各本の素材・形態・幅数<sup>(2)</sup>・法量<sup>(3)</sup>・軸裏銘文の有無・所蔵などに関するデータは第1表に示すとおりである。

さて、筆者は立山曼荼羅に対して以前から、(1)「誰によって描かれたか」、(2)「画面にはモチーフとしてどのような物語や世界観が表現されているか」、(3)「(2)を表現するために、どのような事物の図像が用いられているか」、(4)「(3)の図像がどのような筆致・法量・色彩で描かれ、画面のどの場所に配置されているか」といった問題意識をいだいてきた。

このなかで、(1)については若干例にすぎないが、作品に記された銘文や落款、あるいは作品に添えられた寄進状、作品の制作や寄進に関する事象を記録した文献史料などから判明する場合がある。(2)と(3)についてはこの後に論述するが、統計的な手法を用いた分析により、ある程度の見解を示すことができると考えている。(4)については、制作者の経験や技術・感性に影響されやすく分析する際の規定が困難なため、なかなかとりかかり難い問題である。

とりあえず、第1章で対象とするのは(3)の問題だが、立山曼荼羅に描かれている物語や世界観については既存の研究成果に委ねるとし、ここでは、画面に描かれている数多くの事物について検討を試みたい。その際、筆者は、画家として全く素人である自分が、

\*富山県 [立山博物館]

既存の立山曼荼羅を模写して新しい立山曼荼羅を制作するには、いかなる方法が有効であるかといった発想にもとづいて取り組むことにした。

## 1-2. 立山曼荼羅の画面区分

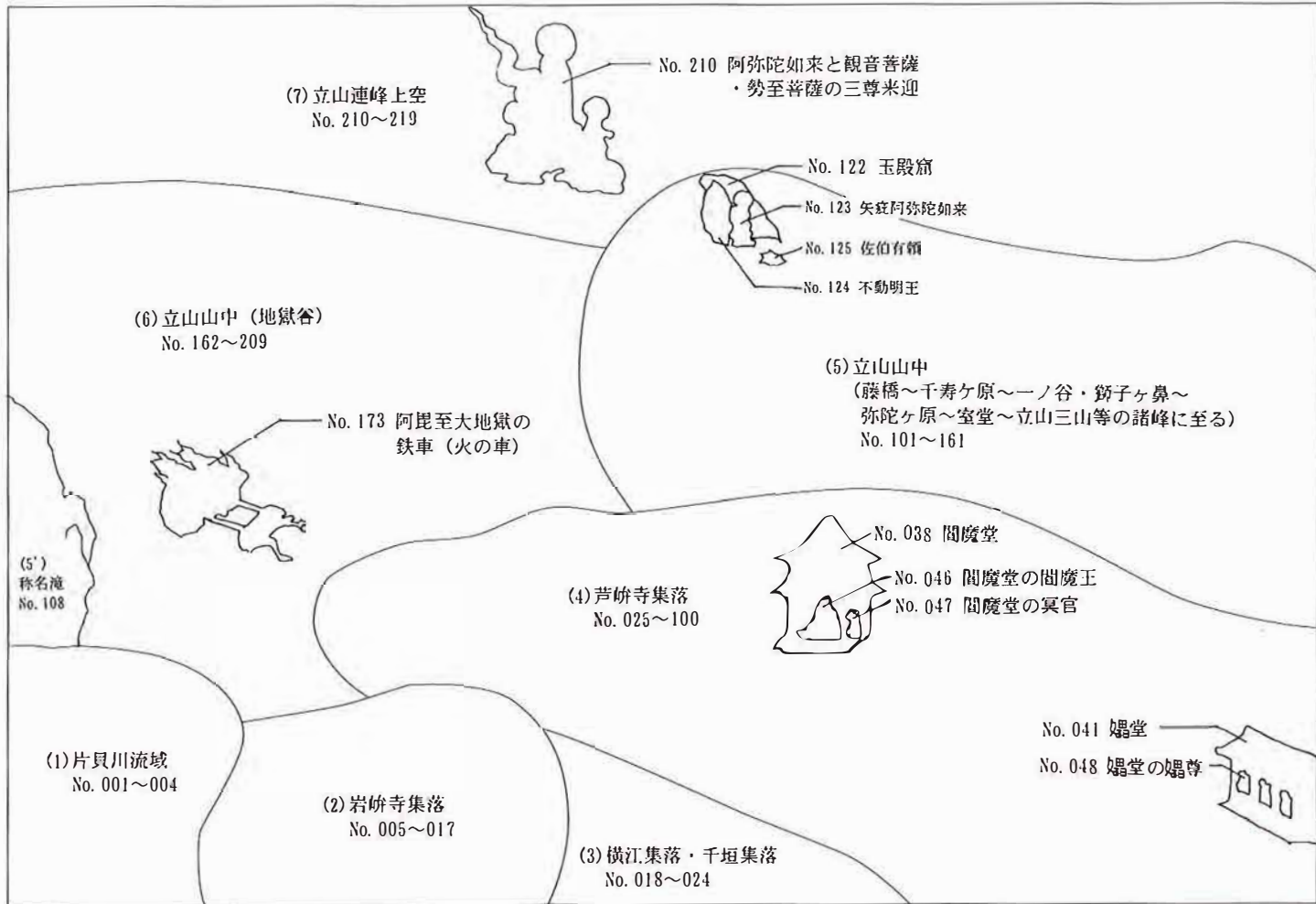
立山曼荼羅を模写制作する場合、それに含まれるべき各種物語を想像し、参考作品を眺めながらいきなり気が向いた場面から該当の図像を描き始めたのでは決してうまくいかないであろう。最初は快調に描くことができても図像が増えるに従って次第に手詰まりとなり、画面にうまく収めることができなくなるに違いない。やはり、あらかじめ構図を定め、画面をおおよそ区分して、どの場所にどの図像をどれくらいの法量で描くかといった目安を立てておく必要がある。

さて、ここで問題となるのは、一体何にもとづいて画面を区分するかである。まず思いつくのは、立山衆徒が立山曼荼羅を檀那場の信徒に絵解きした際の大まかな内容区分、すなわち(1)立山開山縁起、(2)立山地獄、(3)立山浄土、(4)芦峯寺布橋灌頂会、(5)立山禅定登山案内の5つの物語に合わせて区分する方法である。しかし、これは、できあがった作品の内容を絵解きする際にはきわめて効果的な区分けとなるものの、制作の際には、(1)立山開山縁起や(5)の立山禅定登山案内に関する図像を描こうとすると顕著に表れることだが、一つの物語を成立させるために画面上をあちこち飛び飛びに移動しながら図像を描き込む必要があり、あるいは他の問題点として、一つの図像に対し幾つかの物語が複合する場合もありひじょうに描き難い。

それではどのような区分が効果的であるか。現存する41点の立山曼荼羅を見ていくと、芦峯寺布橋灌頂会の内容だけしか描かれていない『日光坊A本(1幅)』を除いた他の全ての作品の基本的な構図は次のような傾向をもつ。まず、立山連峰の雄山・大汝山・浄土山・別山・剣岳といった諸峰の山並みがあり、山並みを境界線として、その上方には空の空間、山並みの下方には山中の空間がある。そして山中の空間の下方には山麓集落の空間がある。そこで筆者は、立山曼荼羅の画面を第1図に示すように各空間ごとに区分し、それぞれの空間を下地マットと考え、その上にどのような事物の図像を乗せていけばよいか、といった発想で、空間ごとに該当の図像を描き込んでいけば比較的バランスよく制作できることを確信した。

実際に、上記の手順で新しい立山曼荼羅を制作する機会にはまだ恵まれていないが、そのかわり、本稿において立山曼荼羅の事物の分節作業にこの発想を活用していくことにした。なおその際、山中の空間については二分し、一つの領域として藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰までに至る空間を

第1図：立山曼荼羅の画面区分



福江 亮 / 立山曼荼羅の図像描写に対する基礎的研究

(井田一美氏作成)

設定し、もう一つの領域として地獄谷の空間を設定した。また、山麓集落の空間については、片貝川流域、岩嶺寺集落、横江集落・千垣集落、芦嶺寺集落に細分化して設定した。

再度整理しておくとな次のような区分になる。(1)「片貝川流域」、(2)「岩嶺寺集落」、(3)「横江集落・千垣集落」、(4)「芦嶺寺集落」、(5)「立山山中一藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰に至る」、(6)「立山山中一地獄谷」、(7)「立山連峰上空」。

### 1-3. 立山曼荼羅に描かれた事物の分節と名付け

立山曼荼羅を分析・読解するための基本作業として、まず、画面に描かれている数多くの事物のうち219項目を分節し、それぞれの事物の内容や意味に適した名前を付けた。この作業に当たっては、特定の立山曼荼羅からのみ分節・名付けを行ったわけではなく、あらかじめ現存が確認されている41点の立山曼荼羅全作品を一覧し、筆者の判断で必要に応じそれぞれの作品から適宜事物を抽出し、文節・名付けを行った。さらに、41点の立山曼荼羅全作品を対象として、前述の219項目の事物について描写の有無を調査したが、その結果は第2表に示すとおりである。

表中、縦軸項目は分節・名付けを行った事物を示し、その配列は前節の画面区分にもとづき概ね地域別で進め、(1)「片貝川流域」→(2)「岩嶺寺集落」→(3)「横江集落・千垣集落」→(4)「芦嶺寺集落」→(5)「立山山中一藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰」→(6)「立山山中一地獄谷」→(7)「立山連峰上空」の順に配列している。

表中、横軸項目は立山曼荼羅各作品を示している。

さて、ここで筆者は、論の展開においては後先が逆になるが、読者が分析内容を表と照合させて見た場合、理解しやすいように、また、筆者自身が分析内容の記述をしやすくするための便法として、あらかじめ立山曼荼羅各作品の見た目からラフな形で暫定的に「芦嶺寺系立山曼荼羅」・「岩嶺寺系立山曼荼羅」・「その他の立山曼荼羅」の3種類に分類しておいた。

なお、ここで筆者が暫定的に定義付けた「芦嶺寺系立山曼荼羅」とは、画中において芦嶺寺に関する事物、すなわち、境内地の諸々の宗教施設やその尊格、宿坊群、祭礼及びその参加者などに意識が置かれて描かれている作品のことである。ただし、必ずしもこれら全ての内容を満たさなくてもよい。「岩嶺寺系立山曼荼羅」とは、画中において岩嶺寺に関する事物、すなわち、境内地の諸々の宗教施設やその尊格、宿坊群等に意識が



置かれ描かれている作品のことである。ただし、必ずしもこれら全ての内容を満たさなくてもよい。「その他の立山曼荼羅」とは、芦峯寺や岩峯寺に対しては、それほど意識が置かれずに描かれた、どちらかといえば曼荼羅風というよりは山絵図風の趣をもった作品のことである。

そして、この暫定的な定義にもとづき、表中では向かって左端から芦峯寺系各作品として(1)『坪井家A本』・(2)『来迎寺本』・(3)『大江寺本』・(4)『最勝寺本』・(5)『多賀坊本』・(6)『稲沢家本』・(7)『立山開発鉄道本』・(8)『龍光寺本』・(9)『大徳寺本』・(10)『大仙坊B本』・(11)『相真坊B本』・(12)『大仙坊A本』・(13)『宝蔵坊旧蔵本』・(14)『善道坊本』・(15)『佐伯家(省次)本』・(16)『坪井家B本』・(17)『相真坊A本』・(18)『宝泉坊本』・(19)『吉祥坊本』・(20)『越中書林本』・(21)『富山県立図書館本』・(22)『泉蔵坊本』・(23)『立山町本』・(24)『坂木家本』・(25)『日光坊B本』・(26)『玉泉坊本』・(27)『日光坊A本』の順に配置し、次に、岩峯寺系各作品として(28)『玉林坊本』・(29)『中道坊本』・(30)『西田美術館本』・(31)『桃原寺本』・(32)『伊藤家本』・(33)『竹内家本』・(34)『志鷹家本』・(35)『市神神社本』・(36)『高橋家旧蔵本』の順に配置し、さらに、その他の各作品として(37)『称念寺A本』・(38)『称念寺B本』・(39)『村上家本』・(40)『藤縄家本』・(41)『称名庵本』の順に配置した。その際、各系統間における作品の配列順については、作品相互の間で構図や図像に特徴的な類似<sup>(4)</sup>や模写関係・制作方法<sup>(5)</sup>がうかがわれる作品どうしをなるべく隣り合わせにし、複数本に模写関係が見られる場合はそれらをグルーピングして配置した。

同表中、各事物について描写が有れば●印で、無ければ×印で、判定が困難な場合は△印で示し、作品別や項目別に統計処理も行っている。なお、本章では事物の図像の有無だけを対象とし、図像の具体的な形状や色彩については言及するものではない。

## 2. 図像の有無に見る立山曼荼羅であるための条件

### 2-1. 立山曼荼羅諸本における事物の描写傾向

第2表に示すように立山曼荼羅には様々な事物が描き込まれているが、以下、立山曼荼羅諸本における事物の描写傾向を(1)片貝川流域、(2)岩峯寺集落、(3)横江集落・千垣集落、(4)芦峯寺集落、(5)立山山中一藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰、(6)立山山中一地獄谷、(7)立山連峰上空の地域順に検討していきたい。

#### (1) 片貝川流域

第2表において、縦軸のNo.001～004の図像は片貝川流域と常願寺川を舞台として描

かれ、特にNo.001～003の図像は立山開山伝説の一場面を構成している。これらの図像は、芦峯寺系立山曼荼羅においては強く意識され、それに比べ岩峯寺系立山曼荼羅においては意識が希薄で、その他の立山曼荼羅においては全く意識されていない。

#### (2) 岩峯寺集落

No.005～017の図像は岩峯寺集落を舞台として描かれている。これらの図像は、岩峯寺系立山曼荼羅においては強く意識され、特に「御社壇」・「拜殿」・「講堂」の図像は明確に描かれている。一方、芦峯寺系立山曼荼羅やその他の立山曼荼羅において岩峯寺集落は全体的な表現として必ず描かれているが、例えば「御社壇」・「拜殿」・「講堂」などの細部の図像は曖昧に表現されている。

#### (3) 横江集落・千垣集落

No.018～024の図像は横江集落と千垣集落を舞台として描かれている。これらの図像について、立山開山伝説に関するもの、すなわち、熊を射る佐伯有頼（あるいは手負いとなって逃げる熊を追う佐伯有頼）や白鷹の図像は芦峯寺系立山曼荼羅、岩峯寺系立山曼荼羅、その他の立山曼荼羅のそれぞれのなかである程度意識が置かれているが、それ以外の図像については芦峯寺系立山曼荼羅と岩峯寺系立山曼荼羅においてはある程度意識が置かれているものの、その他の立山曼荼羅においては、それよりもやや意識が低い。

#### (4) 芦峯寺集落

No.025～081の図像は芦峯寺集落を舞台として描かれている。これらの図像は芦峯寺系立山曼荼羅においては強く意識され、そのなかでも特に「布橋灌頂会」に関する図像は重点的に描かれている。一方、岩峯寺系立山曼荼羅やその他の立山曼荼羅においては芦峯寺集落が全体的な表現として必ず描かれ、さらに「嬬堂」や「布橋」などの芦峯寺一山の中核施設の図像も簡潔に描かれるが、それ以外の内容については全く描かれていない。

#### (5) 立山山中 藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰

No.101～161・No.216～219の図像は、藤橋～千寿ヶ原～美女平～一ノ谷・獅子ヶ鼻～弥陀ヶ原～室堂～立山三山などの諸峰を舞台として描かれている。No.122～125の図像は立山開山伝説のクライマックスの場面である。No.122「立山開山伝説における玉殿窟の場面、あるいは窟自体」の図像は、芦峯寺系(1)～(26)、岩峯寺系(28)～(36)、その他の(37)・(38)・(40)・(41)に描かれ、全作品41点中39点で約95%の確立となり立山曼荼羅であるための必携要素といえる。なお、この図像が描かれていない作品は、全体画面が布橋灌頂会の図像だけで構成されている(27)と、元来は複数幅の作品であったものが現在はその一部の幅だけ残っている(39)である。No.123「玉殿窟に顕現した矢疵阿弥陀如

来、あるいは矢疵がない阿弥陀如来、僧など」の図像は芦峯寺系(1)～(4)・(7)～(23)、岩峯寺系(28)～(33)・(36)、その他の(37)・(40)に描かれている。No.124「玉殿窟に顕現した不動明王」の図像は、芦峯寺系(1)・(5)～(8)・(10)～(23)、岩峯寺系(36)に描かれているが、芦峯寺系作品で強く意識され、それ以外の系統作品では意識が弱い図像であることがわかる。No.125「阿弥陀如来顕現の靈験にひれ伏す佐伯有頼」の図像は、芦峯寺系(1)～(25)、岩峯寺系(28)～(33)・(36)、その他の(37)・(40)に描かれている。神仏分離令にもとづく廃仏毀釈の影響を受け、神道色を強く打ち出した図像内容をとっている(26)や、全体画面が布橋灌頂会の図像だけで構成されている(27)、木版の立山禪定登山案内図を拡大模写して制作した(35)、称名庵の縁起を主要なモチーフとした(41)では、立山開山伝説に対する意識は弱いようである。No.105～119の図像は立山の女人禁制伝説に関するものである。No.105「材木坂」の図像は、芦峯寺系(1)～(26)、岩峯寺系(28)～(31)・(33)～(36)、その他の(37)・(38)・(40)・(41)に描かれ、全作品41点中39点で約92%の確立となり立山曼荼羅の画中においてはかなり重要な図像といえる。No.106とNo.107は一対的な図像で、芦峯寺系(1)～(2)・(7)～(19)・(21)～(26)、岩峯寺系(28)～(31)・(33)～(36)、その他の(38)・(41)に描かれている。なお(37)には「禿杉」の図像だけ描かれている。No.118とNo.119も一対的な図像で、芦峯寺系(1)・(7)～(19)・(21)～(26)、岩峯寺系(33)～(36)、その他の(38)・(41)に描かれている。なお、(2)には「燻石」の図像だけ、(37)・(39)には「鏡石」の図像だけが描かれている。また、(3)～(6)・(20)・(27)・(28)～(32)・(40)においては、全く描かれていないか、あるいは何らかの図像が描かれていても識別できない。No.108・No.112・No.114・No.136～142・No.155～157・No.161の図像は称名滝や立山連峰の諸峰、獅子ヶ鼻、立山温泉など、立山の自然景観に関するものである。No.108「称名滝」の図像は芦峯寺系(1)～(26)、岩峯寺系(28)～(31)・(34)～(36)、その他の(37)～(41)に描かれ、全作品41点中39点で約95%の確立となり、立山曼荼羅の必携要素といえる。No.136「雄山」の図像は(27)以外、全ての作品に描かれ、立山曼荼羅にとっては最も重要な図像である。No.140「浄土山」の図像は芦峯寺系(1)・(2)・(4)～(26)、岩峯寺系(28)～(31)・(33)～(36)、その他の(37)・(38)・(41)に描かれている。No.141「別山」と「劔岳」の図像は、(1)～(26)、岩峯寺系(28)～(36)、その他の(37)・(38)・(41)に描かれている。これら4峰の図像は87%以上の確立で描かれ、立山曼荼羅にとっては重要な図像といえる。No.139「富士形」の図像は、芦峯寺系(7)・(10)・(13)～(19)・(21)・(22)・(26)、岩峯寺系(32)・(35)、その他の(39)に描かれている。No.161「立山温泉」の図像は芦峯寺系作品には描かれず、岩峯寺系(29)・(33)～(35)、その他の(41)に描かれている。No.102・No.111・No.120・No.



128～135・No.143～146・No.148の図像は立山山中の施設の図像である。このなかで、No.120「室堂」は(27)・(32)以外全ての作品に描かれ、また、No.135「立山頂上社殿」も(27)以外全ての作品に描かれ、いずれも95%以上の確立で、立山曼荼羅においては極めて重要な図像である。さらに、No.102「藤橋」・No.130～No.133「一ノ越～四ノ越」・No.「別山の堂舎」・No.148「劔岳の塔(自然の塔)」のいずれの図像も、約87%以上の確立で描かれ強く意識されている。No.112～No.116は一ノ谷の鎖禪定に関する図像である。No.112「一ノ谷の鎖場」の図像は、芦峯寺系(2)～(4)・(6)～(26)、岩峯寺系(28)～(36)、その他の(37)・(38)・(40)・(41)に描かれ、全作品41点中37点で約90%の確立となる。さらにNo.113「一ノ谷の鎖場を登る禪定登山者」の図像は、芦峯寺系(2)～(4)・(6)～(25)、岩峯寺系(28)～(32)・(34)、その他の(37)・(38)・(40)・(41)に描かれている。No.114「獅子ヶ鼻」の図像は、芦峯寺系(1)・(4)・(7)～(20)・(24)～(26)、岩峯寺系(28)～(30)・(32)・(34)・(35)、その他の(37)・(41)に描かれている。No.115「弘法大師の護摩供養」の図像は、芦峯寺系(4)・(7)・(13)・(17)～(19)・(21)・(22)・(24)、岩峯寺系(28)・(29)に描かれ、その他の作品には描かれていない。No.116「扇掛けの松」の図像は、芦峯寺系(1)～(3)・(7)・(9)～(16)・(18)～(25)、岩峯寺系(28)～(30)・(32)に描かれ、その他の作品には描かれていない。No.151・No.147は「立山山上で礼拝する人物」の図像である。No.151「立山頂上社殿で礼拝する禪定登山者」の図像は、芦峯寺系(2)・(4)・(8)～(16)、岩峯寺系(29)・(31)、その他の(40)に描かれている。No.147「別山山頂から劔岳を礼拝する禪定登山者」の図像は、芦峯寺系(2)・(3)・(8)～(10)・(18)・(19)・(21)・(22)・(24)・(26)、岩峯寺系(30)に描かれ、芦峯寺系作品ではある程度意識されているが、岩峯寺系やその他の作品では意識が弱い。

#### (6) 立山山中 地獄谷

No.162～209の図像は立山地獄に関するものである。これらの図像については、芦峯寺系立山曼荼羅においては他の六道十王図などに見られる既存の多くの図像を用い、かなり具体的かつ執拗に描かれている。一方、岩峯寺系立山曼荼羅においてもある程度詳細に描かれているものの、芦峯寺立山曼荼羅よりも図像数は少なく、画面空間に対する図像密度から捉えても若干希薄なイメージを与えている。その他の立山曼荼羅においては曼荼羅的というよりは山絵図的な要素が強く、地獄の場面に対して意識こそあれ、具体的な図像表現となるときわめて希薄である。

#### (7) 立山上空

No.210～215・No.126・No.127の図像は立山上空を舞台として描かれている。このうち、立山浄土の表現は作品41点中35点に描かれ、その確立は約85%である。岩峯寺系立



山曼荼羅とその他の立山曼荼羅には飛天の圖像が描かれていない。

## 2—2. 圖像の有無に見る立山曼荼羅であるための条件

立山曼荼羅41点の作品中39点以上の作品に見られる圖像には(95%以上の確立)、No.108「称名滝」・No.120「室堂(小屋)」・No.122「立山開山伝説における玉殿窟の場面、あるいは窟そのものを表す圖像」・No.135「立山頂上社殿(立山峰本社)」・No.136「雄山」がある。なお、これらの圖像が見られない立山曼荼羅は、布橋灌頂会の場面だけを描いた『日光坊A本(1幅)』と、本来は複数幅だったものが現在は1幅だけ残っている『村上家本』である。

立山曼荼羅41点の作品中33点以上の作品に見られる圖像には(80%以上の確立)、上記の圖像に加えNo.005「岩嶺寺の集落(全体的な表現)」・No.025「芦嶺寺の集落・境内地(全体的な表現)」・No.039「布橋」・No.041「嬬堂」・No.102「藤橋」・No.105「材木坂」・No.106「美女杉」・No.107「禿杉」・No.112「一ノ谷の鎖場」・No.113「一ノ谷の鎖場を登る禅定登山者」・No.125「阿弥陀如来顕現の靈験にひれ伏す佐伯有頼(慈興上人)」・No.130「一ノ越」・No.131「二ノ越」・No.132「三ノ越」・No.133「四ノ越」・No.140「浄土山」・No.141「別山」・No.142「劔岳」・No.146「別山の堂舎」・No.148「劔岳の塔(自然の塔)」・No.187「血の池地獄」・No.205「賽の河原」がある。

立山曼荼羅41点の作品中29点以上の作品に見られる圖像(70%以上の確立)は第3表に示すとおりであるが、上記の圖像に加えNo.018「白鷹」・No.019「熊を射る佐伯有頼、あるいは手負いとなって逃げる熊を追いかける佐伯有頼」・No.020「矢を射られた熊」・No.043「宿坊家や門前百姓家の集合体(芦嶺寺)」・No.123「玉殿窟に顕現した矢疵阿弥陀如来、あるいは矢疵のない阿弥陀如来、僧など」・No.129「祓堂」・No.145「浄土山の堂舎」・No.173「阿毘至大地獄の鉄車(火車)」・No.197「畜生道」・No.204「針山地獄(劔岳)」・No.206「賽の河原の地藏菩薩」・No.207「賽の河原で石積みをする子供たち」・No.214「月輪」がある。

上記の傾向から、ある絵画史料が立山曼荼羅であるために最低限度描かれていなければならない圖像は、雄山と立山頂上社殿・室堂・称名滝・立山開山伝説における玉殿窟の場面であることがわかる。そして、以下の内容が充実するほど、より立山曼荼羅らしくなる。

### A. 山麓の集落

岩嶺寺の集落と芦嶺寺の集落・境内地が全体的な表現として描かれている。ただし、そのなかで特に芦嶺寺については布橋と嬬堂が象徴的に描かれている。以上の圖像につ

いては、必ずしも細密な描写でなくてよい。

#### B. 立山開山伝説

熊を射る佐伯有頼、あるいは手負いとなって逃げる熊を追いかける佐伯有頼が描かれている。また、立山開山伝説においてクライマックスの場面の舞台となる玉殿窟が描かれ、そこに顕現した矢疵阿弥陀如来とその靈験にひれ伏す佐伯有頼（慈興上人）が描かれている。

#### C. 禪定登山名所と難所修行

禪定登山道の名所として藤橋・材木坂・美女杉・禿杉・称名滝が描かれている。難所修行の場面として一ノ谷の鎖場と同行場を登る禪定登山者が描かれている。

#### D. 山岳と山上堂舎

雄山と立山頂上社殿・浄土山とその堂舎・別山とその堂舎及び硯ヶ池・劔岳とその自然の塔が描かれている。なお、雄山については、稜線に沿って祓堂や一ノ越から四ノ越が描かれている。

#### E. 室堂

室堂小屋が描かれている。

#### F. 立山地獄

阿毘至大地獄の鉄車（火車）・血の池地獄・賽の河原・畜生道・針山地獄（劔岳）が描かれている。阿毘至大地獄の鉄車は例外であるが、現地の地形や景観にもとづく地獄が第一義的なものとして描かれている。

### 2-3. 芦峯寺系作品の画面において含有率が高い図像

前節で暫定的に芦峯寺系立山曼荼羅と見なした27点の作品中、全作品に見られる図像は、No.025「芦峯寺の集落・境内地（全体的な表現）」である。また、26点の作品に見られる図像は、上記のNo.025に加え、No.039「布橋」・No.105「材木坂」・No.108「称名滝」・No.120「室堂（小屋）」・No.122「立山開山伝説における玉殿窟の場面、あるいは窟そのものを表す図柄」・No.135「立山頂上社殿」・No.136「雄山」・No.141「別山」・No.142「劔岳」である。

ところで、芦峯寺系27作品のうちの1点としている『日光坊A本（1幅）』は、布橋灌頂会の場面だけが描かれた特異な作品である。これを立山曼荼羅として位置づけるか否かは今後まだまだ検討の余地があろう。それゆえ、26点の作品に見られる図像は、実質的には全ての芦峯寺系作品に含まれたものといってよい。

続けて、22点以上の作品に見られる図像（80%以上の確立）は第4表に示すとおりで

ある。傾向としては、当然のことながら芦峯寺の集落や境内地及びそこで行われる祭礼に関する図像が重視されており、また、地獄の場面については、賽の河原や劔岳の針山地獄・血の池地獄・畜生道など、立山山中の実景観にもとづく図像が重視されている。獅子ヶ鼻・一ノ谷の鎖禪定に関する図像も比較的重視されている。

#### 2-4. 岩峯寺系作品の画面において含有率が高い図像

前節で暫定的に岩峯寺系立山曼荼羅と見なした9点の作品中、全作品に見られる図像は、No.005「岩峯寺集落(全体的な表現)」・No.010「拜殿(岩峯寺)」・No.013「諸末社(岩峯寺)」・No.014「宝塔(岩峯寺)」・No.016「宿坊家や門前百姓家の集合体(岩峯寺)」・No.112「一ノ谷の鎖場」・No.122「立山開山伝説における玉殿窟の場面、あるいは窟そのものを表す図像」・No.135「立山頂上社殿」・No.136「雄山」・No.141「別山」・No.142「劔岳」・No.146「別山の堂舎」・No.148「劔岳の塔」・No.157「別山の硯ヶ池」・No.158「山中諸堂舎」の図柄である。

さらに、7点以上の作品に見られる図像(約78%以上の確立)は第5表に示すとおりである。

#### 2-5. 芦峯寺に関わる事物の図像以外で、芦峯寺系作品には見られるが、岩峯寺系作品には見られない図像

芦峯寺に関わる事物の図像以外で、芦峯寺系立山曼荼羅には見られるが、岩峯寺系立山曼荼羅には見られない図像には次のものがある。No.002「鷹狩りに出かけた佐伯有頼」・No.003「鷹狩りに出かけた佐伯有頼の家臣」・No.024「三途の川に架かる橋」・No.101「三途の川・死出の山の道標」・No.103「藤橋を渡ろうとする道元禅師」・No.104「藤橋の猿」・No.117「弥陀ヶ原の精霊田」・No.149・No.150「劔岳の貴人(女性・男性)」・No.153「天狗姿の金蔵坊」・No.154「天狗山の天狗」・No.160「雷鳥などの鳥類」・No.176「獄卒が亡者に釘を打ち込む」・No.180「鶏が亡者を襲う(鶏地獄)」・No.181「刀葉林地獄」・No.199「片袖幽霊譚」・No.203「施餓鬼法要会に結縁する蓮を被った人物」・No.212「飛天」などである。

#### 2-6. その他の作品の画面において含有率が高い図像

前節で暫定的にその他の立山曼荼羅と見なした5点の作品中、全作品に見られる図像は、No.108「称名滝」・No.120「室堂(小屋)」・No.129「祓堂」・No.130「一ノ越」・No.131「二ノ越」・No.132「三ノ越」・No.133「四ノ越」・No.134「五ノ越」・No.135「立山

頂上社殿」・No.136「雄山」・No.138「山中諸堂社」である。

さらに、4点以上の作品に見られる図像(約80%以上の確立)は上記の図像に加え第6表に示すとおりである。

## 2-7. 立山曼荼羅の図像描写による表形分類

### 2-7-1. 方法の概略

前節で、41点の立山曼荼羅全作品を対象として、219項目の事物について描写の有無を調査し、描写が有れば●印で、無ければ×印で、判定が困難な場合は△印で示し、一覧表(第2表)を作成したが、次に、この表をもとに立山曼荼羅どうしの類似度を求め一覧表(第7表)を作成した。なお、第7表の具体的な作成方法を説明しておく、例えば、『坪井家A本』と『来迎寺本』は、219項目中162項目の有・無・判別不能(●・×・△)が一致しており、 $162 \div 219 = 73.9\%$ の類似度であるとみなす。同じように41点の立山曼荼羅全作品を総当たりで対比し、各作品どうしの類似度を調査した。

さらに、第7表で示す各作品どうしの類似度数をそれぞれ100%から差引き、非類似度数を求め、これをもとに樹形図(第2図[ウォード法による])を作成した。同図の縦軸は類似の度合いを表す指標で、値の小さい方が類似性が高いことを表し、横軸の項目は立山曼荼羅各作品を表している。

### 2-7-2. 樹形図の内容

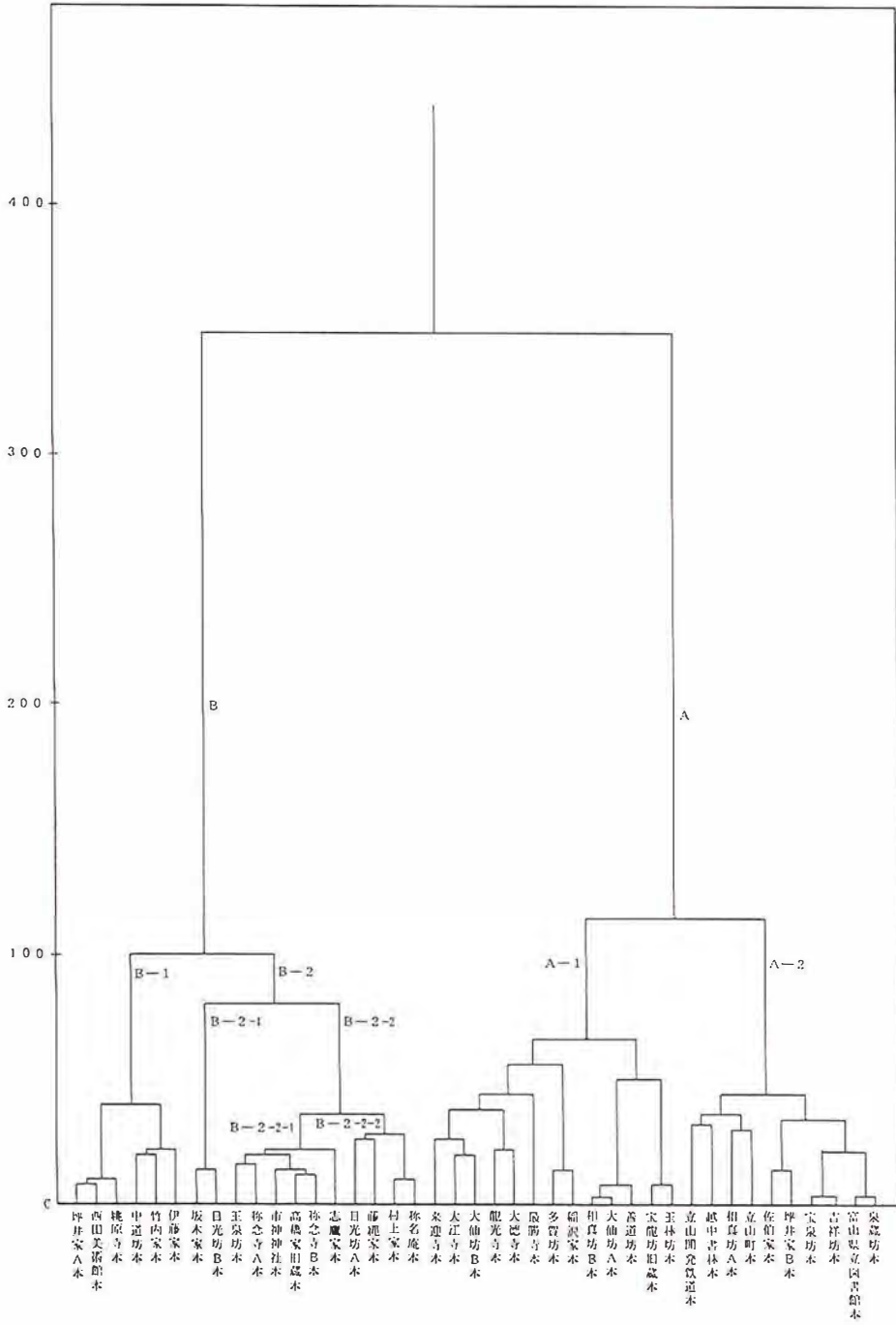
第2図を見ていくと、立山曼荼羅各作品はA群とB群に大きく二分されている。まず、A群については、芦峯寺布橋灌頂会に関する図像を含む作品ばかりで、従来の研究では、いわゆる芦峯寺系立山曼荼羅か、あるいは布橋灌頂会の図像を含むその他の寺院系立山曼荼羅と位置づけられてきた作品群と重複している。ただし、A群の一連の作品中、唯一布橋灌頂会の場面が描かれていない『玉林坊本』については、従来の研究では岩峯寺玉林坊との関係が確認でき、岩峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。それゆえ、筆者としては、A群に『玉林坊本』が属することに対し違和感を覚えているが、その帰属理由の分析は現段階ではできていない。

次にB群について見ていくと、その総体的な傾向はつかめないが、下層構造を見ていくとB-1群とB-2群に二分されている。

このうちB-1群は、従来の研究ではいわゆる岩峯寺系立山曼荼羅か、あるいは岩峯寺系立山曼荼羅“的”なものとして位置づけられてきた作品群と重複している。ただし、B-1群の一連の作品中、唯一布橋灌頂会の図像が含まれている『坪井家A本』につい



第2図：立山曼荼羅全作品を対象とした非類似度樹形図（ワード法）



ては、従来の研究では、その軸裏の銘文から芦峯寺教順坊や文政期に芦峯寺に在住した真言僧龍淵との関係において成立した作品であることが確認でき、芦峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。それゆえ、筆者としては、B-1群に『坪井家A本』が属することに対しても、前述の『玉林坊本』の場合と同様、違和感を覚えているが、その帰属理由の分析についてもやはり現段階ではできていない。

一方、B-2群は、従来の研究で位置づけられてきた芦峯寺系・岩峯寺系・その他の寺院系といった各系統に属する作品が混在する一群であり、いわば見た目では類別が困難な作品が属している一群ともいえよう。そして同群はさらにB-2-1群とB-2-2群に二分されている。

B-2-1群の『坂木家本』と『日光坊B本』は、それぞれ芦峯寺福泉坊と芦峯寺日光坊との関係が確認でき、また、構図や図像には神仏分離令による廃仏毀釈の影響が強く見られ、例えば布橋灌頂会のかわりに立山大祈祭の図像が描かれていることなどからも、従来の研究では芦峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。

B-2-2群は多種多様な作品群といえるが、総体的な傾向としては、曼荼羅風というよりは立山禪定道を強く意識した山絵図風の趣が強く表れた作品が多く含まれている。さらに同群はB-2-2-1群とB-2-2-2群に二分されている。

このうち、まず、B-2-2-1群に属する作品を見ていくと、『志鷹家本』と『市神神社本』は、岩峯寺が刊行した木版の立山禪定登山案内図を拡大模写したものであり、従来の研究では岩峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。『高橋家旧蔵本』は、軸裏の銘文から岩峯寺中道坊との関係が確認でき、総体的には岩峯寺系の作品として位置づけるべきであろう。『玉泉坊本』は芦峯寺玉泉坊との関係が確認でき、また、芦峯寺雄山神社の境内地が強調して描かれており、従来の研究では芦峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。『称念寺A本』と『称念寺B本』は浄土真宗本願寺派の寺院である称念寺に所蔵されるもので、従来の研究ではその他の寺院系の作品として位置づけられてきたものである。

次に、B-2-2-2群に属する作品を見ていくと、『日光坊A本』は芦峯寺日光坊との関係が確認でき、また、布橋灌頂会の場面だけが描かれた特異な作品であるので、従来の研究では芦峯寺系の作品として位置づけられてきたものである。『称名庵本』は称名庵とその守護仏である如意輪観世音菩薩の顕現を物語る「称名庵縁起」が曼荼羅風に描かれたもので、従来の研究ではその他の寺院系の作品として位置づけられてきたものである。『村上家本』と『藤縄家本』については来歴が不明で構図や図像も独特なため、従来の研究ではその他の系統の作品として位置づけられてきたものである。

### 3. 立山曼荼羅の構図・図像と制作者

#### 3-1. 立山曼荼羅の構図・図像と制作者

第1章と第2章では、ある絵画史料が立山曼荼羅として成立するために、その画面(いわばハードウェア)に描かれる「内容」(いわばソフトウェア)を詳細に分析し、さらに、各曼荼羅の画面に含有される内容を相互比較し、「内容」の有無だけに依拠した立山曼荼羅諸本の表形分類を試みた。

一方、絵画はそれを観る人に対し、画面に表現された「内容」そのものだけでイメージを与えているわけではない。むしろ、その「内容」を表現するための素材として具体的にどのような図像が創作・描写されているか、あるいは他の絵画から採取されているか、さらには、それがどのような筆致や法量、色彩で描写されているか、といった技巧的な面から生じる要素が、絵画を観る人に大きなインパクトやイメージを与えているのである。

さて、第3章では、本来的にはこのような要素に対して検討を試みる必然性があるのだろうが、これらは立山曼荼羅の制作者が個々にもつ経験や技術・感性に影響されやすく、分析する際の規定が困難なためなかなかとりかかり難い。ましてや、立山曼荼羅の場合、技巧的な問題の根本である制作者の面から検討を試みようとしても、軸裏の銘文などで制作者が判明している事例そのものが僅少である。さらに、仮に制作者名が判明していても、その事例を検討すると<sup>9)</sup>、そのほとんどの場合は立山衆徒の描写によるものではなく衆徒以外の外部の人々、それも素人や無名の絵師たちによるもので、これを進めて具体的な人物像や絵師としての系譜を解明し、筆致などの分析に役立てていこうとすることは、現況では不可能に近い。

ただし、このような実態は別の面では、立山曼荼羅の制作過程でそれにかかわる人々として「発願者」・「発注者」・「実際に絵を描く人」・「受納者」・「活用人」の存在を認識させるとともに、制作時において第8表に示すように、これらの人々のかかわり方次第で、画面の構図や図像にいろいろな影響が表れる可能性を示唆している。すなわち、立山曼荼羅諸本の構図や図像を詳細に見ていくと、その大勢は立山信仰の伝播者である衆徒側の意識にもとづいて描写されるが、なかには実質的な制作者である絵師の意識や立山信仰の受容者である檀那場の信徒たちの意識にもとづいて描写されたと推測される部分も多分に見られる。そして、こうした事態が生じる理由は、立山曼荼羅の制作を依頼された絵師や立山信仰の受容者である檀那場の信徒たちが、必ずしも衆徒側の期待どおりに制作時の注文や教化内容を受けとめてくれるとは限らないからである。絵師や信徒の関心の持ちようで理解も変わってしまうことがある。

さて、立山曼荼羅の制作者に対する以上の予測にもとづき、第3章では立山曼荼羅諸本の構図や図像の所々に顔を覗かせている制作者の意識について、具体的な事例を示しながら検討を試みたい。

### 3-2. 立山曼荼羅と立山開山縁起の諸本—玉殿窟の場面に表れた制作者の意識

第2章で、ある絵画史料が立山曼荼羅であるために最低限度描かれていなければならない図像の一つとして、立山開山縁起における玉殿窟の場面を指摘したが、その多様な描写状況については第9表に示すとおりである。

さて、同場面の構図やそれを成立させている各事物の図像は、制作者が立山開山の由来を記した諸縁起にもとづくか否か、また、もとづくとするればどの縁起を対象とし、どの程度か、といったことに大きく左右されているようである。これを逆に捉え、ある立山曼荼羅の玉殿窟の場面に、ある縁起の影響が見られたなら、その縁起に対して何らかの関係をもち得た人物が制作者であった可能性も高いといえよう。あるいは、どの縁起にも全くもとづかずオリジナル性が高い構図や図像を持つなら、その立山曼荼羅の制作者は諸縁起とは縁遠い人物であった可能性が高い。

いわゆる立山開山縁起には、『類聚既驗抄』（鎌倉時代編纂）や『伊呂波字類抄』十巻本の「立山大菩薩頭給本縁起」（鎌倉時代増補）・『神道集』巻4の「越中立山権現事」（南北朝時代編纂）・『和漢三才図会』（江戸時代正徳期頃の編纂）などが見られ、この他、芦峯寺と岩峯寺にも、宿坊衆徒や社人により江戸中期から末期にかけて製作された「立山大縁起」や「立山小縁起」・「立山略縁起」・「立山手引草」などが数点見られる。

こうした諸縁起のうち、立山曼荼羅の制作に最も影響を与えているのは、立山衆徒が製作した「立山大縁起」や「立山小縁起」・「立山略縁起」・「立山手引草」である。そこで、以下、立山曼荼羅諸本に描かれた玉殿窟の場面の構図や図像の傾向について、諸縁起に記された玉殿窟の場面の内容と照合しながら検討を試みたい。

まず初めに、諸縁起の内容を見ておきたい。

#### A. 立山大縁起（権教坊本・芦峯寺一山本）<sup>(7)</sup>

熊青岩流血、入万仞之宝窟是也。見此窟、我射所之矢、金色之弥陀如来御胸誤。于時、抛弓矢、合掌、切髮髮捨、傾頭、紅涙良久。金容早生身阿弥陀如来、親奉拜、則蒙冥加之教勅。仍之、宿善内薰、新願発外。蓋淨戒持木刃、亦生仏行欲全鉢。

#### B. 立山略縁起<sup>(8)</sup>

高山に登り、岩岨に向ひ玉ふに、熊鷹一度に彼玉殿の窟に入、熊ハ生身の阿弥陀如来と現じ、鷹ハ大聖不動明王と現れ玉へバ、忽に窟の内外、如来の大光明ニ照され、則、極



樂浄土を有頼ハ親に拝し奉り、肝に銘じ、鬢髪を切捨、紅涙し玉ふ時、立山兩大権現、生身の御声より、我此所ニ五百歳経といへ共、衆生未知ずの所、今此山を開基し、末世濁惡の衆生を済度させんがため、此峯へ導引也。

C. 立山略縁起(相真坊本)<sup>(9)</sup>

爰に一個の窟あり、兼て尋る熊鷹一度此窟の中に入にける、有頼公喜び、今迄多くの辛苦を積し勞を費したる名鳥手ニ握る事、更に疑なく、該窟へ近く進シ玉ふ、嗚呼不思議なるかな、窟の内外光明輝々として六合に通れり、有頼公驚き窟の内を窺へ玉へハ、麓に於て熊に射玉ひし箭ハ金色生身の阿弥陀の胸ニ逆立、血汐染々と流ルあり、鷹ハ則ち大聖天尊不動明王と現れ玉ふ、天より諸仏菩薩圍繞し、摩伽曼陀羅の花ハ降り散セハ、極楽浄土ニ異ならず、是ハと驚き、吾こそハ凡眼愚絵の雲厚く、誠に鳥獸と思ひ、仏身を穢し、是ぞ五逆重罪の大悪人と、弓箭口投捨、腰刀抜きて鬢髪を切り、綾羅錦の衣裳を捨、只一心ニ低頭涕泣し玉に、此の時紫雲に乗り玉ひ、諸仏菩薩ハ不殘還帰本土し玉へる、跡に有頼黙然として居玉へしに、次第ニ身体疲れ、是迄角岩木根ニ軽せし疵口益々痛出、起居自由も難成、噫吾こそハ如何すへき、

D. 立山縁起(岩峠寺延命院本)<sup>(10)</sup>

熊者青巖ニ流レ血、而入レ万仞之宝窟ニ玉殿岩屋是也、見レ此窟ニ者、我所射之矢、誤ツ金色阿弥陀如来ノ御胸ニ、于時抛レ弓箭合掌、切レ鬢髪傾頭、紅涙良久シ、全容早ク隠、親拝生身之弥陀ヲ、則蒙冥加之教勅、依レ之宿善内薫、新願外発、蓋持レ浄戒木刃、欲行生仏全体ナルヲ、麓有レ一ノ聖跡、名テ称レ五智寺、業勢上人建立是也、

E. 立山小縁起(岩峠寺雄山神社本)<sup>(11)</sup>

則有リ宝所ノ在ル、碧巖濺テ血ヲ入ル大宝窟ニ、然メ彼ノ白鷹ハ翺飛蒼天ニ舞フ五銚峰ニ、到リ岩窟ニ来ル、髣髴ト如ク見ル靈山ノ一会ヲ、諸仏救フ世ヲ者住シ於大神通ニ、為レ悦ス衆生ヲ故、現ス無量ノ神力ヲ、如ク経文ノ、六種震動シ、地皆金色ナリ、金容尊之記、胸ニ所ノ中シ熊之矢穿テ密ル定印ニ也、於テ是ニ抛チ弓箭ヲ、以テ佩劔ヲ薙ル鬢髪ヲ、叩ヲ頭ヲ紅涙合掌百礼ス焉、

F. 立山手引草<sup>(12)</sup>

件ノ熊ハ青巖ニ血ヲ流シテ万仞ノ宝窟ト申テ此ノ玉殿岩屋ニ入時ニ弓矢ヲナケ捨テ玉ヘテ青蛇ノ刀ノサヤヲ破テカケ入り見玉フニ熊ハ更ニ不見案ニ相違シテマノアタリニ仏身現サセ玉ヘリ不思議ヤトマユヲヒソメ玉フ内ニ六種震動スレハコハ何ント岩屋ノ内ヲ見玉フニ皆七宝ノイサゴヲチリバメ金繩ヲ引キ諸仏菩薩四衆八部十方ヨリ来ラセ玉ヘテ三帀合掌シ玉フモアリ又ケコフドフバンヨウラクヲ持チ玉ヘテ各々ノ三昧ヲ現シ或ハ虚空

ニ住シ或ハ師子ノ座ニザシ或ハ七葉ノ蓮花ニ坐シテ光明方八千土ヲ照ラシ給ヘハ我レ聞クコゝガ西方浄土カ又ハ一乗開會道場ニ来リテ涌出法塔ノ化仏ニアイ奉ルト云者ノカトカツカウノ涙ヲラ止メ玉ヘテツクゝ中尊拜ミ奉リ玉フニ麓ニヲキテ熊ト思シ召シテ射中シ矢生身ノ阿弥陀如来ノ御正躰ニ深くタチ金色ノ御胸ヨリ定印蓮花座ニ至ルマテ血流レテ紅ナリ時ニ身ノヲキ所モナク御手ヲ握頭ヲ打テ悲シニ玉フハ我レ熊ト思テキル矢仏身ヲアマリイハンヤ血ヲ出スコト逆罪ナリ今ハ何ヲカ思フベキト御太刀ヲ以テ鬘髮ヲ切り玉ヘテ先非ヲ悔良久シク紅涙アラセ玉ヒハ、如来告テ曰ク〜〜

次に、各縁起内容の特徴を概略し、それぞれと影響関係がみられる立山曼荼羅を指摘していきたい。

立山大縁起においては、佐伯有頼の他に金色生身の阿弥陀如来だけが登場し、その胸に矢が刺さっているが流血の記述は見られない。また、不動明王は登場しない。この内容をほぼ踏襲している作品に『来迎寺本』（写真1）がある。『来迎寺本』では矢疵とそれに伴う流血が描かれていない。また、『大江寺本』も概ねこの図像だが、矢疵と流血が描かれている。

立山略縁起（相真坊本）においては、佐伯有頼の他に金色生身の阿弥陀如来が登場し、その胸には矢が刺さり流血がある。また、不動明王も登場する。『坪井家A本』や『相真



写真1：『立山曼荼羅 来迎寺本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面

坊B本』(写真2)、『富山県立図書館本』(写真3)などの芦峯寺系立山曼荼羅に描かれた玉殿窟の場面のほとんどは、こうした芦峯寺の立山略縁起の内容にもとづく。なお、『宝泉坊本』(写真4)と『吉祥坊本』では金色の阿弥陀如来が茶色の法衣を着ている。そして、『宝泉坊本』では矢疵と流血が描かれ、それを模写して制作された『吉祥坊本』では矢疵はあるものの流血は見られない。

立山縁起(岩峯寺延命院本)と立山小縁起(岩峯寺雄山神社本)においては、佐伯有頼の他に金色の矢疵(流血なし)阿弥陀如来が登場する。不動明王や諸菩薩の顕現に関する記述は見られない。

立山手引草においては金色の矢疵(流血あり)阿弥陀如来が諸菩薩とともに登場する。『玉林坊本』(写真5)や『中道坊本』(写真6)などの岩峯寺系立山曼荼羅は、概ね、以上の岩峯寺の縁起の内容にもとづいて描かれている。なお、岩峯寺系立山曼荼羅諸本のうち、『桃原寺本』には佐伯有頼の他に金色の矢疵(流血なし)阿弥陀如来だけが描かれている。また『高橋家旧蔵本』には、佐伯有頼の他に金色の矢疵(流血あり)阿弥陀如来と例外的に不動明王も描かれている。

一方、芦峯寺系や岩峯寺系以外の立山曼荼羅における玉殿窟の場面を見ていくと、『最勝寺本』(写真7)においては玉殿窟が描かれず、金色の矢疵(流血なし)阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩の三尊来迎が脇に熊を伴って描かれている。また、『称念寺A本』においては、佐伯有頼の他には金色の矢疵(流血あり)阿弥陀如来だけが描かれている。



写真2：『立山曼荼羅 相真坊B本』(部分)  
立山開山伝説における玉殿窟の場面





写真3：『立山曼荼羅 富山県立図書館本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面



写真4：『立山曼荼羅 宝泉坊本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面





写真5：『立山曼荼羅 玉林坊本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面



写真6：『立山曼荼羅 中道坊本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面



写真7：『立山曼荼羅 最勝寺本』（部分）  
立山開山伝説における玉殿窟の場面

以上、阿弥陀如来の顕現を中心に見てきたが、もう一つのアイテムである佐伯有頼の図像については、いずれの縁起においても剃髪したことが記されているが、立山曼荼羅諸本のなかでは剃髪済みのもの、剃髪中のもの、剃髪していないものとバラエティーに富んでいる。有頼の装束については諸縁起に詳しい記述がなく、立山曼荼羅諸本のなかでは鎧兜や狩衣、衣冠束帯など、様々な表現が見られる。

### 3—3. 立山曼荼羅最勝寺本と大江寺本—立山信仰の受容者側の意識が強く表れた立山曼荼羅

#### 3—3—1. 立山曼荼羅 最勝寺本

『最勝寺本』は、安政2年（1855）に尾張国知多郡寺本村の常光院の住僧至円によって、「立山和光大権現画伝」と題して描かれたもので、その制作に当たっては地域の多くの人々の結縁により制作費が負担された。そして完成後は地元知多郡阿久比の天台宗大円山最勝寺に寄進された。

ところで、芦峯寺日光坊は知多郡に檜那場を形成し、毎年農閑期に廻檀配札活動を行っていたが、おそらく至円はそうした日光坊衆徒の教化活動に感化され、『最勝寺本』を制作したものと推測される。至円は立山信仰を構成する立山開山縁起や布橋灌頂会などの



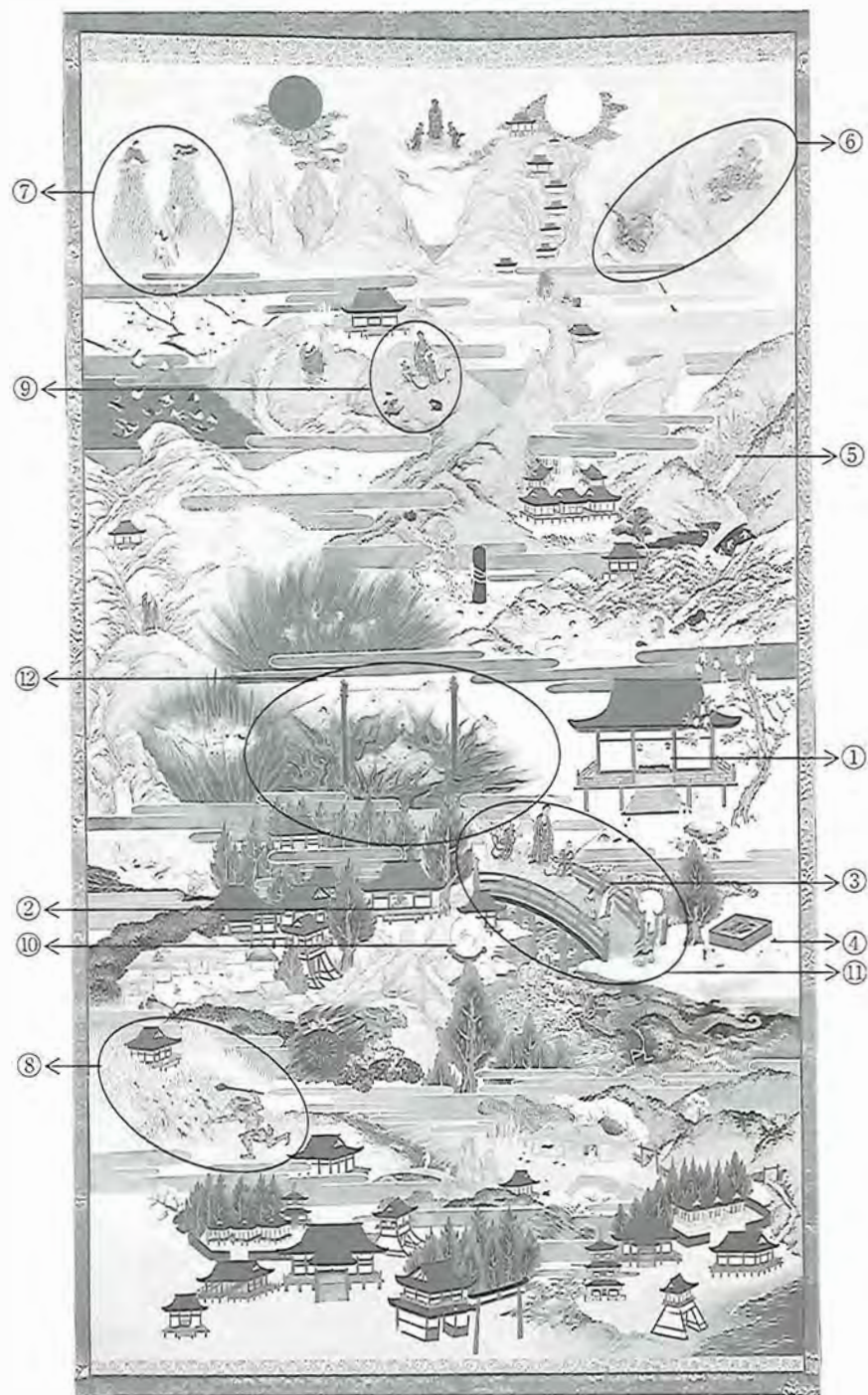


写真 8 : 『立山曼荼羅 最勝寺本』

内容を概略的には理解していたものの、その詳細にまでは至っておらず、この作品には通常の立山曼荼羅とは異なった趣を持つ独特な図像が数多く見られる。

以下、写真8を使用し、『最勝寺本』の特徴を見ていきたい。まず、全体的には立山信仰に対するイメージがある程度持たれて描かれているようであり、芦峯寺の①媼堂及び媼尊や②閻魔堂及び閻魔王、③布橋と思われる橋、④影向石などのモチーフが描かれている。禪定登山道の途上の⑤材木坂なども描かれている。一方、画面に見られる空間認識、すなわち、立山地獄の位置に対する認識や山麓集落の岩峯寺・芦峯寺などの位置に対する認識は、現実の景観や地形に対する認識とかなり異なっている。特異な部分としては、浄土山と思われるあたりに二十五菩薩の来迎ではなく⑥風神と雷神が描かれている。劔岳と思われる山は針山として二峰描かれ、その頂上にはそれぞれ貴男と貴女が座し、下から亡者が傷つきながら登るといふ、いわゆる⑦刀葉林地獄として描かれている。それとは別に、画面下部には⑧針山地獄の図像が描かれ、亡者が獄卒に追い立てられている。⑨玉殿窟の場面では窟は描かれず、佐伯有頼の前に熊が座し、さらにその後方に金色の阿弥陀如来（矢疵・流血なし）と観音菩薩・勢至菩薩が三尊形式で顕現した状況が描かれている。通常は、立山地獄の場面に閻魔王庁の様子的一部分として描かれる⑩浄玻璃鏡とそれに罪を映される亡者の図像は芦峯寺地域の一角と思われる場所に描かれている。至円なりの理解で描かれた⑪布橋灌頂会と思われる場面は、熊野観心十界曼荼羅などに見られる三途の川に架かる橋を白衣の貴人夫婦が地藏菩薩に導かれてあの世からこの世へと戻り渡る図像で表現されている。また、地獄の場面では、他の立山曼荼羅にはほとんど見られないが（これ以外には『立山開発鉄道本』にだけ描かれている）、⑫黒縄地獄の一場面として、燃え盛る鉄釜の上を亡者が重荷を背負って綱渡りをする図像が描かれている。

### 3-3-2. 立山曼荼羅 大江寺本

『大江寺本』は三重県鳥羽市曹洞宗大江寺に伝わる立山曼荼羅である。1幅の大型掛幅で、31.5cm×43.5cmの和紙を凡そ10枚ほど重ね継ぎしてできている。画中には、芦峯寺衆徒の絵解き題材としての項目である立山開山縁起・立山地獄・立山浄土・立山禪定登山案内・芦峯寺布橋灌頂会の5つの場面が描かれている。

以下、写真9を使用し、『大江寺本』の特徴を見ていきたい。この作品においては、立山開山縁起に対する制作者の意識は弱く、①佐伯有頼が熊に矢を射る場面では、有頼の姿が見られず矢疵の熊だけが描かれている。②また玉殿窟での阿弥陀如来の顕現の場面も大画面の割には取り扱い方が貧弱である。これに対し、画中段には、立山地獄での





写真9：『立山曼荼羅 大江寺本』

責め苦の様子や大施餓鬼法要会の様子が大きく描かれている。獄卒の図像には大津絵の影響が見られ、地獄の恐さも半減しユーモラスささえ感じられる。③芦峯寺閻魔堂前に安置されていた牛石が生身の牛そのものをつないだ形で描かれている。④芦峯寺布橋灌頂会の場面で閻魔堂の図像が同祭礼と無関係に堂そのものの存在意義だけで単独的に描かれ、布橋灌頂会の式衆・参列者の図像と同機していない。以上のように、立山開山縁起に対する意識の弱さと布橋灌頂会に対する、何となくわかっているようでわかっていない不完全な描写から、この作品の制作者は、芦峯寺衆徒の檀那場での勸進布教活動によって感化を受けた信徒か、あるいは信徒から発注を受けた在地の絵師（それもかなり素人に近い）あたりであると推測される。

### 3—4. 立山曼荼羅諸本の図像に表れた制作者の立山信仰に対する認識

#### 3—4—1. 布橋灌頂会の図像に表れた制作者の意識

慶長19年(1614)、加賀初代藩主前田利家夫人芳春院と加賀2代藩主前田利長夫人玉泉院が越中山山麓の芦峯寺に参詣し、滞在中に同寺熾堂の前の熾谷川に架かる橋に布橋(橋板の上に白布を敷き渡して橋に見立てた)を掛けて何らかの宗教儀式を行った。

この時の儀式が契機となったのか、あるいはそれ以前から芦峯寺でこうした儀式が行われていたのかは、それを示唆する史料が現存せず明らかではないが、慶長19年の加賀藩主夫人らによる一件以降も、布橋を利用して何らかの宗教儀式が行われていたことが芦峯寺文書などの史料から断片的にうかがわれる。そして、近世後期になると、文政3年(1820)にそれまで破損の著しかった布橋が新たに架け替えられたことを契機に、さらには文政6年(1823)から芦峯寺に定住した元高野山の学侶龍淵の影響等も受け、女人救済をかかげる「布橋灌頂会」として芦峯寺一山の最も重要な祭礼に発展した<sup>(13)</sup>。

以下、近世後期における布橋灌頂会(写真10)の内容を概略しておく、この祭礼は毎年秋の彼岸の中日に芦峯寺の熾堂・閻魔堂・布橋を法場として執行された。まず始めに各地から訪れた信徒や一般の参詣者は閻魔堂で懺悔の儀式を受け、そこで三昧耶戒を授かる。それが終わると宿坊衆徒によって構成された式衆(引導師)に導かれ、式衆による声明曲や楽器の演奏で賑やかななかを共に行道し布橋を渡る。布橋を渡り終えると式衆(来迎師)に導かれ熾堂に入る。堂内では天台系の四箇法要が勤修され、血脈の授



写真10:『立山曼荼羅 坪井家B本』(部分)  
布橋灌頂会の場面



与や説法が行われた<sup>(14)</sup>。

さて、この祭礼に類似の儀礼として、出羽羽黒山修験の秋の峠入りや真言宗の結縁灌頂、奥三河の花祭り白山行事、大和の当麻寺や京都の泉涌寺で行われる迎講などがあるが、いわゆる布橋灌頂会として整った形の儀礼としてみた場合には、やはり立山芦峯寺独特のものといえる<sup>(15)</sup>。それゆえ、立山曼荼羅の制作者が布橋灌頂会の場面を描こうとした場合、同じく立山曼荼羅の立山地獄や立山浄土の場面に見られるように、既存の六道十王図や熊野観心十界曼荼羅、来迎図などからの図像の取り込みを中心とした制作方法では困難な点が多く、やはり本人がある程度儀式内容を把握した上で描かざるをえないであろう。その際、制作者がもっていた立山信仰に関する情報や彼のそれまでの経験にもとづく知識・描写技術・感性は、彼が描こうとする布橋灌頂会の構図や図像に微妙に、あるいは時には大いに反映されるはずである。

そこで、立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の場面の多様な描写状況を分析し、その内容を第10表で示した。さらにそのデータを部分的に活用し、以下、布橋灌頂会の場面の図像から制作者の意識が顔を覗かせている部分を抽出し検討を試みたい。

#### A. 法要の内容

天保13年(1842)の「諸堂勤方等年中行事外数件」<sup>(16)</sup>や安政5年(1858)・同6年(1859)の「布橋灌頂法会職衆請定」<sup>(17)</sup>からは、布橋灌頂会が、閻魔堂での懺悔の法要、布橋を利用しての行渡し法要、娑堂での天台系の四箇法要(唄・散華・梵音・錫杖という四曲の声明を軸に組み立てられた法要。)の三種類の法要を組み合わせられて構成された法会であったことがうかがわれるが、そこに雅楽の導入は見られない。それゆえ、雅楽奏者が行道を行う様子を描く『日光坊本(1幅)』は、芦峯寺衆徒以外の人々の意識によって描かれたものであろう。

#### B. 参列者の装束

越後国頸城郡福島村の関根新左衛門は天保11年(1840)9月に立山禪定登山を行ったが、その時の旅の様子や各所での見聞内容について彼自身が記した『立山参詣記』(個人所蔵)によると、布橋灌頂会の参列者は白装束を着用していたことがわかる。

さて、立山曼荼羅諸本において、白装束を着用している作品には『来迎寺本』・『坪井家A本』・『善道坊本』・『佐伯家(省次)本』・『坪井家B本』・『富山県立図書館本』・『立山町本』・『稲沢家本』・『大仙坊B本』・『龍光寺本』・『日光坊本(1幅)』・『大徳寺本』・『大江寺本』がある。また、平服で参列している作品には『相真坊A本』・『相真坊B本』・『大仙坊A本』・『宝龍坊旧蔵本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』がある。平服の参列者が描かれている作品は、どちらかといえば布橋灌頂会の内容を完全には理解できていない芦



写真11：『立山曼荼羅 来迎寺本』（部分）  
布橋灌頂会の参列者

峠寺衆徒以外の外部の人々によって描かれた可能性が高い。

### C. 一般参列者の人数と性別

従来の立山信仰研究史において布橋灌頂会は女人救済儀礼として位置づけられていたが、文政10年（1827）に成立したと推測される『北国立山御嬭堂別当奉加帳』<sup>(18)</sup>や文政期に成立したと推測される『立山本地阿弥陀如来略記』<sup>(19)</sup>などの記載から、布橋灌頂会の儀式には参列者として男性と女性がともに参加していたことがわかる。しかし、立山曼荼羅に描かれた一般参列者の図像には多様な描写が見られる。

一般参列者が全て女性である作品とそれぞれの人数は次のとおりである。『坪井家A本』（10名）・『来迎寺本』（5名）〔写真11〕・『稻沢家本』（5名）・『龍光寺本』（6名）・『大徳寺本』（13名）・『相真坊B本』（1名）・『大仙坊A本』（1名）・『宝龍坊旧蔵本』（1名）・『坪井家B本』（7名）・『宝泉坊本』（4名）・『吉祥坊本』（4名）・『富山県立図書館本』（12名）〔写真12〕・『立山町本』（12名）・『日光坊A本（1幅）』（15名）。一般参列者が全て男性である作品とそれぞれの人数は次のとおりである。『大仙坊B本』（2名）・『善道坊本』（5名）〔写真13〕。一般参列者に女性と男性が混在している作品とそれぞれの人数は次のとおりである。『多賀坊本』（6名）・『佐伯家（省次）本』（5名）・『相真坊A本』（24名）〔写真14〕。参列者の性別が識別できない作品とそれぞれの人数は次のとおりで



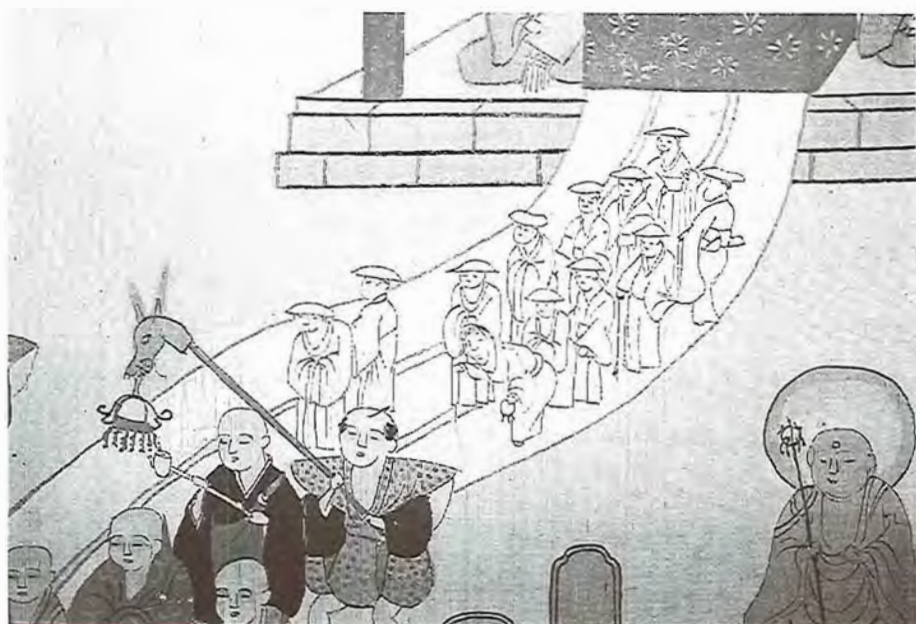


写真12：『立山曼荼羅 富山県立図書館本』（部分）  
布橋灌頂会の参列者



写真13：『立山曼荼羅 善道坊本』（部分）  
布橋灌頂会の参列者

ある。『大江寺本』(2名)・『立山開発鉄道本』(4名)。

なお、布橋灌頂会の場面において一般参列者の図像からその性別を見極めるためには、装束の着こなし方を見ればよい。すなわち普通に装束の裾を垂らしていればそれは女性と位置づけられる。一方、男性の場合は、装束の裾を帯に挟めてたくし上げた姿で描かれている。

さて、江戸時代、芦峯寺衆徒は自村の芦峯寺を「(立山の)麗女人成仏之霊場」として積極的に喧伝するが、その延長線上で、実際の布橋灌頂会には男性と女性の両方を参列させながら、作品には参列者をあえて女性にしぼって描

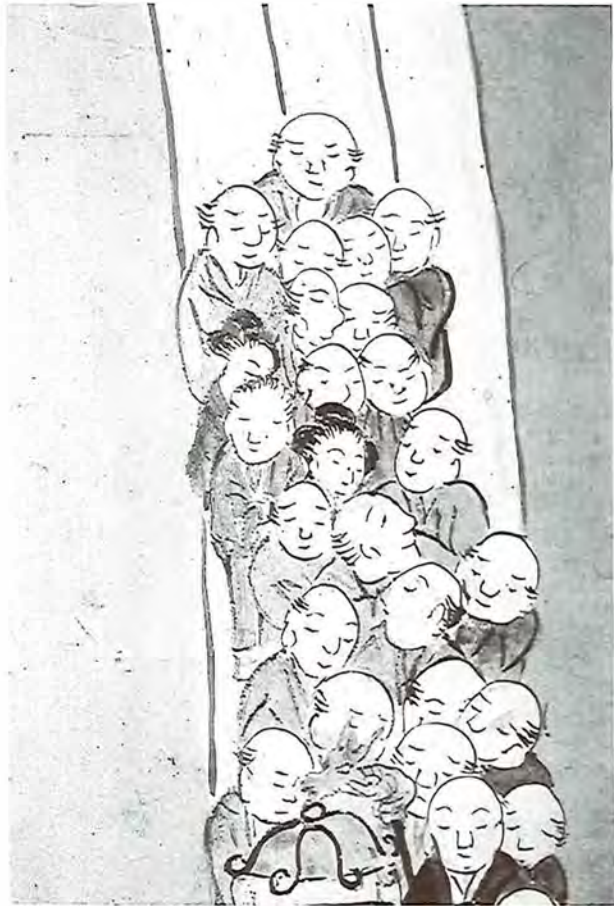


写真14：『立山曼荼羅 相真坊A本』(部分)  
布橋灌頂会の参列者

いているものも多く、そこに 大を目指そうとする信徒側の意図が感じられる。また、男性と女性を混合で描く場合は、特に深い意識もなく偶然にそのように描いた場合もあろうが、なかには衆徒からかなり正確に儀式内容を聞くことができた絵師や信徒たちが描いた場合、あるいは、儀式と直接的に関係をもった制作者(衆徒自身或いは儀式に参加した信徒等)が現実 に即した内容を描いた場合もあろう。一方、男性だけが描かれている場合は、やはり、その制作者は芦峯寺一山とは部外者で儀式内容にはそれほど精通していなかったことになる。

ところで、『相真坊B本』・『大仙坊A本』・『宝龍坊旧蔵本』には儀式を受ける参列者として老婆(写真15)が1名だけしか描かれていない。これについては、もし芦峯寺衆徒の意識で描かれたものだとすると、檀那場の信徒たちに対し布橋灌頂会の盛況な様子をピーアールし彼らが儀式への参加や寄進を望みたくなるように、もっと多くの参列者を





写真15：『立山曼荼羅 相真坊B本』（部分）  
布橋灌頂会の参列者として描かれた老婆

描写しておいたほうが勧進布教活動の際には得策かと思われる。しかし、一体何を表徴させているのか未説明のまま老婆が1名だけ漠然と描かれているのだが、おそらく、これは制作を任された絵師の意識か檀那場の信徒の意識が強く反映されて生み出された図像であろう。

筆者は、この老婆について当初、慶長19年(1614)に燭堂の前の橋に布橋(白布のアーチ)を掛けて宗教儀式を行った加賀初代藩主前田利家夫人芳春院と加賀2代藩主前田利長夫人玉泉院の表徴かとも考えてみたが、それならば儀式の図像の所々にもっと「加賀藩」を強調しそうなものであり、そのような気配が全く見られないのでどうやらの外れのようなのである。現在にもっと単純に考え、立山曼荼羅の制作を依頼された絵師か、あるいは制作に携わるようになった檀那場の信徒の意識にもとづき、熊野観心十界曼荼羅に描かれた半円形に人生を象徴する「山坂」の出口直前の老婆(写真16)の図像(頭を頭巾で覆い、杖をつき、腰が曲がった容姿)を取り込んだものと推測している。そして、熊野観心十界曼荼羅に描かれたこの老婆の図像の背景に潜む情報と立山曼荼羅に描かれた参列者としての老婆の図像の背景に潜む情報は共通のモチーフを有する。すなわち、熊野観心十界曼荼羅において老婆は人生を象徴する「山坂」の出口の直前(あの世に入る直前)に描かれ、そこには境界の鳥居が立ち、その先には死者の家である墓地がある。

一方、立山曼荼羅においても老婆はやはり布橋及び燭谷川を境界とするあの世の世界に入る直前に描かれているのである。いわゆる、今まさにあの世に行こうとしている老婆を象徴的な意味をもたせて、特定の意義のある場所に配置しているのである。

先に、『最勝寺本』の布橋灌頂会の場面(写真17)と思われる部分に熊野観心十界曼荼羅などにも見られる図像が取り込まれていることを指摘したが、おそらく絵師側や檀那場の信徒側、あるいは全くの部外者が立山曼荼羅の制作を手掛けた場合、彼らの間では熊野観心十界曼荼羅の各種図像が立山曼荼羅のそれと似て



写真16: 『熊野観心十界曼荼羅 正覚寺本』(部分)  
人生を象徴する「山坂」の場面の老婆

いるものとする認識がある程度持たれており、上記の図像や地獄の場面の図像など、所々参考にされて取り込まれることもあったのではなかろうか。そうなると、逆に近世後期における熊野観心十界曼荼羅などの存在状況や実用状況、現存の諸本の制作年代についても再検討の必要性が出てくるが、それについては今後の検討課題としておきたい。

ところで、前述した老婆の一連の図像に従者とと思われる女性を3名付け加えて描く作品に『宝泉坊本』(4名)〔写真18〕と『吉祥坊本』(4名)があり、またこれと類似の老婆を先頭に置き多数の参列者を描く作品に『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』がある。このなかで『宝泉坊本』と『吉祥坊本』には横写関係が見られ、安政5年(1858)に制作された『宝泉坊本』が横写されて、慶応2年(1866)に『吉祥坊本』が制作されている<sup>(20)</sup>。その際、『宝泉坊本』における布橋灌頂会の一般参列者の図像は、おそらく、同じく布橋灌頂会の一般参列者として老婆一人だけが描かれている『相真坊B本』や『大仙坊A本』を参考にして、さらに、その図像に従者としての意味を持った3





写真17：『立山曼荼羅 最勝寺本』（部分）  
至円のイメージで描かれた布橋灌頂会



写真18：『立山曼荼羅 宝泉坊本』（部分）  
布橋灌頂会の参列者

名の女性が新たに付け加えられて描かれたものと推測される。それゆえ、『相真坊B本』や『大仙坊A本』は、安政5年(1858)に制作された『宝泉坊本』よりも成立時期が若干遡ると考えられる。

#### D. 一般参列者の目隠しの有無

布橋灌頂会に関する伝説では、一般参列者は目隠しをしていたとするが、それを示す文献史料は見当たらない。立山曼荼羅諸本においては、一般参列者が目隠しをしている作品は1点も見られない。

#### E. 善の綱

布橋灌頂会の儀式について、正徳3年(1713)年頃に板行された『和漢三才図絵』には「蘆峯寺、姥堂アリ、大宝二年卯四月十二日、慈興上人ノ母、江州志賀ニ卒ス。慈興自ラ母ノ像ヲ作り、慶雲元年八月彼岸ノ中日ニ葬礼ノ法式ヲ為ス。今ニ然リ。」と記され、それを慈興上人の母の葬送儀礼と結びつける説も見られるが、こうした内容にもとづくものか、『善道坊本』と『佐伯家(省次)本』(写真19)など、布橋灌頂会の一般参列者が善の綱を握っている図像も見られる。

#### F. 布橋を支える土台の石垣

布橋は長い木柱の橋脚だけで川岸や川底から建てられていたのではなく、その土台部



写真19：『立山曼荼羅 佐伯家本』(部分)  
布橋灌頂会の場面に見られる善の綱



分としてかなり上の方まで石垣で組み上げられ、さらに石垣は川岸ぎりぎりまでせり出していた。その石垣の上に木造の橋が乗せられているような状態であった<sup>(21)</sup>。このような形で布橋が描かれた作品には『佐伯家(省次)本』・『坪井家B本』(写真20)・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』・『日光坊A本(1幅)』があり、これらの作品の制作者は、布橋の現実的な形態を認識していた可能性が高い。すなわち衆徒かあるいは衆徒の周辺にいて、ある程度教示を受けることができた人物が描いたのであろう。

### 3—4—2. 立山浄土の来迎の図像に表れた制作者の意識

ほとんどの立山曼荼羅において、その画面には雄山と浄土山の山間や雄山と大汝山の山間に仏・菩薩の来迎場面が描かれている。

さて、立山連峰の雄山・大汝山・富士折立山の三峰が実景視に即して、一つながりの山谷で描かれた場合、雄山と大汝山の山間の部分にはそれほどスペースができず仏・菩薩の来迎場面を挿入することはできない。従って必然的に浄土山周辺で仏・菩薩の来迎場面を描くことになる。こうした作品に、『坪井家A本』(写真21)や『佐伯家(省次)本』(写真22)・『立山開発鉄道本』・『龍光寺本』・『坪井家B本』・『桃原寺本』などがある。なお、『来迎寺本』(写真23)もこの形式だが、富士折立山の左上方に阿弥陀三尊の来迎が補筆されている。

一方、立山連峰の雄山・大汝山・富士折立山の三峰がかなりデフォルメされて描かれ



写真20：『立山曼荼羅 坪井家B本』(部分)  
芦峯寺布橋の土台石垣



写真21：『立山曼荼羅 坪井家A本』（部分）  
立山浄土の場面



写真22：『立山曼荼羅 佐伯家本』（部分）  
立山浄土の場面





写真23：『立山曼荼羅 来迎寺本』（部分）  
立山浄土の場面

た場合、雄山と大汝山の山間には比較的大きなスペースができるので、そこに、画面に向かって左から右への進行方向で阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩の三尊来迎が早来迎の形式で描かれることがある。さらに、これに加え、浄土山をかすめるように、あるいは浄土山の画面に向かって左斜面を滑り降りるように、阿弥陀三尊と二十五菩薩の来迎が画面に向かって右から左への進行方向で描かれる。その際、阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎場面は大きな雲に乗った一つの集合体として描かれる（『善道坊本』〔写真24—①・②〕・『相真坊A本』・『大徳寺本』）。

立山連峰の雄山・大汝山・富士折立山の三峰が極端にデフォルメされて描かれた場合、雄山と大汝山の山間にスペースがあるにもかかわらず、そこには何も描かないで、浄土山周辺に阿弥陀三尊と二十五菩薩の来迎場面が画面に向かって右から左への進行方向で描かれる場合がある。その際、阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎は大きな雲に乗った一まとまりの集合体として描かれる（『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』）。

この他、雄山と大汝山の山間に画面に向かって左から右への進行方向で阿弥陀三尊の来迎が早来迎の形式で描かれ、さらに雄山の画面に向かって右斜面を滑り降りるように阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎が一つの雲に集合体で描かれる場合もある。その際、来迎の動きとしては、出始めは画面に向かって左側の雄山側から始まるが、それが雄山と



写真24-①・②：『立山曼荼羅 善道坊本』（部分）  
立山浄土の場面





写真25—①・②：『立山曼荼羅 相真坊B本』（部分）  
立山浄土の場面



浄土山の山間で反転して、最終的には画面に向かって右から左への動きとなる。それゆえ、仏・菩薩たちの集合体の中で前列の阿弥陀如来や諸菩薩は画面に向かって左向きとなるが、後列の諸菩薩は右向きから正面向きとなる。そして浄土山周辺には来迎場面は描かれないのである。こうした作品に『相真坊B本』(写真25-①・②)や『大仙坊A本』・『宝龍坊旧蔵本』などが見られる。

以上、立山曼荼羅諸本における立山浄土の来迎場面には多様な描写が見られるが、浄土山の来迎場面を重視した作品は、芦峯寺衆徒や岩峯寺衆徒の意識が強く表れているといえる。一方、雄山や大汝山からの来迎場面を重視した作品は絵師やあるいは檜那場の信徒の意識が強く表れているといえよう。

### 3-4-3. その他の図像に表れた制作者の意識

#### A. 牛石

芦峯寺系立山曼荼羅には閻魔堂の前庭に牛石が描かれる場合がある。『大徳寺本』・『相真坊B本』・『大仙坊A本』・『善道坊本』・『佐伯(省次)家本』・『坪井家B本』・『相真坊A本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』・『日光坊A本』には、牛石は石造物として描かれている。これに対して『大仙坊B本』(写真



写真26: 『立山曼荼羅 大仙坊B本』(部分)  
池の中に生身の牛を描き牛石を表現している。

26) では閻魔堂前に池が描かれ、生身の牛が首まで浸かっている図像が描かれている。また、『大江寺本』(写真27)では石造物の牛ではなく、鎖につながれた生きた牛が描かれている。おそらく制作者が衆徒ではなく、制作を外注された絵師か、あるいは檀那場の信徒が描いたため、現地の情報に疎く牛石の実態をよく知らないままに描いたのであろう。一方、『坪井家A本』・『来迎寺本』・『多賀坊本』・『稲沢家本』・『立山開発鉄道本』・『龍光寺本』・『宝龍坊旧蔵本』には描かれていない。

#### B. 影向石

芦峯寺系立山曼荼羅の幾つかの作品には、嬪堂の前庭に影向石が描かれるものがある。写真27：『立山曼荼羅 大江寺本』(部分) この描かれ方には、影向石と



写真27：『立山曼荼羅 大江寺本』(部分)  
生身の牛を描き牛石を表現している。

それを囲む柵が描かれているものと、柵だけが描かれているものが見られる。両方とも描かれている作品としては『大徳寺本』・『善道坊本』・『佐伯家(省次)本』・『坪井家B本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』がみられ、一方、柵だけで表現されている作品としては『大仙坊B本』・『相真坊B本』・『大仙坊A本』・『大江寺本』・『坪井家A本』がみられる。

さて、明治20年(1887)4月、戸長役場は岩峯寺雄山神社前立所と芦峯寺雄山神社祈禱所に対して、同両社所蔵の宝物や文書の現存状況を書き出させているが(旧宿坊家の所持品も含む)、その際、「立山開基佐伯有頼ノ霊像」などととも「影向石」もあげられており<sup>(22)</sup>、その実存が確認できる。それゆえ、影向石とそれを囲む柵の両方が描かれた作品の方が、囲み柵だけが描かれた作品よりも、実際の状況がよくわかっていて丁寧



な描写であるので、どちらかといえば衆徒の意識に近いところで制作されたといえよう。

#### C. 閻魔堂脇に露天で安置された地藏菩薩像

芦峯寺の閻魔堂脇には地藏菩薩<sup>(23)</sup>が露天で安置されていたが、それを描写した作品に『大徳寺本』・『坪井家B本』・『相真坊A本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』・『日光坊A本』がある。これらの作品については、芦峯寺に関する細かい図像アイテムを認識していた制作者に描かれたといえる。

#### D. 芦峯寺の流水灌頂式

芦峯寺一山衆徒は毎年6月7日に嬭堂で流水灌頂式<sup>(24)</sup>を行った。立山曼荼羅諸本のなかでこの流水灌頂式の図像が唯一描かれている作品に『坪井家B本』(写真28)があり、こうした現地の情報を認識していたことや、この作品に見られる筆致の稚拙さとを考えると、この作品は衆徒かあるいはその周辺の関係者が制作したものと推測される。ただしこの場合、流水灌頂式は嬭堂内ではなく、嬭谷川(嬭堂側)のたもとで勤修されている様子が描かれている。なお、流水灌頂式は描かないが、流水灌頂の塔婆の図像だけでそれを示す作品に『龍光寺本』・『大徳寺本』・『佐伯家(省次)本』・『相真坊A本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』・『日光坊A本』がある。



写真28：『立山曼荼羅 坪井家B本』(部分)  
芦峯寺流水灌頂式の場面





写真29：『立山曼荼羅 佐伯家本』（部分）  
 芦峯寺境内地の様子（講堂・開山堂・慈興上人廟所など）

#### E. 芦峯寺の立山開山慈興上人廟所

芦峯寺と岩峯寺は宝永6年(1709)から天保4年(1833)までの約125年間、立山の宗教的権利をめぐり、度々激しい争論を繰り返した。それは特に文化期頃から激化するが、そのなかで、立山大権現を祀る峰本社の特当職号の所有権が争点の一つとなっていた。結局、天保4年(1833)に加賀藩公事場奉行所で下された判決で、芦峯寺は立山峯御前本社(立山峰本社)とは全く無関係であると結審したため(すなわちそれは立山の山そのものに関わる宗教的権利を全て失ったことを意味する)、芦峯寺の立山とのつながりは、唯一立山の開山者である慈興上人の廟所が芦峯寺境内地に存在することだけとなった<sup>(25)</sup>。それゆえ、芦峯寺衆徒にとって、慈興上人廟所<sup>(26)</sup>は立山とのつながりを示す最も重視すべきものだったのである。おそらく、廟所の図像が描かれた作品、あるいは、廟所が置かれていた現在の雄山神社の境内地(写真29)の様子が、鳥居・講堂・拜殿・大宮・若宮・開山堂などの宗教施設の現実的な配置状況に即して丁寧に描かれた作品は、その制作時に芦峯寺衆徒の意識が強く反映されたものといえよう。なお、こうした作品には『坪井家A本』・『佐伯家(省次)本』・『坪井家B本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『相真坊A本』・『立山開発鉄道本』・『龍光寺本』がある。



写真30：『立山曼荼羅 相真坊A本』（部分）  
芦峯寺の玉橋

#### F. 玉橋

芦峯寺閻魔堂に至る参道の途中に玉橋<sup>(27)</sup>が架けられていた。布橋灌頂会の際には、この玉橋から布橋を経て熾堂まで燈明で荘厳されたが、立山曼荼羅諸本のなかに玉橋のような細部のアイテムまで描かれているならば、その作品の制作者は芦峯寺の現地空間をかなり認識していたといえよう。おそらく芦峯寺衆徒自身が描いたか、あるいは制作時にその指示を詳しく受けることができた周辺の人物が描いたのだろう。なお、玉橋が描かれた作品には『坪井家A本』・『佐伯家（省次）本』・『坪井家B本』・『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『相真坊A本』（写真30）・『龍光寺本』・『日光坊A本』がある。

#### G. 三途の川・死出の山の道標

『坪井家B本』（写真31）や『立山開発鉄道本』・『泉蔵坊本』には、千垣と芦峯寺の村境にあたる三途の川のたもとに「三途の川・死出の山」の道標が描かれているが、それらの作品の制作者は現地の状況のある程度認識していたと推測される。

### 4. 立山曼荼羅諸本の分類に対する再検討

#### 4-1. 従来分類とその問題点

かつて沼賢亮氏<sup>(28)</sup>、日和祐樹氏<sup>(29)</sup>、川口久雄氏<sup>(30)</sup>、林雅彦氏<sup>(31)</sup>、高瀬重雄氏<sup>(32)</sup>等が試





写真31：『立山曼荼羅 坪井家B本』（部分）  
三途の川・死出の山の道標

みた立山曼荼羅の分類は、本質的には系統分類ではなく表形分類であり、対象とした作品数に差こそあれ、その内容は概ね「布橋灌頂会」という特定部分の図像の有無により、芦峯寺系と岩峯寺系に二分し、さらに芦峯寺、岩峯寺と直接関係のない第三の系統の存在を示唆するというものであった。

しかし、この分類法には、布橋灌頂会の図像が描かれ芦峯寺宿坊家との関係が確認できる作品（両方の条件を満たしたもの。片方の条件だけではいけない。）と、布橋灌頂会の図像が描かれず岩峯寺宿坊家との関係が確認できる作品（両方の条件を満たしたもの。片方の条件だけではいけない。）だけにしか適応できないといった問題点がある。

すなわち、画面に描かれた多種多様な図像のうち、「布橋灌頂会」という特定部分の図像の有無だけで分類しようとした場合、それが描かれた芦峯寺系作品の識別は容易だが、一方、『竹内家本』や『桃原寺本』・『西田美術館本』・『伊藤家本』に該当することだが、布橋灌頂会の図像が描かれず岩峯寺との関係も確認できない、しかしながら描かれた内容からは岩峯寺系と推測されるような作品、あるいは、布橋灌頂会の図像が描かれていないその他系と推測される作品を識別することは困難であり、そこには別次元の識別基準が必要になる。整理すると、「布橋灌頂会」という特定部分の図像の有無だけでは、厳密には芦峯寺系作品だけしか分類できないということである。次の段階でそれが描かれ



ていない作品を対象として、岩嶽寺系かその他系かを分類しようとする、これとは別の識別基準が必要ということである。

それゆえ、この分類法を採用した場合、下記の事例が示すように、その他の系統に含まざるをえない作品がきわめて多くなる。

〔事例1〕

『来迎寺本』や『大徳寺本』は、布橋灌頂会の図像の有無から判断すると芦嶽寺系に含まれることになるが、現在、それぞれ立山信仰にゆかりのある浄土宗寺院来迎寺や浄土真宗寺院大徳寺に所蔵され、芦嶽寺との直接的な関係が確認できないためその他の系統に含まれている。

〔事例2〕

曹洞宗寺院大江寺所蔵の『大江寺本』は、布橋灌頂会の図像の有無から判断すると芦嶽寺系に含まれることになるが、芦嶽寺との直接的な関係が確認できないためその他の系統に含まれることになる。

〔事例3〕

天台宗寺院最勝寺所蔵の『最勝寺本』は、一般的な図柄ではないが、布橋灌頂会をイメージしたと推測される図柄が描かれ、芦嶽寺の影響を強く受けているようである。しかし、芦嶽寺との直接的な関係が確認できないためその他の系統に含まれている。

〔事例4〕

『富山県立図書館本』や『越中書林本』は、布橋灌頂会の図像の有無から判断され芦嶽寺系に含まれているが、芦嶽寺との直接的な関係が確認できないためその他の系統に含まれることになる。

〔事例5〕

浄土真宗寺院桃原寺所蔵の『桃原寺本』や西田美術館所蔵の『西田美術館本』、個人所蔵の『伊藤家本』、個人所蔵の『竹内家本』は布橋灌頂会の図像の有無から判断すると岩嶽寺系に含まれることになるが、岩嶽寺との直接的な関係が確認できず、その他の系統に含まれることになる。

〔事例6〕

岩嶽寺多賀坊に所蔵される『多賀坊本』は布橋灌頂会の図像の有無から判断され芦嶽寺系に含まれているが、芦嶽寺との直接的な関係が確認できず、その他の系統に含まれることになる。

〔事例7〕

現在、岩嶽寺系に含まれている『市神神社本』と『志鷹家本』は、岩嶽寺の立山禪定

登山案内図（木版）を拡大模写したもののだが、制作者が原本とした立山禅定登山案内図が必ずしも岩嶽寺衆徒から直接もたらされたものであるとは断定できず、流れ回った案内図を偶然入手した人物が模写したかもしれず、その他の系統に含まれることになる。

さて、こうした一連の方法に対し、岩鼻通明氏は氏の論考<sup>(33)</sup>のなかで「従来の（立山曼荼羅諸本の）分類は絵図中の表現の有無に大きく依存する傾向が強いが、これだけ多数の立山マンダラの存在が知られるようになった現在、細部の表現だけでなく、それがどの部分に描かれているかという全体的な構図の中での配置が分類の際の重要な基礎となろう。というのは、立山マンダラの表現内容にその作成主体の空間認識が大きく関連していると仮定すれば、その空間認識はまず全体的な構図の決定の際に強くはたらし、様々な構図の差異を生み出し、それが細部の表現の有無にもつながると考えられるからである。」と述べられ、ここで従来の布橋灌頂会の図像の有無による分析に加え、初めて作成主体にも着目した分析がなされ進展がみられた。

ただし、筆者が本稿で度々指摘するように、「立山信仰の物語や世界を表現する図像がどのような筆致・法量・色彩で描かれ、画面のどの場所に配置されているか」といった、いわゆる制作主体に直接関わる問題については、制作主体が個々に持つ経験や技術・感性に負うところが大きく、ファジーな要素が強いためそう簡単に結果がでるものではない。

そして、岩鼻氏の提言にもかかわることだが、作成主体の空間認識の問題を扱う以前に、作成主体の実態や描写傾向を相当念密に分析しておく必要がある。本稿でも試みとして、第3章において立山曼荼羅制作者の意識を検討してきたが、これもあくまで一般論的な傾向を指摘したに過ぎず、厳密な判断基準とまではいかないであろう。

#### 4-2. 立山曼荼羅諸本に対する新たな分類

前節では、先学諸氏が立山曼荼羅諸本に対して試みた分類法についてその問題点を指摘したが、それでは、これを踏まえた上で、いったいどのような分類法が適しているのだろうか。

筆者はそれについて、現段階では後退的な方法と捉えられるかもしれないが、筆者が第1章・第2章で試みたように、まず、図像描写の有無による表形分類法で「内容」の面からある程度分類し、その結果を援用しながら、一方で裏書きや関連史料などから判明した事実が作品の分類に直接的に貢献し得る場合はそれを最重視して取り入れ、表形分類法による結果を補正・補足しながら総合的に判断するといった方法が効果的であると考えている。

以下、具体的に筆者の分類内容を整理しておきたい。すなわち、前掲の第2図におけるA群は芦峯寺系立山曼荼羅の一群として分類した。ただし、『玉林坊本』については、岩峯寺玉林坊に伝来し現在に至っている事実を重視し、本稿では岩峯寺系立山曼荼羅として位置づけた。B-1群は岩峯寺系立山曼荼羅の一群として分類した。ただし、『坪井家A本』については、軸裏の銘文の内容を最重視し、本稿では芦峯寺系立山曼荼羅として位置づけた。B-2-1群は芦峯寺系立山曼荼羅の一群として分類した。B-2-2群は、従来の研究で位置づけられてきた芦峯寺系・岩峯寺系・その他の寺院系といった各系統に属する作品が混在する一群であり、いわば見た目では類別が困難な作品が属している一群といえる。そこで、分類する際には、各作品の来歴や軸裏の銘文、岩峯寺の木版立山禪定登山案内図との関連性などを最重視した。さらに、全作品に対し、今後制作者の空間認識を考察していくうえで示唆に富む情報となり得ると考え、各作品と宿坊家との関係も補足し、立山曼荼羅諸本の分類を次のように定義した。それにもとづく分類は第11表に示すとおりである。

【芦峯寺A系統】

◎宿坊家との関係の点から

芦峯寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が確認できる作品。

◎構図・図柄の点から

芦峯寺集落や同寺の祭礼が強調的に描かれている作品。

【芦峯寺B系統】

◎宿坊家との関係の点から

芦峯寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が軸裏の銘文や関連史料などから推測できる作品（断定には至らない）。芦峯寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が確認できない作品。

◎構図・図柄の点から

芦峯寺集落や同寺の祭礼が強調的に描かれている作品。芦峯寺の木版立山禪定登山案内図を模写して制作された作品。

【岩峯寺A系統】

◎宿坊家との関係の点から

岩峯寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が確認できる作品。

◎構図・図柄の点から

岩峯寺集落が強調的に描かれている作品。

【岩峯寺B系統】



◎宿坊家との関係の点から

岩嶽寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が軸裏の銘文や関連史料などから推測できる作品（断定には至らない）。岩嶽寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が確認できない作品。

◎構図・図柄の点から

岩嶽寺集落が強制的に描かれている作品。岩嶽寺の木版立山禪定登山案内図を模写して制作された作品。

【その他】

◎宿坊家との関係の点から

芦嶽寺・岩嶽寺の宿坊家及びその衆徒との直接的・間接的な関係が確認できない。

◎構図・図柄の点から

構図や図柄は芦嶽寺（A・B）系統や岩嶽寺（A・B）系統の作品の影響を多少受けているとはいえ、総合的にはオリジナル性が高い。構図や図像は芦嶽寺（A・B）系統や岩嶽寺（A・B）系統の作品の影響がきわめて希薄である。構図・図柄はオリジナルなものである。

## おわりに

今回、絵画史料である立山曼荼羅を圖像描写の面から根本的に検討するため、現存作品全てを対象として、それぞれに描かれた事物の分節・名付け作業を行った。そして、そのデータをもとに、動物分類学や生物分類学の分野で用いられる表形分類法を活用し、作品どうしの類似度を示すマトリクスや樹形図を作成した。さらに、それを基盤として各作品と宿坊家との関係を補足しながら新たな分類を提示した。

こうした一連の作業や分析を進める過程で、立山曼荼羅に根源的に描かれている事物の図像は雄山・称名滝・玉殿窟（立山開山伝説を表す）・立山頂上社殿・室堂であることがわかった。また、立山曼荼羅全作品の7割以上に見られる図像には自然景観（立山地獄の一場面の血の池地獄や賽の河原の図像、立山禪定登山案内の一場面の獅子ヶ鼻・一ノ谷の鎖場の図像を含む）や自然物に関する事物がかなり多く、次いで縁起としての立山開山伝説の内容や岩嶽寺・芦嶽寺集落の全体的な表現が続くこともわかった。これらの点から判断すると、当然のことかもしれないが、立山曼荼羅はあくまでも自然景観や自然と直接関わる事物を基盤として成り立っているといえよう。

## 〔謝辞〕

本稿の執筆にあたり、特に第2章7節に提示した第2図の作成については、富山大学教育学部助教授横畑泰志氏と本館主任吉井亮一氏の多大な御協力を得た。ここに記して厚く御礼を申し上げる次第である。

## 註

- 1) 福江充『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動』(口絵写真1頁~24頁・口絵写真解説367頁~383頁、岩田書院、1998年4月)を参照のこと。
- 2) 現存立山曼荼羅41点の各々の幅数については、5幅1対の作品が1点、4幅1対の作品が22点、3幅1対の作品が3点、2幅1対の作品が4点、1幅の作品が8点となっている。これ以外に『伊藤家本』はその構図や図像配置から、おそらく本来は4幅1対であったと推測されるが、現在はそのうちの向かって左端幅から2幅しか残っていない。また『村上家本』も1幅しか残っていないが、本来は複数幅の掛幅本であったと推測される。一方、『大江寺本』は掛軸形式ではなく、収納方法が折り畳み式の1枚物で、法量が220.0cm×260.0cm(外寸)と他の作品と比較して群を抜いて巨大である。この他、2幅一対の立山曼荼羅として『藤縄家本』や『称念寺A』、『称念寺B本』、『高橋家旧蔵本』などがあるが、その制作主体は芦峯寺衆徒や岩峯寺衆徒でない場合が多い。また、1幅物の作品のうち『多賀坊本』や『志鷹家本』、『市神神社本』は木版の立山禅定登山案内図を拡大模写したものである。
- 3) 現存の作品中、法量が最大のものは縦190.0cm×横220.0cm(内寸)の『大江寺本』であり、本紙面積が41,800cm<sup>2</sup>となる。掛軸形式の作品では『来迎寺本』が縦163.0cm×横240.0cm(内寸)で本紙面積が39,120cm<sup>2</sup>となり最大である。なお内寸が確認できた39点の作品の本紙面積の平均は22,340.6cm<sup>2</sup>である。それゆえ本紙が149.5cm四方の作品が平均サイズということになる。
- 4) 構図に特徴的な類似が見られる作品に『来迎寺本』と『坪井家A本』があげられる。これについては、福江前掲著『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動』(89頁~114頁)を参照のこと。
- 5) 模写関係が推測される作品群として、(a)『富山県立図書館本』・『泉蔵坊本』・『立山町本』・『坂木家本』、(b)『宝泉坊本』・『吉祥坊本』・『越中書林本』、(c)『相真坊B本』・『大仙坊A本』・『宝龍坊旧蔵本』・『善道坊本』があげられる。(d)なお、(c)の作品と何らかの影響関係が見られる参考作品に『佐伯家(省次)本』・『坪井家B本』があげられる。以上については、福江前掲著『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動』

(137頁～176頁)を参照のこと。(e)『多賀坊本』・『稲沢家本』。(f)『玉林坊本』・『中道坊本』・『桃原寺本』・『西田美術館本』・『伊藤家本』。(g)明治初期の廃仏毀釈の影響が表れている作品群として『坂木家本』・『日光坊B本』・『玉泉坊本』。(h)木版の立山禪定登山案内図を拡大模写した作品として『市神神社本』・『志鷹家本』。

6) 立山曼荼羅諸本において、制作者が判明している事例は次に示すとおりである。

A. 『立山曼荼羅 市神神社本』

文化3年(1806)10月、北条左近平氏富が岩嶽寺の立山禪定登山案内図(木版画)をそのまま拡大模写して制作したもの。

B. 『立山曼荼羅 称念寺B本』

文化10年(1827)2月、称念寺の第40世住職順珍が信州の画工桂斎に外注して制作したもの。

C. 『立山曼荼羅 立山博物館本(高橋家旧所蔵本)』

文政期に越後国で廻檀配札活動を行っていた岩嶽寺中道坊との関係から、同国高田の田中氏が文政2年(1819)5月に中道坊が所持する立山曼荼羅を書写して制作したもの。

D. 『立山曼荼羅 坪井家A本』

『坪井家A本』は元来芦嶽寺教順坊所蔵の立山曼荼羅であった。天保元年(1830)頃に、当時芦嶽寺に定住していた元高野山の学侶龍淵が、破損が著しい『教順坊本』を教順坊より譲り受け、彼自身が指示して画工飛陽蘭江斎に修理・補筆させた。

E. 『立山曼荼羅 最勝寺本』

安政2年(1855)9月、尾張国知多郡寺本村の常光院住僧至円が「立山和光大権現画伝」と題して描写したもので、その制作にあたっては在地の多くの人々の結縁により制作費が負担された。そして、完成後は地元知多郡阿久比の天台宗大円山最勝寺に寄進された。

F. 『立山曼荼羅 宝泉坊本』

安政5年(1858)12月、芦嶽寺宝泉坊と師檀関係を結んでいた三河国西尾藩主松平乗全が、既存の立山曼荼羅を自ら模写して新規に立山曼荼羅を制作し、芦嶽寺宝泉坊に寄進した。

G. 『立山曼荼羅 吉祥坊本』

慶応2年(1866)4月、三河国岡崎藩主本多忠民等が当時師檀関係を結んでいた芦嶽寺吉祥坊に立山曼荼羅の寄進を思い立ち、おそらく吉祥坊衆徒に制作のための祠堂金を寄進し、それを資金として吉祥坊衆徒が自坊の信徒でもある登光斎林龍と林豊の2



名の絵師を雇って立山曼荼羅を描かせた。登光斎林龍と林豊については、どちらがどちらかは判別できないが、南伝馬町2丁目の加賀屋忠七と銀座4丁目の栄文堂庄之助であったと推測される。後の慶応2年(1866)8月には、皇女和宮(法号静寛院)も施主の一人に加わっている。

H. 『立山曼荼羅 富山県立図書館本』

軸裏の銘文に「遠州敷智郡引馬城之南 米津村磐谷写之」と記され、遠江国敷智郡米津村の絵師磐谷が既存の立山曼荼羅を模写して制作した。

I. 『立山曼荼羅 志鷹家本』

「越中国立山図」と題され、岩嶽寺の立山禪定登山案内図(木版画)を拡大模写して天保期頃に制作されたと推測される。軸裏の銘文として、幅の上段に「維時天保七申年十月日 小松谷御坊正林寺御什物 当山十七世玉誉上人御代」と記され、また下段には「御曼陀羅奉納施主」として上田幸右衛門・森本泰甫・村田庄八の3名と、「信心輩」として藤屋清兵衛他13名の名前が記されている。

J. 『立山曼荼羅 善道坊本』

軸裏に銘文として旧善道坊佐伯龍泰(美那登)・佐伯寛微親子の名前をはじめ、この作品の施主として、沢井氏や鈴木伝七(府相村)、内田七五三吉(三谷町)等、三河国の信徒たちの名前が俗名或いは戒名で記されている。収納箱は大正3年(1914)に三河国幡豆郡吉田村の鈴木国松が製作し寄進したものである。

- 7) 「立山大縁起三巻 并ニ略縁起壹巻 御上江上ル扣」(文化14年に加賀藩寺社奉行に提出、芦嶽寺一山会本〔権教坊本〕)、『越中立山古記録 第3巻』(1頁～2頁、廣瀬誠編、立山開発鉄道株式会社、1991年10月28日)。
- 8) 「立山略縁起」(文化13年に加賀藩寺社奉行に提出、芦嶽寺一山会本〔権教坊本〕)、『越中立山古記録 第3巻』(10頁、廣瀬誠編、立山開発鉄道株式会社、1991年10月28日)。
- 9) 『富山県史史料編 I 古代』(31頁～32頁、富山県、1970年3月31日)。
- 10) 「立山縁起(岩嶽寺延命院所蔵本、嘉永6年8月、延命院玄清)」(『富山県史史料編 I 古代』所収、14頁・15頁、富山県、1970年3月31日)。
- 11) 『富山県史史料編 I 古代』(21頁、富山県、1970年3月31日)。
- 12) 林雅彦『増補日本の絵解き一資料と研究』(74頁、三弥井書店、1984年6月)。
- 13・14) 福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦嶽寺衆徒の徹底活動』(53頁～87頁)を参照のこと。
- 15) 菊池武「我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会(前篇)」(富山県 [立山博物

- 館]、1994年3月)、菊池武「我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会(後篇)」(富山県 [立山博物館]、1995年3月)を参照のこと。
- 16)『越中立山古記録 第4巻』(11頁～14頁、高瀬保編、立山開発鉄道株式会社、1992年6月)。
- 17)『越中立山古記録 第3巻』(144頁～146頁、廣瀬誠編、立山開発鉄道株式会社、1991年10月28日)。
- 18)福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦峯寺衆徒の勸進活動』(62頁～63頁・77頁～79頁)を参照のこと。
- 19)福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦峯寺衆徒の勸進活動』(63頁～64頁・80頁～81頁)を参照のこと。
- 20)福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦峯寺衆徒の勸進活動』(150頁～157頁)を参照のこと。
- 21)福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦峯寺衆徒の勸進活動』(57頁～59頁)を参照のこと。
- 22)個人(立山町芦峯寺在住)所蔵の芦峯寺文書を佐伯泰正氏がコピーして所持されるものを拝見させていただいた。同文書には、影向石について「一、影向石と申して△如斯形ニシテ長ケ壹尺三寸斗リ、横巾四寸斗リ、是レハ元新川姫ノ神靈ト号テ、古ヨリ尊敬シテ當社ニ秘藏セリ。尤前田家ヨリ柵ツリヲカレ候。」と記載されている。
- 23)芦峯寺閻魔堂脇に露天で安置された地藏菩薩に関する記事。「一、閻魔堂 廿四日 五尊共御共備ヒ。外ニ地藏菩薩尊御供上ル。此ハ教蔵坊方祠堂附有。金子ハ一山ヘ差出し候。」(廣瀬誠編『越中立山古記録 第1巻』37頁所収、立山開発鉄道株式会社、1989年9月20日)。
- 24)芦峯寺で勤修された流水灌頂式に関する記事。「二月彼岸中日ニ、過去帳惣廻向可致事。又、七月十五日、施餓鬼相勤候時、過去帳廻向可仕事也。六月七日、流水灌頂之供法も可仕事。」(廣瀬誠編『越中立山古記録 第1巻』36頁所収、立山開発鉄道株式会社、1989年9月20日)。この他、高瀬保編『越中立山古記録 第4巻』(10頁所収、立山開発鉄道株式会社、1992年6月25日)にも関係記事が見られる。
- 25)福江前掲書『立山信仰と立山曼荼羅一芦峯寺衆徒の勸進活動』(115頁～136頁)を参照のこと。
- 26)慈興上人廟所に関する記事。「一立山大権現ト申候は、則開山慈興上人ノ勸請ニ御座候処、七ヶ所ニ坊社建立被成置候而、各七ヶ所方信心之行者、任志納経帳書出、且牛王札相渡申由ニ御座候。然處、中古五ヶ所退転任、只今ニ而ハ芦峯・岩峯兩寺相残、

左候得ば、兩寺共慈興上人之弟子ニ而法脈相統仕候得ば、一山兩寺ニ御座候得バ、同様之儀ト奉存候。其内芦峯寺ハ大権現之内ニ住居仕、殊ニ開山慈興上人靈廟御座候而、開山地故、其由緒を以御上為御武運長久、権現祭禮之法式、芦峯寺ニおみて相勤申候。」

(廣瀬誠編『越中立山古記録 第1巻』58頁所収、立山開発鉄道株式会社、1989年9月20日)。

- 27) 芦峯寺の玉橋に関する記事。「一、除掃之儀は、玉橋方燭堂相廻り、橋下・石垣・亀甲・両谷縁迄も除掃可致事。」(廣瀬誠編『越中立山古記録 第1巻』45頁所収、立山開発鉄道株式会社、1989年9月20日)。「一 玉橋方燭堂之間、万燈壁小灯燈三百八十余燈ス。御紋附ノ大灯、焰魔堂御拜先二王門前、燭堂御拜先ニ立ル」(高瀬保編『越中立山古記録 第4巻』12頁所収、立山開発鉄道株式会社、1992年6月25日)。
- 28) 沼賢亮「立山信仰と立山曼荼羅」(『佛教藝術 第68号』、佛教藝術学会編、毎日新聞社、1968年8月)。
- 29) 日和祐樹「立山信仰と勸進」(『白山・立山と北陸修験道〔山岳宗教史研究叢書10〕』高瀬重雄編、名著出版、1977年9月)。
- 30) 川口久雄「立山曼陀羅と姥神信仰—敦煌本十王經画卷の投影」(『日本海域研究所報告 第5号』金沢大学日本海域研究所、1973年3月)。
- 31) 林雅彦「『立山曼荼羅』諸本攷の試み」(『国語国文論集 第7号』学習院女子短期大学国語国文学会、1978年3年)。
- 32) 高瀬重雄「立山曼陀羅の文化史的考察」(『立山信仰の歴史と文化〔高瀬重雄文化史論集1〕』、名著出版、1981年3月)。
- 33) 岩鼻通明「宗教景観の構造把握への一試論—立山の縁起、マンダラ、参詣絵図からのアプローチ」(『空間景観イメージ』所収、京都大学文学部地理学研究室編、地人書房、1983年8月)。岩鼻氏は布橋灌頂会の図像の有無に加え「作成主体の空間認識にもとづく構図と表現の差異から、立山マンダラを三系統に分類することを試みた。」として次のように分類した。芦峯寺系→大江寺本・多賀坊本・稲沢家本・立山開発鉄道本・龍光寺本・大仙坊B本・相真坊B本・大仙坊A本・宝龍坊旧蔵本・佐伯省次氏本・相真坊A本・宝泉坊本・吉祥坊本・富山県立図書館本・泉蔵坊本・坂木家本・竹内家本。岩峯寺系→玉林坊本・中道坊本・桃原寺本・志鷹家本・高橋家旧蔵本。その他の寺院系→来迎寺本・大徳寺本・藤縄家本。ところで、岩鼻氏は論文において『吉祥坊本(静寛院寄進本)』を模写して『宝泉坊本』が制作されたと指摘されているが、それぞれの制作年代は『吉祥坊本』が慶応2年、『宝泉坊本』が安政5年であり、『宝泉坊本』を模写して『吉祥坊本』が制作されたものである。それゆえ、『宝泉



坊本』の制作者（三河国西尾藩主松平乗全）が正しく認識していて、それを模写した『吉祥坊本』の制作者が誤認したということになる。また、『龍光寺本』は元来芦峯寺日光坊が所蔵していたもので、内容的にも芦峯寺系の立山曼荼羅と考えたほうがよい。

第1表：立山曼荼羅諸本の現存状況

番号	諸本名	素材	幅数	法量(縦cm×横cm)	法量(本紙面積Cm <sup>2</sup> )	裏書きの有無	成立年次
1	0 1 坪井家(龍童)A本	紙本	4	(内寸) 180.0×186.0 (外寸) 210.0×190.0	33480.0	有	天保元年(1830)以前
2	0 2 来迎寺本	紙本	4	(内寸) 163.0×240.0 [外2幅57.0中2幅63.0]	39120.0	無	
3	0 3 大江寺本	紙本	1	(内寸) 190.0×220.0 (外寸) 220.0×260.0	41800.0	無	
4	0 4 最勝寺本	紙本	1	(内寸) 175.0×96.0 (外寸) 261.0×137.5	16800.0	有	安政2年(1855)
5	0 5 多賀坊本	紙本	1	(内寸) 93.0×84.0	07812.0	無	
6	0 6 稲沢家本	絹本	3	(内寸) 140.0×166.5 [55.5×3幅] (外寸) 196.5×198.0	23310.0	無	
7	0 7 立山開発鉄道(佐伯宗義)本	絹本	3	(内寸) 143.0×173.0	24739.0	無	
8	0 8 龍光寺本	紙本	4	(内寸) 167.0×223.0	37241.0	無	
9	0 9 大徳寺本	紙本	4	(内寸) 170.0×185.0	31450.0	無	
10	1 0 大仙坊B本	絹本	4	(内寸) 156.0×212.0	33072.0	無	
11	1 1 相真坊B本	絹本	4	(内寸) 150.0×216.5 (外寸) 199.5×235.0	32475.0	無	
12	1 2 大仙坊A本	絹本	4	(内寸) 133.0×157.0 (外寸) 163.0×164.5	20881.0	無	
13	1 3 宝龍坊旧蔵本	絹本	4	(内寸) 145.0×210.0	30450.0	未见	
14	1 4 善道坊本	紙本	4	(内寸) 131.5×179.0 [外2幅40.5中2幅49.0] (外寸) 191.0×191.0	23538.5	有	
15	1 5 佐伯家(省次)本	紙本	4	(内寸) 149.0×180.0 [外2幅42.0中2幅48.0] (外寸) 183.5×192.0	26820.0	無	
16	1 6 坪井家(義昭)B本	紙本	4	(内寸) 150.0×150.0 (外寸) 170.0×170.0	22500.0	無	
17	1 7 相真坊A本	絹本	5	(内寸) 136.0×203.0 [外2幅37.0中3幅43.0]	27608.0	無	
18	1 8 宝泉坊本	絹本	4	(内寸) 140.0×180.0 [左から44.9×3幅、右端幅45.3] (外寸) 222.0×198.0	25200.0	有	安政5年(1858)
19	1 9 吉祥坊本	絹本	4	(内寸) 128.5×147.0 [外2幅36.5中2幅37.0] (外寸) 210.5×162.6	18889.5	有	慶応2年(1866)
20	2 0 越中書林本	紙本	1	(内寸) 173.0×90.0 (外寸) 233.0×108.0	15570.0	無	

履歴	備考	所蔵	所在
1 芦峯寺教順坊旧蔵本～ 龍淵旧蔵本～芦峯寺日 光坊旧蔵本～坪井家	元来は芦峯寺教順坊本。文政期に龍淵が教順坊から貰い受け補筆して使用。後に芦峯寺日光坊に渡る。日光坊と師檀関係を結ぶ坪井家に伝わる。	個人蔵	愛知県中村区
2	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵（来迎寺蔵）	富山市
3	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵（大江寺蔵）	三重県鳥羽市
4	絵のモチーフや部分的な図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵（最勝寺蔵）	愛知県知多郡
5	芦峯寺の木版立山禅定登山案内図を拡大模写して制作している。制作者と芦峯寺宿坊家との関係は不明。	個人蔵	立山町
6 福泉坊旧蔵本～稲沢家	元来は芦峯寺福泉坊に伝わる。	個人蔵	立山町
7 芦峯寺宿坊家旧蔵本～	芦峯寺宿坊家に伝わる。	立山開発鉄道（株）蔵	富山市
8 芦峯寺日光坊旧蔵本	元来は芦峯寺日光坊に伝わる。	個人蔵	上市町
9	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵	魚津市
10	芦峯寺大仙坊に伝わる。	個人蔵	立山町
11	芦峯寺相真坊に伝わる。	個人蔵	立山町
12	芦峯寺大仙坊に伝わる。	個人蔵	立山町
13 芦峯寺日光坊旧蔵本～ 芦峯寺宝龍坊旧蔵本～ 筒井家	元来は芦峯寺宝龍坊に伝わる。	個人蔵	立山町
14	芦峯寺善道坊に伝わる。	個人蔵	神奈川県藤沢市
15 佐伯省次氏の曾祖母と く（元治元年生）の兄 弟佐伯久松	芦峯寺門前百姓嘉蔵家（文化10年の宗門改帳から記載が見られる）で制作された。嘉蔵の3男佐伯久松が明治入り立山信仰を布教し、絵解きに使用していた。	個人蔵	立山町
16 芦峯寺日光坊旧蔵本～ 坪井家	元来は芦峯寺日光坊の所蔵。同坊と師檀関係を結ぶ坪井家に伝わる。	個人蔵	愛知県中村区
17 芦峯寺雄山神社祈願殿 旧蔵本	芦峯寺相真坊が所蔵する以前は、芦峯寺雄山神社祈願殿の所蔵であった。	個人蔵	立山町
18	芦峯寺宝泉坊に伝わる。宝泉坊と師檀関係を結ぶ西尾藩主松平乗全が描いた作品。後に宝泉坊に奉納される。	個人蔵	富山市
19	芦峯寺吉祥坊に伝わる。吉祥坊と師檀関係を結ぶ岡崎藩主本多忠民の主導で皇女和宮を施主とし江戸の絵師に描かせ同坊に奉納した。	個人蔵	東京都世田谷区
20 平井氏旧蔵本～	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	越中書林蔵	富山市



番号	諸本名	素材	幅数	法量(縦cm×横cm)	法量(本紙面積Cm <sup>2</sup> )	裏書きの有無	成立年次
21	2 1 富山県立図書館本	絹本	4	(内寸) 133.0×153.0 (外寸) 140.0×210.0	20349.0	有	
22	2 2 泉蔵坊本	絹本	4	(内寸) 122.0×134.0	16348.0	無	
23	2 3 立山町本	紙本	4	(内寸) 122.5×124.0	15190.0	無	
24	2 4 坂木家本	紙本	4	(内寸) 134.5×147.0 [外2幅34.5中2幅39.0] (外寸) 170.3×157.8	19771.5	有	
25	2 5 日光坊B本	紙本	3	(内寸) 110.0×90.6	9966.0	無	
26	2 6 玉泉坊本	絹本	1	(内寸) 94.0×47.0 (外寸) 158.0×63.2	4418.0	無	
27	2 7 日光坊A本	絹本	1	(内寸) 41.0×54.5 (外寸) 124.0×64.0	2234.5	無	
28	2 8 玉林坊本	紙本	4	(内寸) 143.0×202.0	2886.0	無	
29	2 9 中道坊本	紙本	4	(内寸) 124.7×225.0 (外寸) 193.3×242.0	28057.5	無	
30	3 0 西田美術館本	紙本	4	(内寸) 150.0×224.0	33600.0	無	
31	3 1 桃原寺本	紙本	4	(内寸) 156.0×188.0 [47.0×4幅] (外寸) 183.5×192.0	29328.0	無	
32	3 2 伊藤家本	紙本	2	未測定	未測定	無	
33	3 3 竹内家本	紙本	4	(内寸) 135.0×190.0 [47.5×4幅]	25650.0	無	
34	3 4 志鷹家(新太郎)本	紙本	1	(内寸) 137.0×86.0 (外寸) 193.8×105.0	11782.0	有	天保7年(1836)
35	3 5 市神社本	紙本	1	(内寸) 102.0×55.5 (外寸) 169.0×70.0	5661.0	無	文化3年(1806)
36	3 6 立山博物館本(高橋家旧蔵本)	紙本	2	(内寸右) 131.7×58.8 (内寸左) 131.7×58.8 (外寸) 214.5×65.6	15487.9	有	文政2年(1819)
37	3 7 称念寺A本	紙本	2	(内寸右) 175.8×90.5 (内寸左) 175.5×90.7 (外寸右) 209.5×95.8 (外寸左) 200.7×95.5	31827.8	無	
38	3 8 称念寺B本	紙本	2	(内寸右) 152.1×67.8 (内寸左) 152.5×69.0 (外寸右) 194.0×71.3 (外寸左) 199.0×72.6	20834.9	有	文化10年(1813)
39	3 9 村上家本	紙本	1	未測定	未測定	無	
40	4 0 藤縄家本	紙本	2	(内寸右) 94.0×55.7 (内寸左) 124.3×56.0	12196.6	無	
41	4 1 称名庵本	紙本	1	(内寸) 90.5×76.7 (外寸) 154.5×93.0	6941.3	無	箱.天保14年(1843)7月

展歴	備考	所蔵	所在	
21	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅と類似する。裏書から遠江園の磐谷が既存の立山曼荼羅を模写したことがわかる。	富山県立図書館蔵	富山市	
22	芦峯寺泉蔵坊に伝わる。	個人蔵	富山市	
23	元来は芦峯寺長覚坊に伝わる。	立山町蔵	立山町	
24	福泉坊旧蔵本～坂木家	元来は芦峯寺福泉坊に伝わる。	個人蔵	立山町
25	芦峯寺日光坊に伝わる。	個人蔵	立山町	
26	芦峯寺玉泉坊に伝わる。	個人蔵	立山町	
27	芦峯寺日光坊に伝わる。	個人蔵	立山町	
28	岩峯寺玉林坊に伝わる。	個人蔵	富山市	
29	制作当初から表装は施されていない。表装は立博で	岩峯寺中道坊に伝わる。	個人蔵	立山町
30	絵のモチーフや構図・図柄は岩峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	西田美術館蔵	上市町	
31	絵のモチーフや構図・図柄は岩峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵（桃原寺蔵）	魚津市	
32	絵のモチーフや構図・図柄は岩峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵	小矢部市	
33	絵のモチーフや構図・図柄は芦峯寺・岩峯寺両宿坊家に伝わる立山曼荼羅を参考にしているが、オリジナル的な要素も多く見られる。	個人蔵	滋賀県甲賀郡	
34	小松谷御坊正林寺旧蔵本	岩峯寺の木版立山禪定登山案内図を拡大模写して制作している。制作者と岩峯寺宿坊家との関係は不明。	個人蔵	立山町
35	岩峯寺の木版立山禪定登山案内図を拡大模写して制作している。製作者と岩峯寺宿坊家との関係は不明。	個人蔵（市神社蔵）	滋賀県八日市市	
36	栃木県足利市田中家～東京都大田区千鳥高橋家～立山博物館	岩峯寺中道坊と師檀関係を結ぶ越後国糸魚川の信徒が文政2年に制作した。	富山県〔立山博物館〕蔵	立山町
37	構図・図柄は称念寺のオリジナルといえる。山絵図の様相を有する。	個人蔵（称念寺蔵）	高岡市	
38	構図・図柄は称念寺のオリジナルといえる。山絵図の様相を有する。	個人蔵（称念寺蔵）	高岡市	
39	絵のモチーフや構図・図柄は岩峯寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。	個人蔵	八尾町	
40	構図・図柄はオリジナルといえる。	個人蔵	上市町	
41	富山市石田高森家～立山博物館	構図・図柄は称名庵のオリジナルといえる。	富山県〔立山博物館〕蔵	立山町









No.	構成要素 / 一作品番号	該当地域	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
79	079 布衾の四方を囲む杉の大木	芦峯寺	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
80	080 布衾の四方を囲む四方鏡	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
81	081 「布衾大難負」や「立山御遷尊」等と記された祭 礼帳(文言が塗りつぶされている場合も有り)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
82	082 舟の祖	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
83	083 石造物(石標・石仏・宝篋印塔・磨崖仏等)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
84	084 彌雲川の大蛇	芦峯寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
85	085 流水兼負の卒都婆	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
86	086 布衾殿での流水兼負会	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
87	087 雄山神社立山大神祭	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
88	088 「雄山神社立山大神祭」の旗	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
89	089 舟衣裳	芦峯寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
90	090 舟衣裳(奥の姿で描かれている場合も有り)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
91	091 衣掛樹	芦峯寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
92	092 衣を剥がれた亡者(男性)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
93	093 衣を剥がれた亡者(女性)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
94	094 立山大神現祭(神輿)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
95	095 立山大神現祭(獅子踊)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
96	096 立山大神現祭(社人)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
97	097 立山大神現祭(衆徒)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
98	098 立山大神現祭(神輿の担ぎ手)	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
99	099 立山大神現祭に参詣する人々	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
100	100 山車を使用する何らかの祭礼	芦峯寺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
101	101 三途の川・死出の山の道標	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
102	102 藤橋	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
103	103 藤橋を渡るうとする道元禪師	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
104	104 藤橋の猿	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
105	105 材木坂	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
106	106 美女杉	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
107	107 糸杉	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
108	108 称名滝	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
109	109 称名滝に顕現する不動明王	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
110	110 伏し拝みから称名滝を礼拝する禪頂登山者	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
111	111 桑谷小屋	立山山中	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
112	112 一ノ谷の箱場	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
113	113 一ノ谷の箱場を供養する禪頂登山者	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
114	114 獅子ヶ塚	立山山中	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
115	115 弘法大師の湯屋供養	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
116	116 厨掛付の松	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
117	117 弥陀ヶ原の精霊田	立山山中	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
118	118 礪石	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
119	119 鏡石	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
120	120 室堂(小屋)	立山山中・ 室堂平	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
121	121 佐伯有頼と飯(玉に3幅や1幅の一部の立山 曼荼羅において、作品の中央部に描かれる)	立山山中	×	×	×	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
122	122 立山開山伝説における玉殿窟の場面、或いは 窟そのものを表す図像(※全体的な表現)	立山山中・ 室堂平・玉 殿窟	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
123	123 玉殿窟に顕現した矢兼阿弥陀如来、或いは矢 兼がない阿弥陀如来、僧など	立山山中・ 室堂平・玉 殿窟	●	●	●	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
124	124 玉殿窟に顕現した不動明王	立山山中・ 室堂平・玉 殿窟	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
125	125 阿弥陀如来顕現の靈験にひれ伏す佐伯有頼( 慈明上人)	立山山中・ 室堂平・玉 殿窟	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
126	126 立山山頂に顕現する伊弉諾命	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
127	127 立山山頂に顕現する手力男尊	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
128	128 六軒堂	立山山中	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
129	129 威堂	立山山中	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
130	130 一ノ越	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
131	131 二ノ越	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
132	132 三ノ越	立山山中	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
133	133 四ノ越	立山山中	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
134	134 五ノ越	立山山中	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
135	135 立山頂上社殿(立山峰本社)	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
136	136 雄山	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
137	137 大夜山	立山山中	●	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
138	138 富士折立山	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
139	139 富士形	立山山中	×	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
140	140 浄土山	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
141	141 別山	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
142	142 鏡屋	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
143	143 大夜山の堂舎	立山山中	●	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
144	144 富士折立山の堂舎	立山山中	×	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
145	145 浄土山の堂舎	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
146	146 別山の堂舎	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
147	147 別山山頂から鏡屋を礼拝する禪頂登山者	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
148	148 鏡屋の塔(自然の塔)	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
149	149 鏡屋の僧入(女性)	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
150	150 鏡屋の僧入(男性)	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
151	151 立山頂上社殿(立山峰本社)で礼拝する禪頂 登山者	立山山中	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
152	152 室堂で末詣をする禪頂登山者	立山山中	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●











	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	●全	△全	×全	●声	△声	×声	●岩	△岩	×岩	●他	△他	×他
153	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	09	00	32	09	00	18	00	00	09	00	00	05
154	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	06	00	35	06	00	21	00	00	09	00	00	05
155	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	25	01	15	14	01	12	08	00	01	03	00	02
156	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	01	00	40	01	00	26	00	00	09	00	00	03
157	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	30	01	10	19	01	07	09	00	00	02	00	05
158	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	39	00	02	25	00	02	09	00	00	05	00	00
159	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	34	00	07	25	00	02	06	00	03	03	00	02
160	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10	00	31	10	00	17	00	00	09	00	00	05
161	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	05	01	35	00	00	27	04	01	04	01	00	04
162	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	22	00	19	16	00	11	06	00	03	00	00	05
163	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	18	00	23	16	00	11	02	00	07	00	00	05
164	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	24	00	17	19	00	08	05	00	04	00	00	05
165	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	17	03	21	16	02	09	01	01	07	00	00	05
166	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	27	00	14	20	00	07	06	00	03	01	00	04
167	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	27	00	14	21	00	06	06	00	03	00	00	05
168	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	23	00	18	18	00	09	05	00	04	00	00	05
169	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	26	00	15	20	00	07	06	00	03	00	00	05
170	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	24	03	14	17	03	07	07	00	02	00	00	05
171	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	26	00	15	21	00	06	05	00	04	00	00	05
172	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	25	03	13	19	00	08	06	00	03	00	03	02
173	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	30	00	11	23	00	04	07	00	02	00	00	05
174	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	12	00	29	11	00	16	01	00	07	00	00	05
175	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	12	00	29	08	00	19	04	00	05	00	00	05
176	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10	00	21	10	00	17	00	00	09	00	00	05
177	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	23	00	18	18	00	09	05	00	04	00	00	05
178	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	16	02	23	15	02	10	01	00	08	00	00	05
179	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	22	00	19	16	00	11	06	00	03	00	00	05
180	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	08	00	33	08	00	19	00	00	09	00	00	05
181	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	05	00	36	05	00	22	00	00	09	00	00	05
182	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	01	01	39	01	00	26	00	01	08	00	00	05
183	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	08	00	33	03	00	24	05	00	04	00	00	05
184	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	02	00	39	00	00	27	02	00	07	00	00	05
185	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10	01	30	05	00	22	04	00	05	01	01	03
186	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	01	00	40	00	00	27	01	00	08	00	00	05
187	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	33	01	07	24	00	03	07	01	01	03	00	02
188	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	28	01	12	23	00	04	05	00	04	00	01	04
189	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	21	01	19	17	01	09	05	00	04	00	00	05
190	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	11	00	30	05	00	22	06	00	03	00	00	05
191	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10	00	31	08	00	19	02	00	07	00	00	05
192	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	03	00	38	03	00	24	00	00	09	00	00	05
193	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	23	01	17	20	00	07	03	01	05	00	00	05
194	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	24	00	17	18	00	09	06	00	03	00	00	05
195	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	27	01	13	21	01	05	05	00	04	01	00	04
196	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	27	01	13	21	00	06	06	01	02	00	00	05
197	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	30	01	10	22	00	05	07	00	02	01	01	03
198	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	21	01	19	17	01	09	04	00	05	00	00	05
199	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	16	00	25	16	00	11	00	00	09	00	00	05
200	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	16	10	15	14	04	09	01	06	02	01	00	04
201	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	08	00	33	08	00	19	00	00	09	00	00	05
202	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	26	00	15	21	00	06	05	00	04	00	00	05
203	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	15	00	26	15	00	12	00	00	09	00	00	05
204	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	30	02	09	24	00	03	06	01	02	00	01	04
205	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	33	03	05	24	00	03	08	01	00	01	02	02
206	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	30	00	11	23	00	04	06	00	03	01	00	04
207	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	31	00	10	23	00	04	07	00	02	01	00	04
208	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	11	00	30	08	00	19	03	00	06	00	00	05
209	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	08	00	33	03	00	24	02	00	07	03	00	02
210	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	28	00	13	18	00	09	07	00	02	03	00	02
211	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	00	00	17	19	00	08	05	00	04	00	00	05
212	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	21	00	20	21	00	06	00	00	09	00	00	05
213	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	38	00	13	23	00	04	05	00	04	00	00	

第3表：立山曼荼羅全作品において70%以上の確立で描写された事物

N o .	構成要素	●全作品中	△全作品中	×全作品中
005	岩峯寺集落（※全体的な表現）	33	04	04
018	白鷹（立山の上空に描かれる場合も有り）	30	01	10
019	熊を射る佐伯有頼、或いは手負いとなって逃げる熊を追いかける佐伯有頼	31	00	10
020	矢を射られた熊	32	00	09
025	芦峯寺集落・境内地（※全体的な表現）	38	02	01
039	布橋（芦峯寺）	37	01	03
041	嬬堂（芦峯寺）	34	00	07
043	宿坊家や門前百姓家の集合体（芦峯寺）	31	02	08
102	藤橋	36	02	03
105	材木坂	38	00	03
106	美女杉	33	03	05
107	禿杉	34	02	05
108	称名滝	39	00	02
112	一ノ谷の鎖場	37	00	04
113	一ノ谷の鎖場を登る禪頂登山者	33	00	08
120	室堂（小屋）	39	00	02
122	立山開山伝説における玉殿窟の場面、或いは窟そのものを表す図像（※全体的な表現）	39	00	02
123	玉殿窟に顕現した矢疵阿弥陀如来、或いは矢疵がない阿弥陀如来、僧など	30	01	10
125	阿弥陀如来顕現の霊験にひれ伏す佐伯有頼（慈興上人）	34	00	07
129	祓堂	29	06	06
130	一ノ越	38	00	03
131	二ノ越	38	00	03
132	三ノ越	37	00	04
133	四ノ越	36	00	05
135	立山頂上社殿（立山峰本社）	40	00	01
136	雄山	40	00	01
140	浄土山	36	00	05
141	別山	38	00	03
142	剣岳	38	00	03
145	浄土山の堂舎	31	00	10
146	別山の堂舎	36	00	05
148	剣岳の塔（自然の塔）	37	00	04
157	別山の硯ヶ池	30	01	10
158	前掲項目以外の山中諸堂社※	39	00	02
159	前掲項目以外の参詣者・禪頂登山者※	34	00	07
173	獄卒が亡者を炎上する鉄車に乗せて引き廻す（阿毘至大地獄の鉄車）	30	00	11
187	血の池地獄	33	01	07
197	畜生道	30	01	10
204	針山地獄（剣岳）	30	02	09
205	賽の河原※	33	03	05
206	賽の河原の地藏菩薩	30	00	11
207	賽の河原で石積みをする子供たち	31	00	10
214	月輪	29	00	12



第4表：芦峯寺系立山曼荼羅全作品において80%以上の確立で描写された事物

N○.	構成要素	●芦峯寺系	△芦峯寺系	×芦峯寺系
001	布施城（布施館）	23	00	04
025	芦峯寺集落・境内地（※全体的な表現）	27	00	00
038	閻魔堂（芦峯寺）	24	00	03
039	布橋（芦峯寺）	26	00	01
041	鳩堂（芦峯寺）	24	00	03
043	宿坊家や門前百姓家の集合体（芦峯寺）	22	00	05
046	閻魔堂の中の閻魔王	23	01	03
052	布橋灌頂会、或いはそれをイメージした祭礼の図柄（※全体的な表現）	24	00	03
057	引導師式衆（阿闍梨）	23	00	04
058	引導師式衆（その他）	23	00	04
061	女性或いは男性の布橋灌頂会参列者	23	00	04
066	来迎師式衆（院主）	23	00	04
067	来迎師式衆（その他）	22	00	05
078	布橋灌頂会に敷かれた白布	23	00	04
079	布橋の四方を囲む杉の大木	22	00	05
084	鳩堂川の大蛇	22	00	05
091	衣柳樹	22	00	05
102	藤橋	25	00	02
105	材木坂	26	00	01
106	美女杉	23	01	03
107	禿杉	23	01	03
108	称名滝	26	00	01
112	一ノ谷の鎖場	24	00	03
113	一ノ谷の鎖場を登る禪頂登山者	23	00	04
120	室堂（小屋）	26	00	01
122	立山開山伝説における玉殿窟の場面、或いは窟そのものを表す図像（※全体的な表現）	26	00	01
125	阿弥陀如来顕現の靈験にひれ伏す佐伯有頼（慈興上人）	25	00	02
130	一ノ越	25	00	02
131	二ノ越	25	00	02
132	三ノ越	24	00	03
133	四ノ越	23	00	04
135	立山頂上社殿（立山峰本社）	26	00	01
136	雄山	26	00	01
140	浄土山	25	00	02
141	別山	26	00	01
142	劔岳	26	00	01
146	別山の堂舎	24	00	03
148	劔岳の塔（自然の塔）	25	00	02
158	前掲項目以外の山中諸堂社※	25	00	02
159	前掲項目以外の参詣者・禪頂登山者※	25	00	02
173	獄卒が亡者を炎上する鉄車に乗せて引き廻す（阿毘至大地獄の鉄車）	23	00	04
187	血の池地獄	24	00	03
188	血の池地獄に堕ちた女性の亡者	23	00	04
197	畜生道	22	00	05
204	針山地獄（劔岳）	24	00	03
205	賽の河原※	24	00	03
206	賽の河原の地藏菩薩	23	00	04
207	賽の河原で石積みをする子供たち	23	00	04
213	日輪	23	00	04
214	月輪	24	00	04

第5表：岩峯寺系立山曼荼羅全作品において78%以上の確立で描写された事物

N o .	構成要素	●岩峯寺系	△岩峯寺系	×岩峯寺系
005	岩峯寺集落（※全体的な表現）	09	00	00
006	鳥居（岩峯寺）	07	00	02
009	御社壇（岩峯寺）	08	01	00
010	拝殿（岩峯寺）	09	00	00
011	講堂（岩峯寺）	08	01	00
012	鐘桜堂（岩峯寺）	08	00	01
013	諸末社（岩峯寺）	09	00	00
014	宝塔（五重塔或いは三重塔 岩峯寺）	09	00	00
016	宿坊家や門前百姓家の集合体（岩峯寺）	09	00	00
018	白鷹（立山の上空に描かれる場合も有り）	07	00	02
019	熊を射る佐伯有頼、或いは手負いとなって逃げる熊を追いかける佐伯有頼	08	00	01
020	矢を射られた熊	08	00	01
023	千垣集落	08	01	00
025	岩峯寺集落・境内地（※全体的な表現）	08	00	01
039	布橋（岩峯寺）	08	00	01
041	彌堂（岩峯寺）	08	00	01
102	藤橋	08	00	01
105	材木坂	08	00	01
106	美女杉	08	00	01
107	禿杉	08	00	01
108	称名滝	08	00	01
112	一ノ谷の鎖場	09	00	00
120	室堂（小屋）	08	00	01
122	立山開山伝説における玉殿窟の場面、或いは窟そのものを表す図像（※全体的な表現）	09	00	00
123	玉殿窟に顕現した矢疵阿弥陀如来、或いは矢疵がない阿弥陀如来、僧など	07	00	02
125	阿弥陀如来顕現の霊験にひれ伏す佐伯有頼（慈興上人）	07	00	02
129	祓堂	07	00	02
130	一ノ越	08	00	01
131	二ノ越	08	00	01
132	三ノ越	08	00	01
133	四ノ越	08	00	01
134	五ノ越	08	00	01
135	立山頂上社殿（立山峰本社）	09	00	00
136	雄山	09	00	00
137	大汝山	07	01	01
140	浄土山	08	00	01
141	別山	09	00	00
142	剷岳	09	00	00
143	大汝山の堂舎	07	01	01
145	浄土山の堂舎	08	00	01
146	別山の堂舎	09	00	00
148	剷岳の塔（自然の塔）	09	00	00
155	刈込池	08	00	01
157	別山の観ヶ池	09	00	00
158	前掲項目以外の山中諸堂社※	09	00	00
170	獄卒が亡者を鉄釜の熱湯の中に投げ込み煮る（黒肚処） おう然処等活地獄	07	00	02
173	獄卒が亡者を炎上する鉄車に乗せて引き廻す（阿毘至大地獄の鉄車）	07	00	02
187	血の池地獄	07	01	01
197	畜生道	07	00	02
205	賽の河原※	08	01	00
207	賽の河原で石積みをする子供たち	07	00	02
210	阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩の三尊来迎	07	00	02

第6表：その他の立山曼荼羅全作品において80%以上の確立で描写された事物

No.	構成要素	●その他系	△その他系	×その他系
105	材木坂	04	00	01
108	称名滝	05	00	00
112	一ノ谷の鎖場	04	00	01
113	一ノ谷の鎖場を登る禪頂登山者	04	00	01
119	鏡石	04	00	01
120	室堂（小屋）	05	00	00
122	立山開山伝説における玉殿窟の場面、或いは窟そのものを表す図像（※全体的な表現）	04	00	01
129	祓堂	05	00	00
130	一ノ越	05	00	00
131	二ノ越	05	00	00
132	三ノ越	05	00	00
133	四ノ越	05	00	00
134	五ノ越	05	00	00
135	立山頂上社殿（立山峰本社）	05	00	00
136	雄山	05	00	00
15S	前掲項目以外の山中諸堂社※	05	00	00





第8表：立山曼荼羅制作主体の多様性

類型	発願者	発注者	制作者	受納者	使用者	該当作品
01	立山衆徒	立山衆徒	立山衆徒	立山衆徒	立山衆徒	坪井家(義昭)B本
02	立山衆徒	立山衆徒	信徒	立山衆徒	立山衆徒	
03	立山衆徒	立山衆徒	絵師	立山衆徒	立山衆徒	
04	立山衆徒	立山衆徒	絵師や信徒以外の人物	立山衆徒	立山衆徒	
05	立山衆徒と信徒	立山衆徒と信徒	立山衆徒	立山衆徒	立山衆徒	
06	立山衆徒と信徒	立山衆徒と信徒	信徒	立山衆徒	立山衆徒	
07	立山衆徒と信徒	立山衆徒と信徒	絵師	立山衆徒	立山衆徒	善道坊本
08	立山衆徒と信徒	立山衆徒と信徒	絵師や信徒以外の人物	立山衆徒	立山衆徒	
09	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒	立山衆徒	
10	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	
11	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	絵師	立山衆徒	立山衆徒	
12	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	絵師	立山衆徒に近縁の人物	立山衆徒に近縁の人物	佐伯家(省次)本・坪井家A本の書き直し図
13	信徒	信徒	信徒	立山衆徒	立山衆徒	宝泉坊本・富山県立図書館本
14	信徒	信徒	信徒	信徒	信徒	高橋家田蔵本
15	信徒	信徒	絵師	立山衆徒	立山衆徒	
16	信徒	信徒	絵師	信徒	信徒	
17	信徒	立山衆徒	絵師	立山衆徒	立山衆徒	吉祥坊本
18	信徒	信徒	絵師や信徒以外の人物	立山衆徒	立山衆徒	
19	信徒	信徒	絵師や信徒以外の人物	信徒	信徒	
20	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	
21	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒	立山衆徒	
22	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	近隣の寺社等		辰勝寺本
23	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	絵師	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	称念寺B本
24	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	絵師	立山衆徒	立山衆徒	
25	立山衆徒や信徒以外の人物	立山衆徒や信徒以外の人物	絵師	近隣の寺社等		



第9表：立山曼荼羅諸本に描かれた玉殿窟の場面

No.	作基名	玉殿窟	阿闍梨の姿	天冠	赤色	阿闍梨の座	阿闍梨の持	阿闍梨の杖	手動明主	手動自在	手動元拜
1-01	坪井家入本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	△頂上	●大勢元拜
2-02	女宮寺本	●	●金色	×	×	×	●	●	×	×	×
3-03	大正寺本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	●	×	×	×
4-04	真如寺本	×	●金色阿闍梨と観音・梵王	×	×	●蓮華座	●	×	×	×	×
5-05	多賀寺本	●	●金色	×	×	●蓮華座	●	●	●	●磐石座	●大勢元拜
5-06	阿久野家本	●	●金色	●	×	×	●	×	●	×	●大勢元拜
7-07	立山阿闍梨通本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	△	●	●磐石座	●大勢元拜
8-08	龍光寺本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
9-09	大徳寺本	●	●金色阿闍梨と観音・梵王	●	●	●蓮華座	●	×	×	×	×
10-10	大仏持本	●	●金色	×	×	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
11-11	真如持本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
12-12	大正持本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
13-13	電燈寺口本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
14-14	善法寺本	●	●金色	●	●	●蓮華座	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
15-15	在田家(有)本	●	●金色	●	●	●蓮華座	×	×	●	●磐石座	●大勢元拜
16-16	坪井家日本	●	●金色	●	●	●蓮華座	×	●	●	△頂上 ●顔が長く 捻り潰されて いる	●大勢元拜
17-17	真如寺入本	●	●金色(厚げ高僧)	●	△下引	×	●	×	●	●磐石座	●大勢元拜
18-18	宝蔵寺本	●	●金色阿闍梨と観音・梵王と菩薩	●	●	●蓮華座	●	×	●	●蓮華座	●大勢元拜
19-19	善法寺本	●	●金色阿闍梨と観音・梵王と菩薩	×	×	●蓮華座	●	×	●	●蓮華座	●大勢元拜
23-20	越中藤井寺本	●	●	未詳	未詳	●蓮華座	●	×	●	●蓮華座	●大勢元拜

阿闍梨の杖 杖上人	袈裟	観髪	烏帽子・兜	髪	弓	矢	刀	持巻	持筒	文字法記	
●	袈裟	阿闍梨	×	●	●笠は掛け られている	×	●本人の杖 に置いている	●	△	上方から 手動・阿闍 梨・下方阿 闍梨・下方阿 闍梨	×
●	袈裟	阿闍梨	×	×	●笠は掛け られている	●	●本人の杖 に置いている	△	△	左から手動 ・阿闍梨	×
●	袈裟	×	×	●	●笠は掛け られている	●	●本人の杖 に置いている	●	●	左から阿闍 梨・有難	×
●	袈裟	×	持烏帽子 (見る)	×	●笠は掛け られている	×	●腰に差し ている	●	●	上方に阿闍 梨三身の写 真。下方左 に有難、右 に梵	×
●	袈裟阿闍 梨と菩薩	×	金色の冠? (杖く)	×	×	×	×	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟阿闍 梨と菩薩	×	持烏帽子 (杖く)	×	●笠は掛け られている	●	●本人の杖 に置いている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	小僧の上に 笠	×	持烏帽子 (杖く)	×	●笠は掛け られている	×	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	×	冠(見る)	×	●笠は掛け られている	×	×	●	●	左から阿闍 梨・手動・ 有難	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
●	小僧の上に 笠	×	持烏帽子 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●本人の杖 に置いている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	小僧に笠	阿闍梨	×	×	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	小僧に笠	阿闍梨	×	×	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	小僧に笠	阿闍梨	×	×	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	×	持烏帽子 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から阿闍 梨・手動・ 有難	×
●	袈裟	×	持烏帽子 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から阿闍 梨・手動・ 有難	×
●	袈裟(袈裟も袈裟 袈裟でして いる)	×	烏帽子 (杖く)	×	●笠は掛け られている	●	●本人の杖 に置いている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	×	持烏帽子 (杖く)	×	●笠は掛け られている	●	×	×	●	左から阿闍 梨・手動・ 有難	×
●	袈裟	阿闍梨	袈裟 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	阿闍梨	袈裟 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	阿闍梨	袈裟 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	阿闍梨	袈裟 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×
●	袈裟	阿闍梨	袈裟 (杖く)	△	●笠は掛け られている	●	●腰に差し ている	●	●	左から手動 ・阿闍梨・ 有難	×





第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（項目内容・番号）

項目番号	項目内容
0 1	立山曼荼羅の製作年次（痕跡などから判断しているものに限る）。
0 2	閻魔堂・布橋・講堂の配置（画面に向かって左から）。布橋灌頂会の場面は何幅口から何幅口まで描かれているか。
0 3	閻魔堂の屋根の形式（寄棟造・入母屋造・檼造など）。
0 4	閻魔堂の色（フレーム→ 屋根→ 側壁→ ）と向き。
0 5	閻魔堂内の閻魔王・冥官の描かれ方（位相・配置・疑人的か実像的か）。
0 6	閻魔堂内の装壇及び机。
0 7	講堂の屋根の形式（寄棟造・入母屋造・檼造など）。
0 8	講堂の入り口の有無。
0 9	講堂の色（フレーム→ 屋根→ 側壁→ ）と向き。
1 0	講堂内の講壇の描かれ方（数・配置・疑人的か実像的か）。
1 1	講堂内の装壇。
1 2	講堂内の人物の描写。
1 3	講堂内で法要を行うだけの空間があるかどうか。
1 4	講堂内の密僧住。
1 5	布橋の色彩。
1 6	法要の進行方向（画面に向かって）。
1 7	法要で使用される宗教施設。
1 8	法要が行われている領域。
1 9	参列者の種類と配列。
2 0	参列者の装束。
2 1	参列者の持物（栴荼杵・天蓋、先松明・幡・幡蓋・鏡・鏡・法螺・数珠）
2 2	参列者の足袋（淨土寺・山衆徒と当日の一般参列者の合計）。
2 3	式衆以外の一般参列者の人数と性別。
2 4	式衆以外の一般参列者の装束内容と帯の色彩。
2 5	式衆以外の一般参列者の装束にみる着こなし状況（特に裾の部分）。
2 6	式衆以外の一般参列者の目隠しの有無。
2 7	式衆以外の一般参列者の笠の着用。
2 8	式衆以外の一般参列者の足袋の着用、或いは裸足か。
2 9	布橋灌頂会の行進に結縁する人々。
3 0	布橋上に人物は見られるかどうか。
3 1	敷き詰められた白布の本数。
3 2	白布の敷かれている領域。
3 3	布橋四方の四本柱の有無、及びその色彩。
3 4	「布橋灌頂会」や「立山遍満尊」と記された標榜。
3 5	参詣者が布橋を渡り終えた後、講堂に入ることができるかどうか。
3 6	講堂内での禱の修行が可能かどうか。
3 7	布橋から転落する人物（性別）と大蛇の描写。
3 8	阿弥陀三尊或いは聖衆の来迎
3 9	苔の樹
4 0	袈裟・懸衣袴・衣領樹。
4 1	布橋四方の4本柱。
4 2	清水淨土
4 3	影向石
4 4	牛石
4 5	閻魔堂前に露天で安置の地蔵菩薩像
4 6	巻札の有無
4 7	釣り鐘の有無
4 8	閻魔堂前の石造物（墓石あるいは石塔など）。
4 9	閻魔堂前の塔
5 0	布橋灌頂会の場面の精華。
5 1	石橋を支える石塔が描かれているか、或いは橋脚だけで支えているか。
5 2	その他の特徴（図像の共通性等）

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（坪井家A本）

項目番号	項目内容
0 0	坪井家A本（作基番号01）
0 1	図面の製作年代は不明、精華整理は、天保元年から天保8年の間に行われた。
0 2	左から講堂、布橋、閻魔堂、第2種~第4種の同。
0 3	寄棟造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、側壁→白色。
0 5	閻魔王のみ、疑人的に描かれている。
0 6	机が見られる。
0 7	入母屋造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、側壁→白色、講堂内→白色。
1 0	堂内の入り口に3体の玉座の講壇を描き、その後ろに、数多くの講壇を講堂内めいっぱい描く、疑人的。
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を寫せば可也。
1 5	朱色、襖子は部分的に茶色、橋を支える足の部分茶色。
1 6	右から左
1 7	閻魔堂、布橋、風堂
1 8	画面に向かって右橋を越て講堂まで。
1 9	画面に向かって右橋の右手前から、式衆→引導師→式衆→女侍の参詣者→天蓋持→冥官→女侍の参詣者、画面に向かって布橋の左手前から、引導師→天蓋持→式衆→講堂の直前の白布の下に僧侶（衆徒）の集団。
2 0-1	引導師側：式衆→法衣（黒）、袈裟、引導師→法衣（紺紫）、袈裟・帽子、式衆→法衣（紺紫（黒））、袈裟、式衆→法衣（紺紫（黒））、女侍参詣者→白装束・白笠、来迎師側：来迎師→法衣（紺紫）、袈裟・楞帽子・檀子。
2 0-2	式衆→法衣（紺紫（紺色））、袈裟、式衆→法衣（黒）、袈裟、講堂直前の白布の下の衆徒（僧侶）→法衣（黒）
2 1	引導師側：式衆→観履・履・袴、天蓋持→幡蓋（観頰棒に取付られている）、引導師→栴荼（赤色）、来迎師側：来迎師→栴荼（赤色）、幡蓋持→（観頰棒に取付られている）、式衆→何も所持していない。
2 2	さき色
2 3	10名でおそらく全て女性。
2 4	白装束で白袴。
2 5	背向に着こなししている。
2 6	無
2 7	着用している。
2 8	おそらく足袋は着用している。
2 9	有
3 0	見られない。
3 1	1本
3 2	閻魔堂の真下から布橋を越て講堂の講壇まで。
3 3	有（赤色）
3 4	無
3 5	入ることはできない
3 6	不可能
3 7	橋から転落する女性と、それを待ち受ける大蛇が描かれている。
3 8	有
3 9	有
4 0	講堂の左側に衣領樹と袈裟樹、衣領を割がされている女性が描かれている。
4 1	3本描かれている。
4 2	無
4 3	種（黒色）だけが描かれている。
4 4	無
4 5	無
4 6	無
4 7	有
4 8	無
4 9	閻魔堂の右斜め下に3重塔が描かれている。
5 0	有
5 1	石川百描かれていない、橋脚だけで支えている。
5 2	布橋灌頂会の場面は「茶邊寺本」と同様の構図をとる、原因では、閻魔堂は布橋灌頂会の儀式においては機械的に残ったようである。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（来迎寺本）

項目番号	項目内容
0 0	来迎寺本（作品番号0 2）
0 1	不明
0 2	左から燔堂、布橋、醍醐堂、第1柱から第2柱の間。
0 3	寄せ棟造
0 4	屋根一茶色、側壁一薄い黒茶色、正面向き。
0 5	醍醐王のみ、擬人的。
0 6	無
0 7	入母屋造
0 8	無
0 9	フレーム一茶色、屋根一茶色、側壁一描かれず、正面向きで屋根の部分はねじれている。
1 0	燔堂内を柱で3区画に分け、それぞれの区画に1柱ずつ、合わせて3柱の燔堂を描く、擬人的
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を寫げば可能。
1 5	木色、擬人様は黄色。
1 6	右から左へ
1 7	布橋と燔堂、醍醐堂は建築と同様していないようである。
1 8	正面に向かって、布橋の右側から燔堂にかけて。
1 9	布橋の上の向かって左側に来迎師→その后式衆、向かって右側に参詣者（女性）→引導師→その后式衆、燔堂前の布橋上に向背をつけた女性、燔堂前の布橋上に応じて台昇する白装束の男性
2 0	引導師・来迎師→白装束・白笠、引導師→法衣・袈裟、式衆→法衣（黒）・袈裟、来迎師→法衣・袈裟、参詣者→白装束・白笠、引導師→法衣・袈裟、帽子、式衆→法衣（黒）・袈裟、燔堂前の布橋上の女性→赤い衣袋・光背。
2 1	引導師側：引導師→椀扇（赤色）、式衆→杖、来迎師側：来迎師→中啓、式衆→杖。
2 2	2 0名
2 3	5名でいずれも女性。
2 4	白装束に白袴
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	着用している。
2 8	識別できず。
2 9	有
3 0	見られる。引導師・来迎師をほじめとする式衆と参詣人。
3 1	1本
3 2	布橋の右側から燔堂内へ
3 3	有（白色）
3 4	無
3 5	入ることではない
3 6	不可能
3 7	有（男性）、大蛇が口を開けて待ち構えている。
3 8	無
3 9	無
4 0	燔堂の右側に、衣領樹の下で女性の衣袋を脱がせる典が描かれている。
4 1	有
4 2	無
4 3	無
4 4	無
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	五重塔が描かれている。
5 0	救きされた白布の影に薄量がみられる。
5 1	右側は見られない、構図だけで支えている。
5 2	布橋灌頂会の場面は『屏井室入本』と同様の構図をとる。布橋灌頂会の儀式においては醍醐堂は機能していない。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（大江寺本）

項目番号	項目内容
0 0	大江寺本（作品番号0 3）
0 1	不明
0 2	左から醍醐堂、布橋、燔堂、1層物で、東西に向かって右下隅。
0 3	入母屋造
0 4	屋根一茶色、側壁一茶色、フレーム一茶色。
0 5	醍醐王を中心として左右に翼音が1名ずつ描かれている。擬人的。
0 6	無
0 7	入付屋造
0 8	無
0 9	フレーム一茶色、側壁一白色、室内一白色、屋根一茶色。
1 0	燔堂内を柱で3区画に分け、それぞれの区画に1柱ずつ、併せて3柱の燔堂を描く、擬人的
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を寫げば可能。
1 5	木色、擬人様は黄色。
1 6	東西に向かって左から右へ。
1 7	布橋、燔堂
1 8	布橋の左手前から布橋を経て燔堂まで。
1 9	東西に向かって布橋の左手前から、式衆→引導師→参詣者、東西に向かって布橋の右手前から、来迎師→式衆（天蓋・椀扇）。
2 0	引導師側：式衆→法衣（灰色）、引導師→法衣（黄色）・袈裟、参詣者→白装束・白笠、来迎師側：来迎師→法衣（色彩は識別できず）・袈裟、式衆→法衣（黒）。
2 1	引導師側：識別できず、来迎師側：来迎師→識別できず、式衆→天蓋・椀。
2 2	2 0名
2 3	2名で性別は識別できず。
2 4	白装束、帯の色は識別できず。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	識別できず。
2 7	着けている。
2 8	識別できず。
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	1本
3 2	布橋の向かって左側から燔堂まで。
3 3	有、布橋の四方の形に結び付けられている。フレームが赤色で木体が白色、足の部分は赤色。
3 4	無
3 5	入れない。
3 6	不可能
3 7	禪堂の男性 が布橋から転落している 大蛇が待ちかまえている。
3 8	無
3 9	無
4 0	衣領樹の上に参詣が見られる。木の下には衣を脱がれた男女が見られる
4 1	有
4 2	無
4 3	赤い袴のみが描かれている。
4 4	生きた牛そのものが描かれている。
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	二重塔が描かれている。
5 0	無
5 1	右側は見られていない、構図だけで支えている。
5 2	1層物の大型曼荼羅である。



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（多賀坊本）

項目番号	項目内容
0 0	多賀坊本（作高番付05）
0 1	不明
0 2	西面に向かって左側から阿弥陀堂、布橋、燗堂、1幅物。
0 3	入母屋造
0 4	フレーム→朱色（赤色に近い）、屋根→茶色、創縁→赤色・緑色・紺色。
0 5	阿弥陀三尊が描かれ、燃燈王や釈迦は描かれていない。
0 6	有
0 7	入母屋造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色（赤色に近い）、屋根→茶色、創縁→白色・緑色。
1 0	入り口付近に本尊の3体の燗尊を描き、その後方に多数の燗尊を描く。擬人的。
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を窺げば可能。
1 5	灰色
1 6	西面に向かって左側から右側へ、阿弥陀堂から布橋を経て燗堂へ。
1 7	阿弥陀堂、布橋、燗堂
1 8	阿弥陀堂から布橋を経て燗堂まで。
1 9	西面に向かって布橋の左側に、式衆→引導師→式衆→天蓋持→参詣者、西面に向かって布橋の右側に、松明持→橋持→天蓋持→式衆。
2 0-1	引導師：式衆→法衣（オレンジ・紫・緑）・袈裟・帽子、引導師→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→法衣（黒）、妙蓮堂→私製。
2 0-2	来迎師：松明持→白衣の上に法衣（黒）、橋持→白衣の上に法衣（黒）、来迎師→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→法衣（黒）・袈裟、式衆→法衣（赤）・袈裟は識別できず。
2 1	引導師：式衆・引導師・参詣者の持物は識別できない、天蓋持→天蓋、来迎師：松明持→松明、橋持→橋（？）、引導師→持物は識別できない、天蓋持→天蓋、式衆、是。
2 2	21名
2 3	6名。1名は袈裟の長さや表柄から女性と思われる。その後ろに連なる5名の人物たちほぼ全て男性であるが、参詣者か式衆かは識別が困難である。
2 4	私製を着ている。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	着けていない。
2 8	識別できない。
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	1本
3 2	阿弥陀堂の入り口から布橋の手前まで、燗堂の入り口から敷き流されるがどこまで延びているかは不明、布橋には敷かれていない。
3 3	無
3 4	無
3 5	入ることほどできない。
3 6	不可能
3 7	布橋から男作が2名転落している。大僧が持ちかまえている。
3 8	無
3 9	無
4 0	燗堂の左の方に、衣領階、曳と袈衣袋が描かれている。
4 1	布橋の四方のうち三方にそれぞれ1本ずつ立てている。
4 2	無
4 3	無
4 4	無
4 5	無
4 6	無
4 7	縁板らしきものが描かれている。
4 8	無
4 9	無
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えられている。
5 2	1幅物の立山曼荼羅である。「阿彌氏本」と共通の構図を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（稲沢家本）

項目番号	項目内容
0 0	稲沢家本（作高番付06）
0 1	不明
0 2	西面に向かって左から燗堂、布橋、燗堂、第1幅～第3幅までの間。
0 3	入母屋造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、創縁→白色。
0 5	燃燈王のみ、擬人的。
0 6	机が見られる。机の上には筆記用具。
0 7	入母屋造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、創縁→白色。
1 0	入り口近くに上尊の3体の燗尊を描くとともに、その後方に脇侍として多数の燗尊を描く。
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を窺げば可能。
1 5	本体は赤色、礎石は朱色、礎石は黄土色。
1 6	西面に向かって左側から右側へ。
1 7	燗堂、布橋、燗堂
1 8	燗堂から布橋を経て燗堂まで。
1 9	西面に向かって布橋の左手前から、式衆→引導師→天蓋持→参詣者、西面に向かって布橋の右手前から、来迎師→天蓋持→式衆。
2 0-1	引導師：式衆→法衣（黒）・袈裟・帽子、引導師→法衣（茶）・袈裟・帽子、天蓋持→法衣（黒）・袈裟・帽子、参詣者→白袈裟・三角頭巾。
2 0-2	来迎師：来迎師→法衣（茶）・袈裟・帽子、天蓋持→法衣（黒）・袈裟は着けず、式衆→法衣（黒）・袈裟・帽子。
2 1	引導師：式衆→何も持たず、引導師→中尊、天蓋持→天蓋、参詣者→杖・楯、来迎師：来迎師→持物は確認できず、天蓋持→天蓋、式衆→筆・風箏。
2 2	15名
2 3	5名で女性。
2 4	白袈裟、裾の色は識別できず。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	笠は着けていない、傘が楕円に三角の白布を着けている。
2 8	裸足
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	1本
3 2	燃燈王の机の上から布橋の手前まで、燗堂の入り口から敷き流され、その先は見えない。
3 3	無
3 4	無
3 5	入れない。
3 6	不可能
3 7	布橋から2名の男性が転落している、下には大僧が持ちかまえている。
3 8	無
3 9	無
4 0	衣領階の下に曳と袈衣袋が描かれている。
4 1	布橋の四方のうち三方に、それぞれ1本ずつ描かれている。
4 2	無
4 3	無
4 4	無
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	無
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えられている。
5 2	3幅物の立山曼荼羅である。「多賀坊本」と共通の構図を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況点（立山開鉄釜道本）

項目番号	項目内容
00	立山開鉄釜道本（佐伯宗義）本（作品番号07）
01	不明
02	左から熾堂、布橋、閻魔堂、第2柱〜第3柱の間、
03	寄柱造
04	フレーム→朱色、屋根→茶色、
05	閻魔堂内を柱で三分割し、中心に閻魔王を、向かって左に淨依瓊鏡、右側に菓行を描く、
06	無
07	人母景造
08	有
09	フレーム→朱色、屋根→茶色、創燈→白色、
10	描かれていない、
11	無
12	無
13	判別できない、おそらくは、
14	有
15	楓干は朱色、橋桁は白色、覆堂珠は金色、
16	右から左へ
17	閻魔堂、布橋、熾堂
18	閻魔堂前から布橋を経て熾堂まで、
19	画面に向かって布橋の右手前から、式衆→参詣者→式衆→引導師→式衆、画面に向かって布橋の左手前から、式衆→来迎師→式衆、
20	引導師：式衆→法衣（黒〔袍袈〕）・袈裟（茶色）、引導師→法衣（赤〔袍袈〕）・袈裟、参詣者→白袈裟・笠、暫則→持袋、来迎師：式衆→法衣（黒〔袍袈〕）・袈裟、来迎師→法衣（茶〔袍袈〕）・袈裟、
21	引導師：式衆→杖珠、袍は何も確認されず、暫則→暫遇の持、来迎師：式衆→杖珠、
22	約40名
23	4名で性別は判別できず、
24	きわめて薄い緑色の袈裟だが、おそらく白袈裟のつもりであろう、帯も同色、
25	普遍に着こなしている、
26	無
27	着けている、
28	判別できない、
29	無
30	見られない、
31	1本
32	閻魔堂の入り口から布橋を経て熾堂の入り口まで、
33	有（赤色）
34	「立山開鉄釜」と「布橋灌頂」の様が見られる、
35	入り口が狭くて入れない、
36	不可能
37	大柵だけが描かれている、
38	無
39	無
40	描かれていない、
41	有
42	無
43	無
44	無
45	無
46	無
47	?
48	塔に囲まれた五輪塔が見られる、
49	無
50	有
51	石垣は描かれていない、橋樑だけで支えられている、
52	3種物の作品は、当作品と「稲波薬本」だけである、

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況点（龍光寺本）

項目番号	項目内容
00	龍光寺本（08）
01	不明
02	左から閻魔堂、布橋、熾堂、
03	人母景造、
04	フレーム→朱色、屋根→茶色、創燈→白色、
05	閻魔王を中心に左右に冥官1名ずつ、擬人的、
06	無
07	切妻造か寄柱造
08	無
09	フレーム→朱色、屋根→茶色、創燈→描かれていない、
10	熾堂内に3柱、擬人的に描かれている、
11	無
12	無
13	無
14	熾堂の図像に典行的な表現がないため判断できない、
15	橋自体は朱色、覆堂珠は黒色、
16	左から右（閻魔堂から右橋を経て熾堂へ）、
17	閻魔堂、布橋、熾堂
18	閻魔堂前から布橋を経て熾堂まで、
19	画面に向かって布橋の右手前から、式衆→引導師→式衆→参詣者、画面に向かって布橋の左手前から、来迎師→式衆、
20-1	引導師：式衆→法衣（黒色〔袍袈〕）・袈裟（茶色）、引導師→法衣（茶色〔袍袈〕）・式衆→法衣（茶色・紺色）・袈裟（金色）、参詣者→白袈裟・白帯
20-2	来迎師：引導師→法衣（赤色〔袍袈〕）・袈裟（金色）、式衆→法衣（黒色〔袍袈〕）・袈裟（茶色）、式衆→法衣（赤色・薄桃色・水色〔袍袈〕）・袈裟（金色）、天蓋持→水色、
21	引導師：天蓋（赤色）→幡（白色）、来迎師：天蓋（赤色）→約物籠（金色）、
22	17名
23	6名で女性、
24	白袈裟、白帯、
25	普遍に着こなしている、
26	無
27	無
28	おそらく履足であろう、
29	無
30	3人の人物が見られる、3人とも立山淨定登山から戻ってきた参詣者たちであろうか、1名は尻らしきものを背負っている、熾堂側から閻魔堂側へ向かって布橋を渡っている、
31	2本
32	閻魔堂の閻魔王前から布橋を経て熾堂の熾堂前まで、
33	無
34	無
35	できない
36	できない
37	有（男性）、大柵が口を開けて待ちかまえている、
38	無
39	無
40	衣領樹の下に袈衣袋、それに向かって男性の亡者を一人描く、
41	有
42	有
43	無
44	無
45	無
46	無
47	有（熾堂の向かって左側に描かれている）
48	無
49	無
50	無
51	石垣は描かれていない、橋樑だけで支えられている、
52	布橋の上に通行者が描かれている作品は、本作品だけである、



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（大徳寺本）

項目番号	項目内容
0 0	大徳寺本（作品番号 0 9）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、彌堂、第2欄～第4欄の間、
0 3	人母屋造
0 4	屋根→黒茶色、何屋→木色・茶色、フレーム→朱色、
0 5	閻魔王だけ、擬人的、
0 6	無
0 7	人母屋造
0 8	無
0 9	屋根→黒茶色、何屋→木色・茶色、フレーム→朱色、
1 0	彌堂内を柱で3区画に分け、それぞれの区画に1柱ずつ、併せて3柱の欄干を置く。擬人的、
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を寫せばありうる、
1 5	橋本体は木色、欄干は朱色、
1 6	左から右
1 7	閻魔堂、布橋、彌堂
1 8	閻魔堂の入り口から布橋を経て彌堂まで、
1 9	西面に向かって布橋の左手前から、窟東（仏・菩薩の面を着けた人々）→式衆→引導師→天蓋持→幡持→女性の参詣者、西面に向かって布橋の右手前から、衆徒→天蓋持→幡持
2 0-1	引導師側：窟東→向拝を付けた窟東の姿、式衆→法衣（黒・木色）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→法衣（黒・木色）・袈裟、幡持→法衣（黒・木色）・袈裟、参詣者→白袈裟、
2 0-2	衆徒側側：衆徒→法衣（黒）・袈裟、式衆（天蓋持・幡持）→法衣（黒）・袈裟、
2 1-1	引導師側：窟東→窟東の前後、先頭2名は棒を持つ、式衆→袈裟、それ以外の持物は確認できない、引導師→おそらくは何も持っていない、天蓋持→天蓋、幡持→幡、女性の参詣者→何も持っていない、
2 1-2	衆徒側側：衆徒→おそらくは何も持っていない、天蓋持→天蓋、幡持→幡、
2 2	約5 5名前後
2 3	1 3名で女性
2 4	白袈裟、白物、
2 5	普通に着こなしている、
2 6	無
2 7	着けていない、
2 8	おそらく足袋と思われる、
2 9	無
3 0	見られない、
3 1	1本
3 2	閻魔堂の閻魔王の前から布橋を経て彌堂まで、
3 3	有、布橋の四方に1本ずつ、橋の本体は白色、足は赤色、
3 4	無
3 5	入ることはできない、
3 6	不可能
3 7	右橋から男住が転落し、それを大蛇が待ちうけている、
3 8	無
3 9	無
4 0	彌堂の左前方に袈裟姿と女性が描かれている、少し離れた場所に衣領帯が
4 1	有
4 2	有
4 3	赤い障で、影が写り込んでいる、
4 4	有
4 5	有
4 6	有
4 7	無
4 8	石垣が1基と五輪塔が5基描かれている、
4 9	無
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている、
5 2	引導師側の前列に、向拝をつけて窟東に前後した人々が見られる、

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（大仙坊B本）

項目番号	項目内容
0 0	大仙坊B本（作品番号 1 0）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、彌堂、第3欄～第4欄の間、
0 3	人母屋造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、何屋→木色、
0 5	?
0 6	無
0 7	切妻造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、何屋→木色、
1 0	彌堂内に3柱、擬人的に描かれている、
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を寫せば可能、
1 5	橋本体は木色、欄干は朱色、
1 6	左から右（閻魔堂から布橋を経て彌堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、彌堂
1 8	閻魔堂から布橋を経て彌堂まで、
1 9	西面に向かって布橋の左手前から、式衆→引導師→天蓋持→参詣者、西面に向かって布橋の右手前から、衆徒→天蓋持→式衆→窟東、
2 0	引導師側：式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→袈裟、参詣者→白袈裟・笠、衆徒側側：衆徒→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→上下裳、式衆→法衣（黒）・袈裟、窟東→窟東の棒、
2 1	引導師側：式衆→袈裟・扇、引導師→中背、参詣者→杖、天蓋持→天蓋、衆徒側側：衆徒→扇、天蓋持→天蓋、式衆→袈裟・扇、窟東→窟東の棒、
2 2	1 8名
2 3	2名でおそらく男性、
2 4	白袈裟、帯の色は不明、
2 5	普通に着こなしている、
2 6	無
2 7	着けている、
2 8	裸足
2 9	有
3 0	見られない、
3 1	1本
3 2	閻魔堂の机の膝下から布橋を経て彌堂まで、
3 3	赤い橋（中は白地に青色で模様）が、布橋の四方に1本ずつ立てられている、
3 4	見られない、
3 5	不可能
3 6	不可能
3 7	大蛇だけが描かれている、
3 8	無
3 9	無
4 0	彌堂の左側に衣領帯と鬼、男女の亡者が描かれている、
4 1	有
4 2	無
4 3	赤いフレームの囲い込みの棒だけで表現されている、
4 4	水たまりの中に牛の頭が描かれている、
4 5	無
4 6	無
4 7	有
4 8	閻魔堂前に、自然石なのか石造物なのか判別できないものが描かれている、
4 9	閻魔堂の左後方に五輪塔が描かれている、
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている、
5 2	絵巻き布教の熱の教具としての要素より、絵巻作品としての要素が強く感じられる、



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（相真坊B本）

項目番号	項目内容
0 0	相真坊B本（作品番号11）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、講堂、第3欄～第4欄の間、
0 3	構造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、創設→白色、
0 5	閻魔王を中心に左右に冥背1名ずつ、擬人的、
0 6	閻魔王の旗のみみられる、旗には書面のみみられる、
0 7	奇怪造
0 8	無
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、創設→白色、
1 0	講堂内に3柱、擬人的に描かれている、
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	講堂の正面を覆い尽くす、
1 5	橋本体は木色、擬人旗は金色、
1 6	左から右（閻魔堂から右橋を経て講堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、講堂
1 8	閻魔堂から布橋を経て講堂まで、
1 9	両面に向かって布橋の左手前から、精持→式衆→引導師→天蓋持→参詣者の老婆（私図） →白装束の参詣者、両面に向かって布橋の右手前から、式衆→精持→茶迎師→天蓋持→賢 閻、講堂の左側に白装束の参詣者、
2 0-1	引導師側：精持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天 蓋持→持姿、参詣者の老婆→私図、老婆の後ろの参詣者→私図、等、
2 0-2	茶迎師側：式衆→法衣（黒）・袈裟、精持→冠・束帯姿、茶迎師→法衣（赤）・袈裟・帽 子、天蓋持→持姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、講堂の左側の人物→白装束、等、
2 1-1	引導師側：精持→棒（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→法衣・杖、引導師→中尊、天蓋 持→天蓋、参詣者の老婆→杖、老婆の後ろの人物→何も持たないが、一人は背中に風鳥羽 包を上っている、
2 1-2	茶迎師側：式衆→私図、精持→棒、茶迎師→中尊、精持→棒、式衆→杖、賢閻→賢閻の持 、講堂の左側の人物→何も持たない、
2 2	3 6名
2 3	1名で女性（老婆）
2 4	私図を着ている、
2 5	普通に着こなしている、
2 6	無
2 7	無
2 8	草履を履いている、
2 9	精持者を表現しているのか参詣者を表現しているのか判別できない人物が数名見られる、
3 0	無
3 1	1本
3 2	閻魔堂の堂前庭下から布橋を経て講堂内へ、
3 3	赤い棒（中は青色）が布橋の四方に1本ずつ立てられている、
3 4	無
3 5	無理
3 6	不可能
3 7	太松だけが描かれている、
3 8	無
3 9	無
4 0	衣箱の上に残衣姿、その斜め下に男女の亡者、
4 1	有
4 2	無
4 3	赤い圓い込みの棒だけで表現されている、
4 4	有
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	閻魔堂の左側に五重塔が描かれている、
5 0	無
5 1	右端は描かれていない、棒だけで支えている、
5 2	『普通坊本』・『天目坊A本』・『室積坊旧蔵本』と共通の図像を有する、

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（大仙坊A本）

項目番号	項目内容
0 0	大仙坊A本（作品番号12）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、講堂、第3欄～第4欄の間、
0 3	構造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、創設→白色、
0 5	閻魔王を中心に左右に冥背1名ずつ、擬人的、
0 6	閻魔王の旗のみみられる、旗の上には書面のみみられる、
0 7	奇怪造
0 8	無
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、創設→白色、
1 0	講堂内を3部案に区切り、中央の部案には主体の3柱の講尊を描き、両側の部案には多量の 講尊を陪伴として描く、擬人的に描かれている、
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	旗の正面を覆い尽くす、
1 5	橋本体は木色、擬人旗は金色、
1 6	左から右（閻魔堂から右橋を経て講堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、講堂
1 8	閻魔堂から布橋を経て講堂まで、
1 9	両面に向かって布橋の左手前から、精持→式衆→引導師→天蓋持→参詣者の老婆（私図） →白装束の参詣者、両面に向かって布橋の右手前から、式衆→精持→茶迎師→天蓋持→賢 閻、講堂の左側に白装束の参詣者、
2 0-1	引導師側：精持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天 蓋持→持姿、参詣者の老婆→私図、老婆の後ろの参詣者→白装束、等、
2 0-2	茶迎師側：式衆→法衣（黒）・袈裟、精持→冠・束帯姿、茶迎師→法衣（赤）・袈裟・帽 子、天蓋持→持姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、講堂の左側の人物→白装束、等、
2 1-1	引導師側：精持→棒（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→法衣・杖、引導師→中尊、天蓋 持→天蓋、参詣者の老婆→杖、老婆の後ろの人物→何も持たないが、一人は背中に風鳥羽 包を上っている、
2 1-2	茶迎師側：式衆→私図、精持→棒、茶迎師→中尊、精持→棒、式衆→杖、賢閻→賢閻の持 、講堂の左側の人物→何も持たない、
2 2	2 9名
2 3	1名で女性（老婆）
2 4	私図を着ている、
2 5	普通に着こなしている、
2 6	無
2 7	無
2 8	草履
2 9	精持者を表現しているのか参詣者を表現しているのか判別できない人物が数名見られる、
3 0	無
3 1	1本
3 2	閻魔堂の堂前庭下から布橋を経て講堂内へ、
3 3	赤い棒（中は青色）が布橋の四方に1本ずつ立てられている、
3 4	無
3 5	不可能
3 6	不可能
3 7	太松のみ描かれている、
3 8	無
3 9	無
4 0	衣箱の下に替衣姿と鬼、亡者が描かれている、
4 1	有
4 2	無
4 3	赤い圓い込みの棒だけで表現されている、
4 4	有
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	閻魔堂の左側に五重塔が描かれている、
5 0	無
5 1	右端は描かれていない、棒だけで支えている、
5 2	『普通坊本』・『相真坊B本』・『室積坊旧蔵本』と共通の図像を有する、

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（宝龍坊旧蔵本）

項目番号	項目内容
0 0	宝龍坊旧蔵本（作品番号13）
0 1	不明
0 2	画面に向かって左から閻魔堂、布橋、講堂、第3幅から第4幅の間。
0 3	橋
0 4	フレーム→赤色、屋根→茶色、側壁→白色。
0 5	閻魔堂を中心に左右に冥客が1名ずつ、擬人的。
0 6	閻魔堂の机が見られる。机の上には香画が見られる。
0 7	寄袂造
0 8	無
0 9	フレーム→赤色、屋根→茶色、側壁→黄土色。
1 0	講堂内に3柱、擬人的に描かれている。
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	講堂の正面を寫げば可能。
1 5	布橋本体・欄干は木色、覆斗は黄土色（茶色っぽい）。
1 6	画面に向かって、左側から右側へ、閻魔堂から右橋を経て講堂へ。
1 7	閻魔堂、右橋、講堂
1 8	閻魔堂から右橋を経て講堂まで。
1 9	画面に向かって右橋の左手前から、橋持→式衆→引導師→天蓋持→参詣者の老婆（私図）→私図の男性（参詣者か？）、画面に向かって右橋の右手前から、式衆→橋持→天蓋持→式衆→賢僧。
2 0-1	引導師例：橋持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→持笠、参詣者の老婆→私図、老婆の後ろの人物→私図・笠。
2 0-2	茶室例：式衆→法衣（黒）・袈裟、橋持→冠・束帯姿、茶室例→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→持笠、式衆→法衣（黒）・賢僧→上下姿。
2 1-1	引導師例：橋持→橋（額縁枠に取付られたもの）、式衆→法衣・袈、引導師→何も持たず、天蓋持→天蓋、老婆の参詣者→何も持たず。
2 1-2	茶室例：式衆→私図・袈、橋持→橋、茶室例→輪扇、天蓋持→天蓋、賢僧→何も持たず。
2 2	3-4名
2 3	1名で女性（老婆）。
2 4	私図を着ている。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	着けていない。
2 8	裸足
2 9	橋持者を表現しているか参詣者を表現しているのか判別できない人物が数名見られる。
3 0	見られない。
3 1	3本
3 2	閻魔堂の机の右下から右橋を経て、講堂まで。
3 3	赤色の橋（中は青色）が右橋の四方に1本ずつ立てられている。
3 4	無
3 5	入れない。
3 6	不可能
3 7	大輪だけが描かれている。
3 8	無
3 9	無
4 0	衣領樹の上に袈衣袋、その裾下に男女の亡者。
4 1	有
4 2	無
4 3	無
4 4	無
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	無
4 9	閻魔堂の左側に五重塔が描かれている。
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている。
5 2	『善道坊本』・『大仏坊A本』・『相良坊B本』と共通の図像を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（善道坊本）

項目番号	項目内容
0 0	善道坊本（作品番号14）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、右橋、講堂、第3幅～第4幅の間。
0 3	寄袂造
0 4	フレーム→赤色、屋根→茶色、側壁→白色。
0 5	閻魔堂を中心に左右に冥客が1名ずつ、擬人的。
0 6	閻魔堂の机が見られる。机の上には香画が見られる。
0 7	人形屋造
0 8	無
0 9	フレーム→赤色、屋根→茶色、側壁→白色。
1 0	講堂内を3部屋に区切り、中央の部屋には主尊の3柱の講席を描き、西側の部屋には多数の講席を橋脚として描く。擬人的に描かれている。
1 1	無
1 2	無
1 3	無
1 4	講堂の正面を寫げば有り得る。
1 5	橋本体は木色、覆斗は金色。
1 6	左から右（閻魔堂から右橋を経て講堂へ）
1 7	閻魔堂、右橋、講堂
1 8	閻魔堂から右橋を経て講堂まで。
1 9	画面に向かって右橋の左手前から、橋持→式衆→引導師→天蓋持→参詣者、画面に向かって右橋の右手前から、式衆→橋持→茶室例→天蓋持→式衆→賢僧。
2 0-1	引導師例：橋持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→持笠、参詣者→私図・笠。
2 0-2	茶室例：式衆→法衣（黒）・袈裟、橋持→冠・束帯姿、茶室例→法衣（赤）・袈裟・帽子、天蓋持→持笠、式衆→法衣（黒）・賢僧→上下姿。
2 1	引導師例：橋持→橋（額縁枠に取付られたもの）、式衆→法衣・袈、引導師→中尊、天蓋持→天蓋、参詣者→何も持たない。茶室例例：式衆→私図、橋持→橋、茶室例→中尊、橋持→橋、式衆→私図、賢僧→賢僧の持。
2 2	約3-3名
2 3	5名でおそらくいずれも男性。
2 4	白袈衣、帯の色は紺・茶など。
2 5	全員裾をたくし上げている。
2 6	無
2 7	着けていない。
2 8	裸足
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	3本
3 2	閻魔堂の庫前台下から右橋を経て講堂内へ。
3 3	赤い橋（中は青色）が右橋の四方に1本ずつ立てられている。
3 4	無
3 5	無理
3 6	不可能
3 7	大輪だけが描かれている。
3 8	無
3 9	有
4 0	衣領樹の下に袈衣袋と毘、亡者が描かれている。
4 1	有
4 2	無
4 3	赤い橋で圍った影向右がみられる。
4 4	有
4 5	無
4 6	無
4 7	無
4 8	閻魔堂の左側に五重塔が描かれている。
4 9	無
5 0	無
5 1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている。
5 2	『大仏坊A本』・『相良坊B本』・『宝龍坊旧蔵本』と共通の図像を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（佐伯家本）

項目番号	項目内容
0.0	佐伯家（青次）本（作品番号15）
0.1	不明
0.2	左から閻魔堂、右橋、燼堂、布橋には「布橋」の注記が見られる、第3欄～第4欄の間、寄位迄
0.4	フレーム→朱色、屋根→焦茶色、創壁→黄上色、
0.5	閻魔王を中心に左右に男官1名ずつ、擬人的、
0.6	有
0.7	入母屋造
0.8	有
0.9	フレーム→朱色、屋根→焦茶色、創壁→白色、
1.0	燼堂内入り口付近に3株の橘が描かれている、
1.1	無
1.2	無
1.3	無
1.4	堂の正面を蓋げは有、
1.5	橋本体は朱色、燼堂珠は金色、
1.6	左から右（閻魔堂から布橋を経て燼堂へ）
1.7	閻魔堂、右橋、燼堂
1.8	閻魔堂から右橋を経て燼堂まで、
1.9	画面に向かって右橋の左手前から、橋持→式衆（法服・杖）、引導師、天蓋持、男女の参詣者、西面に向かって右橋の右手前から、式衆（幟旗持）→橋持→奉迎師→天蓋持→式衆（杖）→誓願、
2.0	引導師側：橋持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、男女の参詣者→白袈裟、奉迎師側：橋持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒）・袈裟、奉迎師→法衣（赤）・袈裟、帽子、誓願→持姿、
2.1	引導師側：橋持→橋、式衆→法服、引導師→？、天蓋持→天蓋、男女の参詣者→杖、奉迎師側：式衆→幟旗、橋持→橋、奉迎師→楯形（金色）、天蓋持→天蓋、誓願→誓願の持、
2.2	3.2人
2.3	5名でおそらく男性2名に女性3名、
2.4	白袈裟に白帽、
2.5	2名は扇をたくし上げているが3名は普通に替こなしている、
2.6	無
2.7	着けていない、
2.8	足袋を履いている、
2.9	無
3.0	見られない、
3.1	1本
3.2	閻魔堂の卓前幕下から布橋を経て燼堂内
3.3	無
3.4	右橋に「右橋」の注記が見られる、
3.5	判断できない、
3.6	可能
3.7	大松だけが描かれている、
3.8	無
3.9	有
4.0	燼堂の左横の衣領樹の下に、誓衣裳と男、男女の亡者が描かれている、
4.1	有、「四木形」の注記が見られる、
4.2	有、「洗淨頂」の注記が見られる、
4.3	赤い楯で囲った影向石がみられる、「影向石」の注記が見られる、
4.4	有
4.5	無
4.6	無
4.7	有
4.8	無
4.9	無
5.0	無
5.1	石垣が描かれている、
5.2	「善道坊本」・「大信坊入本」・「相馬坊日本」・「宝鏡坊旧蔵本」と類似した構図と図像を有する、

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（坪井家B本）

項目番号	項目内容
0.0	坪井家B（義昭）本（作品番号16）
0.1	不明
0.2	左から閻魔堂、布橋、燼堂、第3欄～第4欄の間、
0.3	入母屋造
0.4	フレーム→朱色、屋根→茶色、創壁→白色、
0.5	閻魔王のみ、擬人的、
0.6	無
0.7	入母屋造
0.8	有
0.9	フレーム→朱色、屋根→茶色、創壁→白色、
1.0	描かれていない、
1.1	無
1.2	無
1.3	判断できない、
1.4	堂の正面を蓋げは可能、
1.5	橋本体は朱色、燼堂珠は金色、
1.6	左（閻魔堂）から右（燼堂）へ、
1.7	閻魔堂、布橋、燼堂
1.8	閻魔堂から布橋を経て燼堂まで、
1.9	画面に向かって右橋の左手前から、橋持→式衆→引導師→天蓋持→男女の参詣者、西面に向かって右橋の右手前から、奉迎師→式衆→誓願、
2.0-1	引導師側：橋持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒・茶（袍袋））・袈裟、引導師→法衣（赤）（袍袋）、天蓋持→烏帽子・水干姿、式衆→法衣（黒（袍袋））、誓願→持姿、
2.0-2	奉迎師側：奉迎師→法衣（茶（袍袋））・帽子、式衆→法衣（黒・茶（袍袋））、橋持→見えない、誓願→持姿、
2.1	引導師側：橋持→橋、式衆→杖、引導師→何も持たず、参詣者→何も持たず、誓願→誓願の持、奉迎師側：式衆→幟旗、その他は確認できず、誓願→誓願の持、
2.2	約3.2名
2.3	約7名でおそらく女性、
2.4	白袈裟、白帽、
2.5	普通に替こなしている、
2.6	無
2.7	7名のうち5名が着けており、2名が着けていない、
2.8	扇を引きずっており識別ができない、
2.9	無
3.0	布橋の浅り口（布橋上左端）に楯形持が見られる、
3.1	1本
3.2	閻魔堂閻魔王の足元から右橋を経て燼堂入り口まで、
3.3	無
3.4	「布橋灌頂」の移と、赤く塗り潰された橋がみられる、
3.5	入ることができる、
3.6	可能
3.7	大松のみが描かれている、
3.8	無
3.9	有
4.0	燼堂の下方、右橋の手に、衣領樹と誓衣裳、男女の亡者が見られる、
4.1	有
4.2	有
4.3	焦茶色の楯で囲った影向石がみられる、
4.4	有
4.5	有（彩色）
4.6	無
4.7	有
4.8	石打輪2基
4.9	無
5.0	無
5.1	石垣が描かれている、
5.2	特になし、



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（相真坊A本）

項目番号	項目内容
0.0	相真坊A本（作品番号17）
0.1	不明
0.2	左から閻魔堂、布橋、講堂。第4欄～第5欄の間。
0.3	寄役者
0.4	燈籠→茶色、フレーム→紫色、創製→白色。
0.5	閻魔堂内の奥に、閻魔王を中心として左右に1林ずつ冥宮を描く。擬人的。
0.6	有
0.7	入母屋造
0.8	有るが、奥には入れない。
0.9	燈籠→茶色、フレーム→紫色、創製→白色。
1.0	描かれていない。
1.1	有
1.2	無
1.3	講堂内いっばいに祭壇が描かれていて法要のスペースはないように感じられる。
1.4	堂の正面を遮り得ない。
1.5	木色、閻魔堂は茶色。
1.6	左から右へ。
1.7	閻魔堂、布橋、講堂
1.8	閻魔堂から右橋を経て講堂まで。
1.9	両向に向かって右橋の左手前から、式衆→引導師→天蓋持→式衆→男女の参詣者、両向に向かって右橋の右手前から、式衆→奉迎師→天蓋持→式衆→舞田。
2.0	引導師側：式衆→法衣（黒）→袈裟、引導師→法衣（赤）→袈裟、天蓋持→持送、男女の参詣者→私図、奉迎師側：式衆→法衣（黒・紫）→袈裟、奉迎師→法衣（赤・紫）→袈裟、天蓋持→持送、橋持→冠・裳袴姿、舞田→持送。
2.1	引導師側：式衆→法衣・袈裟、引導師→中色あるいは何も持たず、男女の参詣者→何も持たず、奉迎師側：式衆→袈裟・錢、奉迎師→信香あるいは何も持たず、束帯姿の人物→何も持たず、舞田→舞舞の棒。
2.2	5.4名
2.3	2.4名で男性と女性が混在。
2.4	私図
2.5	普通に着こなしている。
2.6	無
2.7	着けていない。
2.8	識別できない。
2.9	無
3.0	見られない。
3.1	3本
3.2	閻魔堂内の祭壇下から布橋を経て講堂内の祭壇下まで。
3.3	有、赤色。
3.4	無
3.5	入ることが出来る。
3.6	不可能
3.7	右橋から転落する人物は描かれていないが、大蛇は描かれている。
3.8	無
3.9	無
4.0	講堂から離れた位置（両右下隅）に衣領樹と袴衣裳、男女の亡者が描かれている。
4.1	有
4.2	有
4.3	無
4.4	有（写実的）
4.5	有（写実的）
4.6	有
4.7	有
4.8	無
4.9	無
5.0	無
5.1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている。
5.2	5欄物の立山曼荼羅は、この作品だけである。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（宝泉坊本）

項目番号	項目内容
0.0	宝泉坊本（作品番号18）
0.1	安政5年に二河内尾崎王松受樂全（和泉守）が、戸橋寺に伝わる立山曼荼羅を著写した。
0.2	左から閻魔堂、布橋、講堂。第3欄～第4欄の間。
0.3	入母屋造
0.4	フレーム→木色、燈籠→無茶色、創製→白色・木色・灰色。
0.5	閻魔王らしきものが、なんとなく見られる。
0.6	閻魔王の机が見られる。
0.7	入母屋造
0.8	有
0.9	フレーム→木色、燈籠→無茶色、創製→木色・灰色。
1.0	橋脚は描かれていない。
1.1	描かれていない。
1.2	無
1.3	やや狭く感じられる。
1.4	有り得る。
1.5	橋本体は木色、閻魔堂は黒色。
1.6	左から右（閻魔堂から右橋を経て講堂へ）
1.7	閻魔堂、右橋、講堂
1.8	閻魔堂から右橋を経て講堂まで。
1.9	両向に向かって右橋の左側から、橋持→式衆→引導師→天蓋持→式衆→女住の参詣者、両向に向かって右橋の右側から、式衆→橋持→式衆→奉迎師→天蓋持→式衆。
2.0-1	引導師側：橋持→冠・袴衣裳、式衆→法衣（黒・紫・水色・緑）→袈裟、引導師→法衣（赤）→袈裟（袴は特別でせず）、天蓋持→鳥帽子・水干笠、砂子→私図。
2.0-2	奉迎師側：式衆→法衣（黒・紫・水色・緑）→袈裟、橋持→冠・袴衣裳、奉迎師→法衣（赤）→袈裟、天蓋持→鳥帽子・袴衣裳、舞田→鳥帽子・水干笠。
2.1-1	引導師側：橋持→額縁額縁に取付られたもの）、式衆→引導師側・錢・袴衣裳・首飾り、如首・経典、奉迎師側：何も持たないように見える。参詣者→老僧は杖を持つ、他の男女の参詣者は何も持たない。
2.1-2	奉迎師側：式衆→存印・錢・経典、橋持→橋持→橋（額縁額縁に取付られたもの）、奉迎師→中侍、天蓋持→天蓋、舞田→何も持たない。刀を差している。
2.2	4.5人
2.3	4名で全て女性。
2.4	それぞれが自由な服装をしている。
2.5	普通に着こなしている。
2.6	無
2.7	着けていない。
2.8	襦足
2.9	無
3.0	見られない。
3.1	3本
3.2	閻魔堂の奥右隅下から布橋を経て講堂入り口直前まで。
3.3	無
3.4	白い橋脚は描かれているが、文書は記されていない。
3.5	入り口直前に描かれている彩色帯が戸張のようなものを越えて行けば入っていくことができそうである。
3.6	可能か否かは判断できない。
3.7	大蛇のみが描かれている。
3.8	講堂の右斜め上方に阿陀陀如女の三尊像が描かれている。
3.9	無
4.0	講堂から離れて、右橋の下方に、衣領樹と袴衣裳、男女の亡者が描かれている。
4.1	有
4.2	有
4.3	木色の障で圍った影向右が見られる。
4.4	有
4.5	有
4.6	有
4.7	有
4.8	石造物が2基見られる。
4.9	閻魔堂の右橋に石塔が見られる。
5.0	無
5.1	石垣は描かれていない、橋脚だけで支えている。
5.2	「右相坊本」と共通した橋脚・因縁を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（吉祥坊本）

項目番号	項目内容
0 0	吉祥坊本（作品番号19）
0 1	慶応2（1866）年4月
0 2	左から閻魔堂、布橋、壇堂、第3欄～第4欄の間、
0 3	入母屋造
0 4	フレーム→朱色、屋根→茶色、何処→白色・朱色。
0 5	閻魔王を中心に左右に冥官1名ずつ、擬人的に描かれている。
0 6	閻魔王の机がみられる。机には香炉と仏具がみられる。
0 7	入母屋造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、何処→白色・朱色。
1 0	壇堂の入り口の前に3尊安置されている、擬人的ではなく、本像として描かれている。
1 1	無
1 2	無
1 3	有
1 4	壇堂の正面を蓋げぼり落ちる。
1 5	橋本体は白色、閻魔床は黒色。
1 6	左から右（閻魔堂から布橋を経て壇堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、壇堂
1 8	閻魔堂から布橋を経て壇堂まで。
1 9	高僧に向かって布橋の左側から、精持→式衆→引導師→天蓋持→式衆→女性の参詣者、四向に向かって布橋の右側から、式衆→精持→式衆→参詣者→天蓋持→式衆。
2 0-1	引導師：精持→冠・袈裟、式衆→法衣（黒・茶・赤・緑）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟（種類は判別できず）、天蓋持→烏帽子・水干姿、参詣者→私履。
2 0-2	参詣防衛：式衆→法衣（茶・紺・灰色・黒）・袈裟、精持→冠・袈裟、参詣者→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→烏帽子・袈裟、警固→烏帽子・水干姿。
2 1-1	引導師：精持→精（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→引啓・法杖・鏡・精香炉、その他も持物が見られるが、それが何であるかは判別できない。引導師→何も持たないように見える。参詣者→提燈杖を持つ。他の女性の参詣者は何も持たない。
2 1-1	参詣防衛：式衆→色絹・鏡、その他にも持物が見られるが、それが何であるかは判別できない。精持→精（龍頭棒に取付られたもの）、参詣防衛→中啓、天蓋持→天蓋、警固→何も持たない。
2 2	約45名
2 3	4名で全て女性。
2 4	それぞれが自由な服装をしている。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	着用していない。
2 8	深足
2 9	見られない。
3 0	見られない。
3 1	3本
3 2	閻魔堂の卓台右下から布橋を経て壇堂入り口直前まで。
3 3	白い橋が布橋の四方に1本ずつ立てられている。
3 4	有、「布橋大進頂」「立山坊壇尊」
3 5	入り口直前に安置される3体の橋尊を移動すれば入れることができる。
3 6	可能。
3 7	大蛇だけが描かれている。
3 8	壇堂の右斜め上方に阿婆控如來の三尊宗尊が描かれている。
3 9	無
4 0	壇堂から離れて、布橋の下方に、衣箱器と袈裟袋、男女の亡者が描かれている。
4 1	有
4 2	有
4 3	本色の橋で囲った影向石がみられる。
4 4	有
4 5	有
4 6	有
4 7	有
4 8	石造物が2基見られる。
4 9	閻魔堂の右横に石塔が見られる。
5 0	無
5 1	石州は見られない。精持だけで支えている。
5 2	『家範坊本』と共通した構図・図像を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（富山県立図書館本）

項目番号	項目内容
0 0	富山県立図書館本（作品番号21）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、壇堂、第3欄～第4欄の間、
0 3	寄棟造
0 4	フレーム→朱色、屋根→薄い灰色、何処→なし。
0 5	閻魔王を中心に左右に冥官1名ずつ、擬人的に描かれている。
0 6	閻魔王が使用する机がみられる。
0 7	入母屋造
0 8	有
0 9	フレーム→朱色、屋根→茶色、何処→赤色・灰色。
1 0	壇堂の入り口の所に祭壇を設け、その上に3体の橋尊を安置している、擬人的ではなく、本像として描いている。
1 1	祭壇が橋尊の安置台になっている。
1 2	無
1 3	堂内の奥の部分に寄るかもしれない。
1 4	堂の正面を蓋げぼり落ちる。
1 5	朱色。閻魔床は金色。
1 6	左から右（閻魔堂から布橋を経て壇堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、壇堂
1 8	閻魔堂前から布橋を経て壇堂内まで。
1 9	布橋の向かって左手前から、精持→式衆→参詣者→天蓋持→式衆→警固、布橋の向かって右手前から、式衆→精持→参詣者→天蓋持→式衆→警固。
2 0	引導師：精持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒・茶）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→袈裟、参詣者→白袈裟・笠、参詣防衛：式衆→法衣（黒）・袈裟、式衆→袈裟、参詣防衛→法衣（赤）・袈裟、警固→袈裟。
2 1-1	引導師：精持→精（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→引啓・法杖・鏡・扇・精香炉・法子・籠あるいは杖あるいは鏡、引導師→中啓、天蓋持→天蓋（龍頭棒に取付られたもの）、警固→警務の棒、参詣者→何も持たず。
2 1-2	参詣防衛：式衆→鏡、参詣防衛→中啓、精持→精（龍頭棒に取付られたもの）、警固→警務の棒。
2 2	45名
2 3	12名でおそらく全員女性。
2 4	白袈裟、白袴。
2 5	普通に着こなしている。
2 6	無
2 7	老女1名を除きその他は着けている。
2 8	短が長く足が隠れ誤判できない。
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	3本
3 2	閻魔堂の机の下から布橋を経て壇堂内の祭壇の下まで。
3 3	有。本体は白色、足の色は赤色。
3 4	仁王門前に「布橋大進頂」の橋が、また、壇堂の左横に「立山坊壇尊」の橋がたてられている。
3 5	入ることができない。
3 6	不可能
3 7	大蛇だけを描く
3 8	無
3 9	無
4 0	壇堂の右斜め下方に衣箱器と袈裟袋、男女の亡者が描かれている。
4 1	有
4 2	有
4 3	有（石と橋）
4 4	有
4 5	有（穿束的）
4 6	有
4 7	無
4 8	石造物が2基見られる。
4 9	閻魔堂の左横に石塔が見られる。
5 0	無
5 1	石州は描かれている。
5 2	『家範坊本』・『立山町本』と共通した図像を有する。



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会への描写状況（泉蔵坊本）

項目番号	項目内容
0.0	泉蔵坊本（作品番号22）
0.1	不明
0.2	左から閻魔堂、右橋、彌堂、第3期～第4期の回。
0.3	杏枝道
0.4	フレーム→朱色、屋根→薄い黒色、何れ→なし。
0.5	閻魔堂を中心に左右に冥骨1名ずつ、擬人的に描かれている。
0.6	閻魔王が使用する杖が見られる。
0.7	入母屋造
0.8	有
0.9	フレーム→朱色、屋根→薄い黒色、何れ→黒色。
1.0	彌堂の入り口の所に祭壇を設け、その上に3体の彌尊を安置している、擬人的ではなく、木像として描いている。
1.1	祭壇が彌尊の安置台になっている。
1.2	無
1.3	堂内の奥の部分に有るかもしれない。
1.4	堂の正面を覆い被せ可能。
1.5	朱色、擬宝珠は黒色。
1.6	左から右（閻魔堂から右橋を経て彌堂へ）
1.7	閻魔堂、右橋、彌堂
1.8	閻魔堂前から右橋を経て彌堂内まで。
1.9	右橋の向かって左手前から、轉持→式衆→茶室跡→天蓋持→式衆→誓圖→夢遊者、右橋の向かって右手前から、式衆→轉持→茶室跡→天蓋持→式衆→誓圖。
2.0-1	引導師例：轉持→冠・束帯姿、式衆→法衣（黒・茶・薄紫）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→袈裟、夢遊者→白袈裟。
2.0-2	茶室跡例：式衆→法衣（茶・黒）・袈裟、式衆→冠・束帯姿、茶室跡→法衣（赤）・袈裟、誓圖→袈裟。
2.1-1	引導師例：轉持→轡（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→引導・法螺・錢・草履・栴檀・法子・鉾あるいは双盤あるいは鉢、引導師→何れも持たず、天蓋持→天蓋（龍頭棒に取付られたもの）、誓圖→誓珠の持、夢遊者→何れも持たず。
2.1-2	茶室跡例：式衆→轡・錢、茶室跡→中唇、轉持→轡（龍頭棒に取付られたもの）、誓圖→誓珠の持。
2.2	4.3名
2.3	1.2名
2.4	白袈裟と薄紺色の袈裟を着ている。
2.5	背中に着こなししている。
2.6	無
2.7	1名の老翁を除き全員が着ている。
2.8	顔は白黒だがおそらく裸足であろう。
2.9	無
3.0	見られない。
3.1	3本
3.2	閻魔堂の根の下から右橋を経て彌堂内の祭壇の下まで。
3.3	有、本体は白色、足の部分は黄色。
3.4	仁王門前に「右橋大灌頂」の標が、また、彌堂の左側に「立山開闢尊」の標がたてられている。
3.5	入ることができない。
3.6	不可能
3.7	大蛇のみを描く。
3.8	無
3.9	無
4.0	彌堂の右科下方に衣園樹と誓衣袋、男女の亡者が描かれている。
4.1	有
4.2	有
4.3	無
4.4	有（石と標）
4.5	有（写真的）
4.6	有
4.7	無
4.8	右塔婆が2基見られる。
4.9	閻魔堂の左側に右塔が見られる。
5.0	右塔は描かれている。
5.1	無
5.2	「富山県立図書館本」・「立山町本」と共通した図像を有する。

第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会への描写状況（立山町本）

項目番号	項目内容
0.0	立山町本（作品番号2.3）
0.1	不明
0.2	左から閻魔堂、右橋、彌堂、第3期～第4期の回。
0.3	杏枝道
0.4	フレーム→朱色、屋根→薄い褐色、何れ→なし。
0.5	閻魔堂を中心に左右に冥骨1名ずつ、擬人的に描かれている。
0.6	閻魔王が使用する杖のみ見られる、書面と筆記用紙のみ見られる。
0.7	入母屋造
0.8	有
0.9	フレーム→朱色、屋根→薄い褐色、何れ→朱色・緑色。
1.0	描かれていない。
1.1	無
1.2	有（1名）
1.3	有
1.4	堂の正面を覆い被せ可能。
1.5	朱色、擬宝珠は白色に近い。
1.6	左から右（閻魔堂から右橋を経て彌堂へ）
1.7	閻魔堂、右橋、彌堂
1.8	閻魔堂前から右橋を経て彌堂内まで。
1.9	右橋の向かって左手前から、轉持→式衆→茶室跡→天蓋持→式衆→誓圖→夢遊者、右橋の向かって右手前から、式衆→轉持→茶室跡→天蓋持→式衆→誓圖。
2.0-1	引導師例：轉持→冠・束帯姿（灰色の格子模様）、式衆→法衣（ピンク・薄紫・紺・緑・オレンジ・黄色）・袈裟、引導師→法衣（赤）・袈裟、天蓋持→袈裟、夢遊者→白袈裟。
2.0-2	茶室跡例：式衆→法衣（ピンク・薄紫・紺）・袈裟、式衆→冠・束帯姿（紺）、茶室跡→法衣（赤）・袈裟、誓圖→袈裟（木色・緑）、茶室跡→法衣（赤）・袈裟、誓圖→袈裟（木色・緑）。
2.1-1	引導師例：轉持→轡（龍頭棒に取付られたもの）、式衆→引導・法螺・錢・草履・栴檀・法子・鉾あるいは双盤あるいは鉢、引導師→中唇、天蓋持→天蓋（龍頭棒に取付られたもの）、誓圖→誓珠の持、夢遊者→何れも持たず。
2.1-2	茶室跡例：式衆→錢、茶室跡→中唇、轉持→轡（龍頭棒に取付られたもの）、誓圖→誓珠の持。
2.2	1.5名
2.3	1.2名でそれぞれ全員が着ている。
2.4	白袈裟、帯の色は不明です。
2.5	背中に着こなししている。
2.6	無
2.7	先頭を歩く杖突きの女性1名を除きその全員が着ている。
2.8	おそらく全員足袋。
2.9	無
3.0	見られない。
3.1	3本
3.2	閻魔堂の根の下から右橋を経て彌堂内の奥まで。
3.3	有、本体は黄色、足の部分は黄色。
3.4	因本標に何か記されているが目録できない。
3.5	入ることができる。
3.6	可能
3.7	無
3.8	無
3.9	無
4.0	右橋灌頂会の拜台からはずれた場所に衣園樹と誓衣袋、男女の亡者が描かれている。
4.1	有
4.2	有
4.3	無
4.4	有
4.5	有（写真的）
4.6	無
4.7	無
4.8	右塔婆が2基見られる。
4.9	閻魔堂の左側に右塔が見られる。
5.0	右塔は描かれている。
5.1	無
5.2	布橋灌頂会の会場に閻魔の前庭が飛びかっている。「泉蔵坊本」・「富山県立図書館本」と共通の図像を有する。



第10表：立山曼荼羅諸本における布橋灌頂会の描写状況（日光坊A本）

項目番号	項目内容
0 0	日光坊A本（27）
0 1	不明
0 2	左から閻魔堂、布橋、燗堂、1橋全てが布橋灌頂会の描写に当てられる。
0 3	奇樓造
0 4	フレーム一茶色、屋根一茶色。
0 5	閻魔堂を中心に左右に真鍮工名ずつ、擬人的。
0 6	閻魔堂の机がみられる。机には香燭がみられる。
0 7	人身屋造
0 8	有
0 9	フレーム一茶色、屋根一茶色、剝屋一白色、中床一濃緑色。
1 0	尊像は描かれていない。
1 1	入り口直前に机、そしてその上に仏具がみられる。
1 2	無
1 3	無
1 4	堂の正面を延げげ可能。
1 5	橋本体は木色、欄干は金色。
1 6	左から右（閻魔堂から香橋を経て燗堂へ）
1 7	閻魔堂、布橋、燗堂
1 8	閻魔堂から香橋を経て燗堂まで。
1 9	両面に向かって有橋の左手側から、橋持→式衆→引導師→天蓋持→参詣者、両面に向かっ て有橋の右手側から、式衆→橋持→宗迎師→天蓋持→式衆→舞團。
2 0-1	引導師→橋持→冠・束縛袋、式衆→法衣（黒）→袈裟、式衆→法衣（灰色）→袈裟、引 導師→法衣（赤）→袈裟、天蓋持→持袋、参詣者→白袈裟・笠。
2 0-2	宗迎師→袈裟持→法衣（黒）→袈裟、橋持→冠・束縛袋、宗迎師→法衣（赤）→帽子、 袈裟、式衆→法衣（黒）→袈裟、舞團→杖（?）。
2 1	引導師→橋持→橋（欄干は取付られている）、式衆→法衣・袴・袴・袴・横笛・香燭 ・引導師→去子・柄杓、天蓋持→天蓋、参詣者→杖、宗迎師→式衆→無儀、橋持→ 橋、宗迎師→中宵、式衆→杖・鏡、天蓋持→天蓋、舞團→香燭の棒。
2 2	58名
2 3	15名で女性。
2 4	白装束、袴の色は茶色・木色。
2 5	普遍に首こなししている。
2 6	無
2 7	背けている。
2 8	足袋を履いている。
2 9	無
3 0	見られない。
3 1	3本
3 2	閻魔堂の机の鼻下から有橋を経て燗堂直前まで。
3 3	赤い橋（中は青色）が香橋の四方に1本ずつ立てられている。
3 4	無
3 5	入ることができる。
3 6	可能
3 7	無
3 8	有
3 9	無
4 0	無
4 1	有
4 2	有、燗堂に銘文が見られる。
4 3	無
4 4	有
4 5	有
4 6	有
4 7	有
4 8	石造物が群立している。
4 9	仁王門の机に石灯籠が描かれている。燗堂の後方に、三重塔が描かれている。
5 0	無
5 1	石垣は描かれている。
5 2	当作業は、有橋灌頂会の場面のみを描写している。

第11表：立山曼荼羅諸本の分類（福江分類）

番号	作品名	新類系	備考
01	坪井家(龍童)A本	芦焔寺系A	元来は日光坊本。芦焔寺日光坊と師檀関係を結ぶ坪井家に伝わる。芦焔寺教順坊の所蔵品を文政期から天保期に龍淵が貰い受け補筆して使用していたが、後に日光坊へ。
02	来迎寺本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
03	大江寺本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
04	最勝寺本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
05	多賀坊本	芦焔寺系B	芦焔寺の木版立山禪定登山案内図を模写して制作されている。制作者と芦焔寺宿坊家との関係は不明。
06	稲沢家本	芦焔寺系A	もと芦焔寺福泉坊に伝わる。
07	立山開発鉄道(佐伯宗義)本	芦焔寺系A	もと芦焔寺宿坊家に伝わる。
08	龍光寺本	芦焔寺系A	もと芦焔寺日光坊に伝わる。
09	大徳寺本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
10	大仙坊B本	芦焔寺系A	芦焔寺大仙坊に伝わる。
11	相真坊B本	芦焔寺系A	芦焔寺相真坊に伝わる。
12	大仙坊A本	芦焔寺系A	芦焔寺大仙坊に伝わる。
13	宝龍坊旧蔵本	芦焔寺系A	芦焔寺宝龍坊に伝わる。
14	善道坊本	芦焔寺系A	芦焔寺善道坊に伝わる。
15	佐伯家(省次)本	芦焔寺系A	芦焔寺門前百姓嘉蔵家(嘉蔵家は文化10年の宗門改帳から記載が見られる)で制作された。幕末期嘉蔵家の3男佐伯久松が明治に入り立山信仰を布教し、絵解きで使用していた。
16	坪井家(義昭)B本	芦焔寺系A	元来は日光坊本。芦焔寺日光坊と師檀関係を結ぶ坪井家に伝わる。
17	相真坊A本	芦焔寺系A	芦焔寺相真坊に伝わる。元来は芦焔寺雄山神社祈願殿所蔵であったといわれている。
18	宝泉坊本	芦焔寺系A	芦焔寺宝泉坊と師檀関係を結ぶ松平乗全が描いたもの。おそらく宝泉坊が使用していた既存の立山曼荼羅を乗全が模写したようである。
19	吉祥坊本	芦焔寺系A	芦焔寺吉祥坊と師檀関係を結ぶ本多忠民が皇女和宮も巻き込んで吉祥坊に奉納したものの。
20	越中書林本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
21	富山県立図書館本	芦焔寺系B	図柄モチーフは芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。裏書によると近江國の岩谷が既存の立山曼荼羅を模写した。檀那場の関係から考察すると芦焔寺泉蔵坊？
22	泉蔵坊本	芦焔寺系A	芦焔寺泉蔵坊に伝わる。
23	立山町本	芦焔寺系A	もと芦焔寺長寛坊に伝わる。
24	坂木家本	芦焔寺系A	もと芦焔寺福泉坊に伝わる。
25	日光坊B本(3幅)	芦焔寺系A	芦焔寺日光坊に伝わる。
26	玉泉坊本	芦焔寺系A	芦焔寺玉泉坊に伝わる。
27	日光坊A本(1幅)	芦焔寺系A	芦焔寺日光坊に伝わる。
28	玉林坊本	岩焔寺系A	岩焔寺玉林坊に伝わる。
29	中道坊本	岩焔寺系A	岩焔寺中道坊に伝わる。
30	西田美術館本	岩焔寺系B	図柄モチーフは岩焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
31	桃原寺本	岩焔寺系B	図柄モチーフは岩焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
32	伊蔵家本	岩焔寺系B	図柄モチーフは岩焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似している。
33	竹内家本	岩焔寺系B	図柄モチーフは岩焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と芦焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本の両方の内容を参考としている。
34	志鷹家(新太郎)本	岩焔寺系B	岩焔寺の木版立山禪定登山案内図を拡大模写して制作されている。制作者と岩焔寺宿坊家との関係は不明。
35	市神社本	岩焔寺系B	岩焔寺の木版立山禪定登山案内図を拡大模写して制作されている。制作者と岩焔寺宿坊家との関係は不明。
36	高橋家旧蔵本	岩焔寺系A	岩焔寺中道坊と師檀関係を結ぶ越後系魚川の信徒が文政期に制作した。
37	称念寺A本	その他	称念寺のオリジナル。
38	称念寺B本	その他	称念寺のオリジナル。
39	村上家本	その他	図柄モチーフは一見すると岩焔寺宿坊家に伝わる立山曼荼羅諸本と類似しているようにも感じられるが、微細に見た場合、オリジナル性が強く感じられる。
40	藤縄家本	その他	構図・図柄はオリジナル。
41	称名庵本	その他	称名庵のオリジナル。